

財団法人中国四国酪農大<sub>学</sub>校創立30周年記念

# 30年のあゆみ

平成7年11月

財団  
法人

中国四国酪農大<sub>学</sub>校



新校舎イメージ図

校 歌

財団法人 中国四国酪農大学校

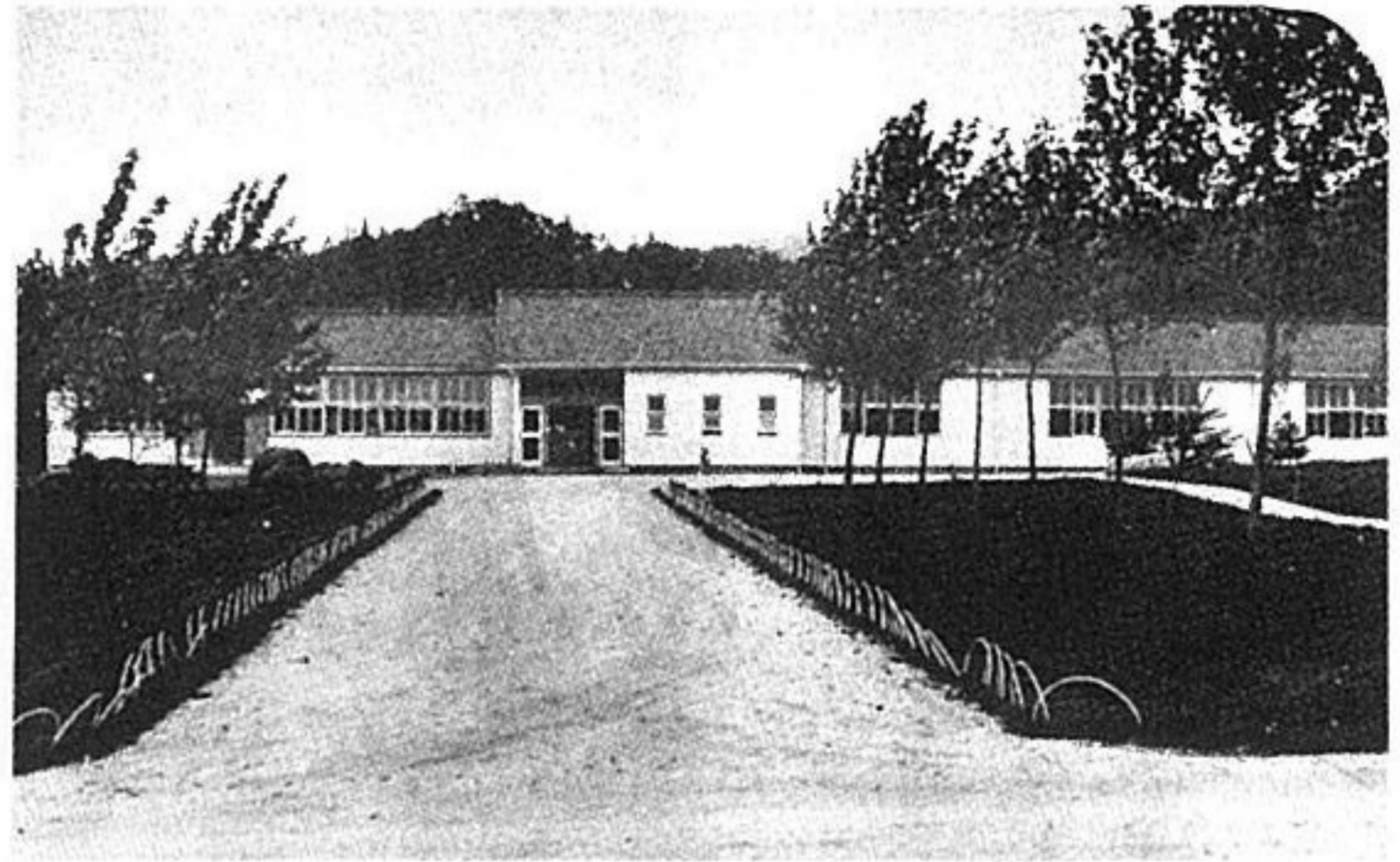
ひる - せん - の の はてと おくあ  
 お げばた か し だ い せん - や み  
 よ こんべき - の そら<sup>12</sup> の も - と は  
 た<sup>3</sup> ひる が えすわ<sup>か</sup> が ほ ころう  
 が や か に か が - やか に

- 一、 蒜山の野の涯遠く  
 仰げば高し大山や  
 見よ紺碧こんぺきの空のもと  
 旗ひるがえす我が母校
- 二、 平和の鐘の鳴り出づる  
 若き世代の朝ぼらけ  
 希望燃え立つ酪農の  
 道は我らと共にあり
- 三、 くれないもゆる頬をあげて  
 力のかぎり逞たくましく  
 行けや我友若人よ  
 栄光永久とわに輝やかに  
 輝やかに

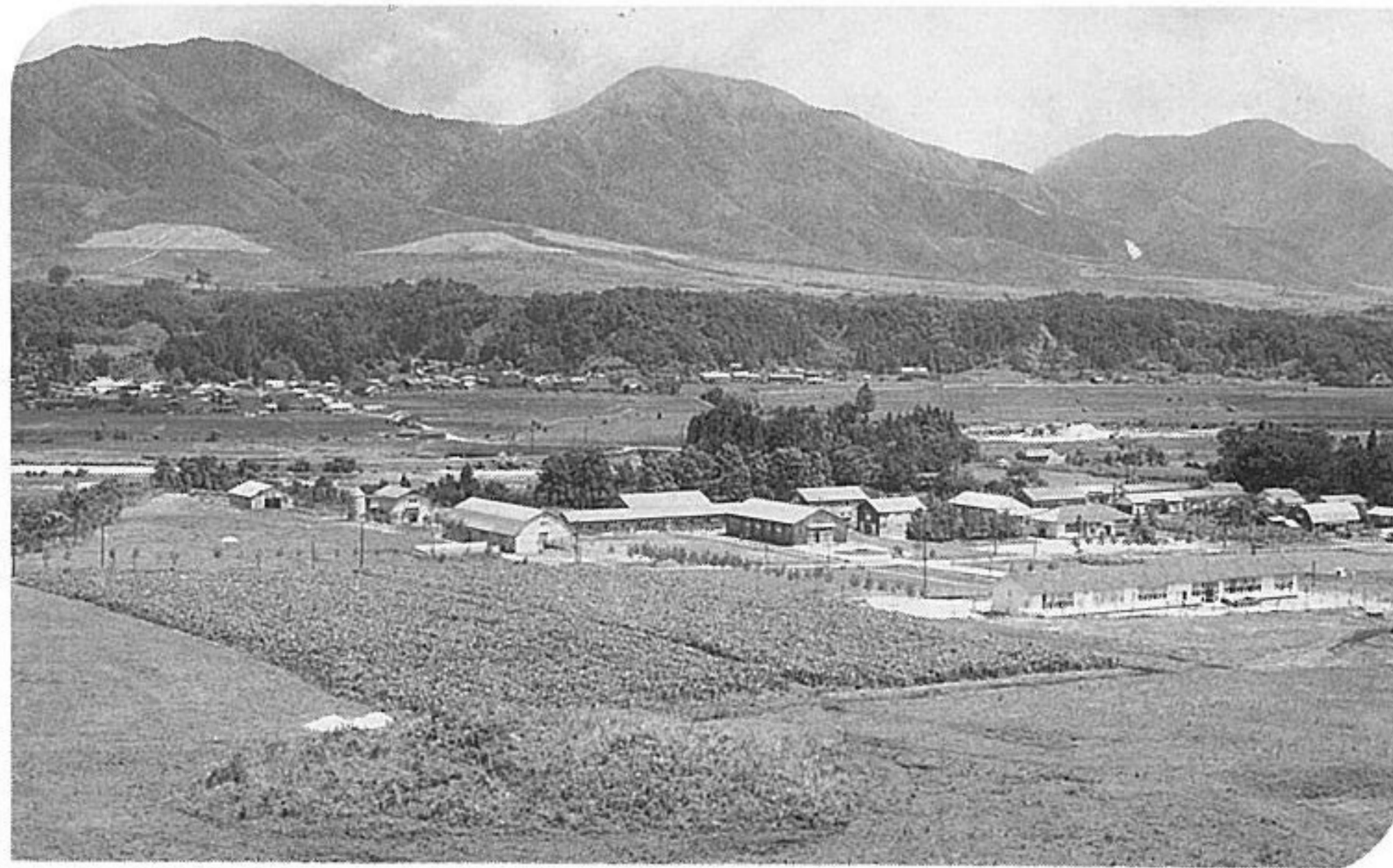
# 学 校 全 景



昭和39年 本校



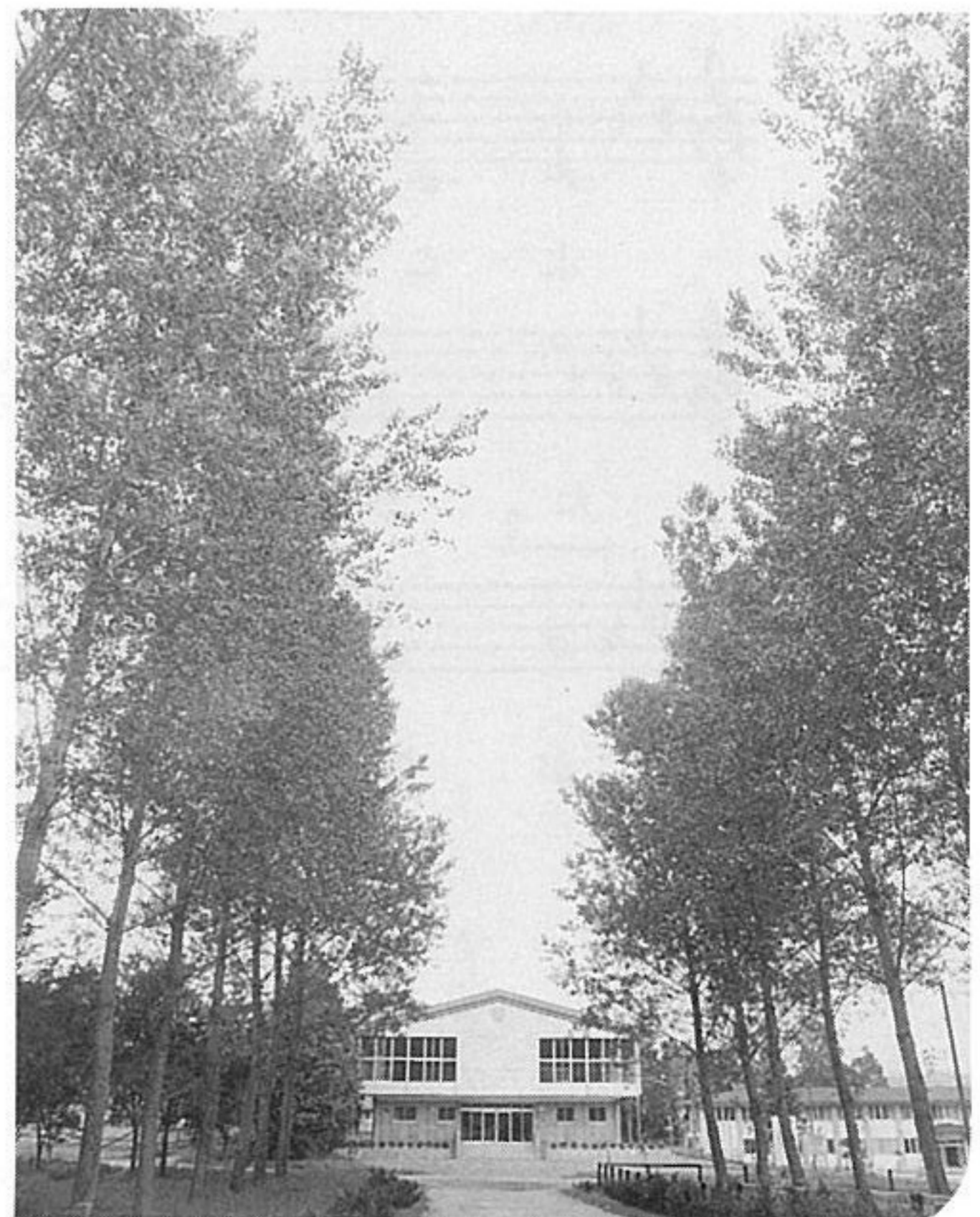
昭和42年 本校



昭和45年 本校



第1牧場成牛舎（昭和50年）



本館より体育館をみる（昭和53年）



平成 3 年



第 2 牧場 (昭和42年)



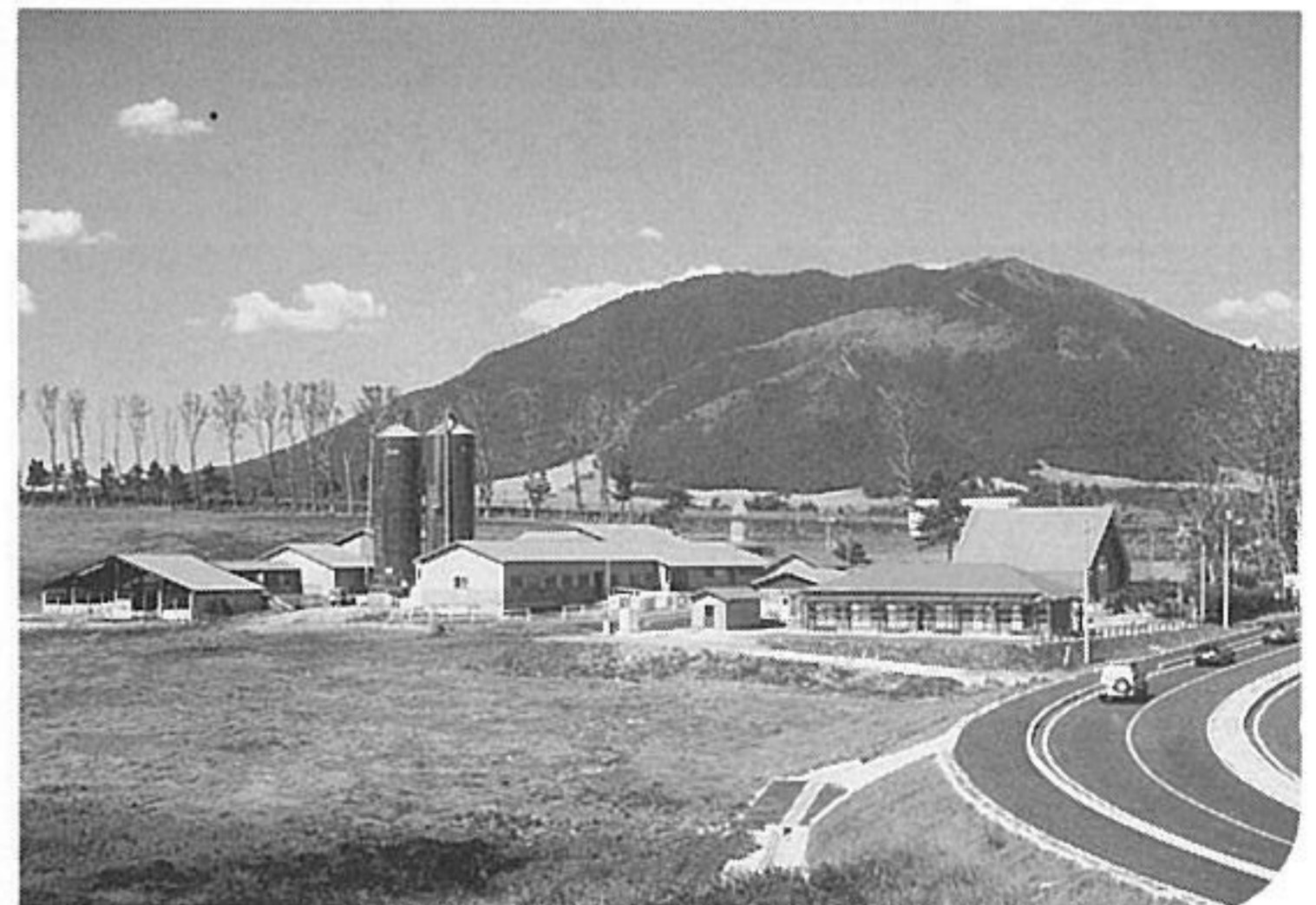
ポプラ並木 (昭和55年)



第 2 牧場 (平成元年)



第 2 牧場 (平成 6 年)

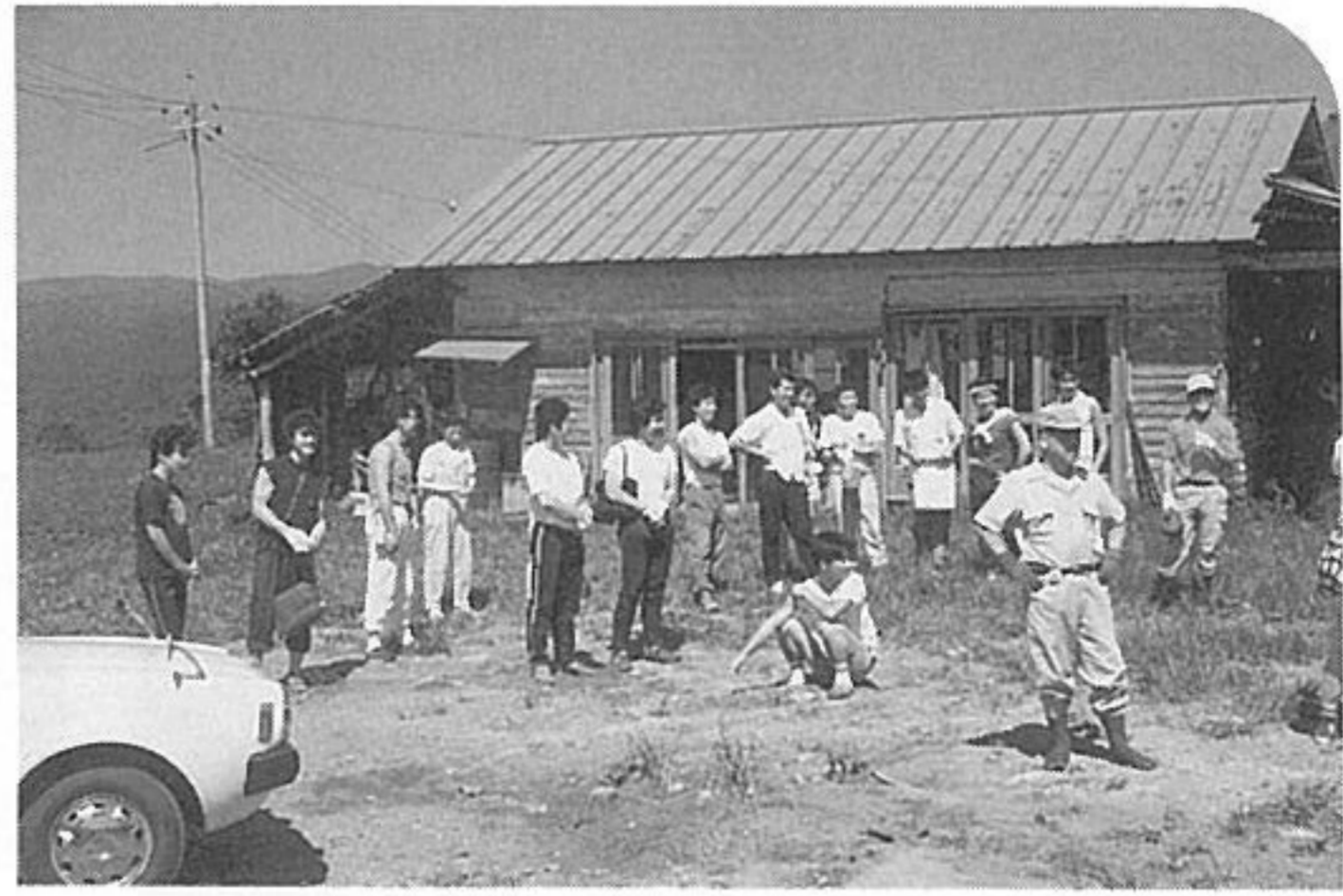


第 2 牧場 (平成 6 年)

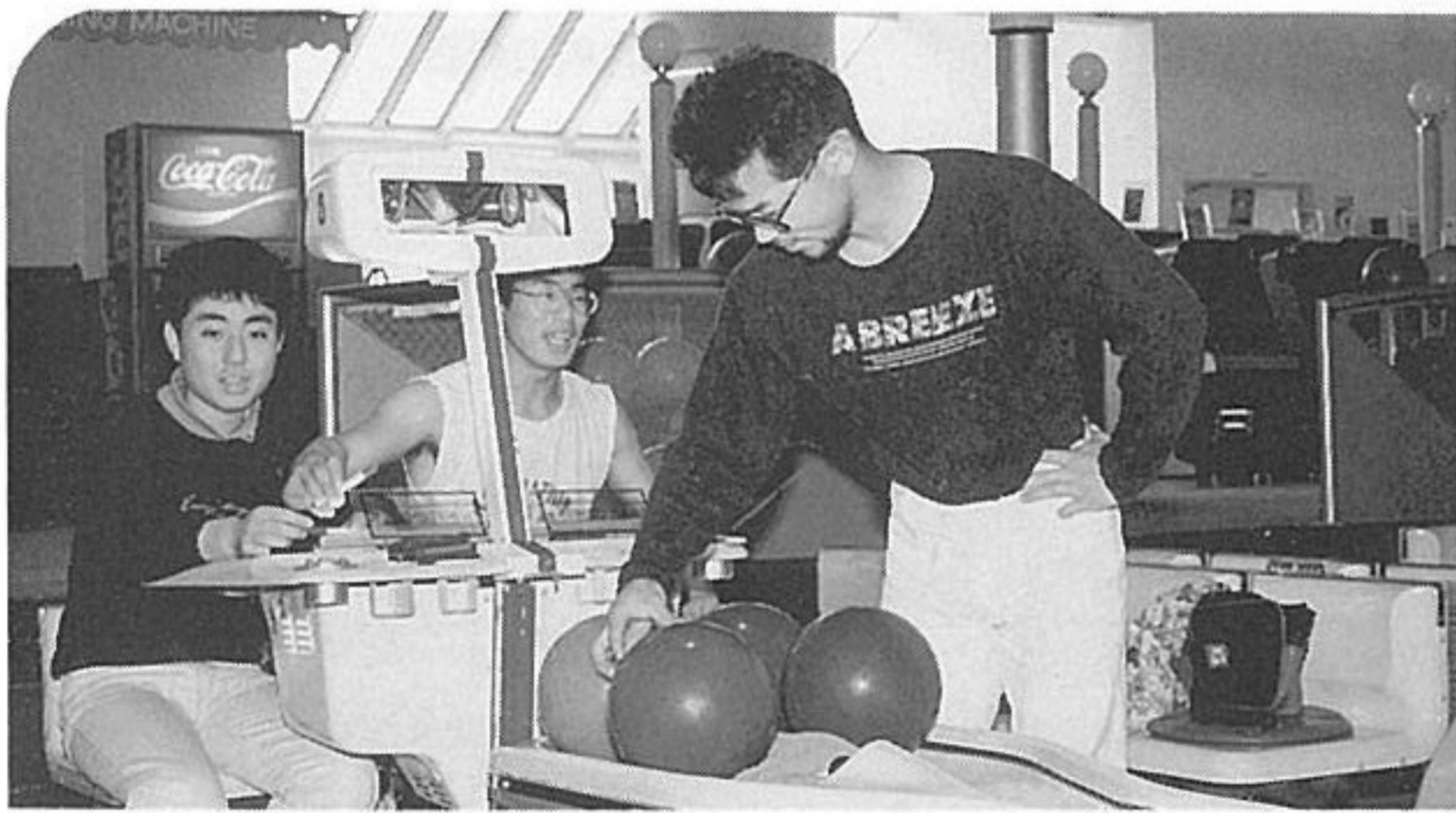
# 学 園 生 活



ソフトボール



これから蒜山登山



ボーリング



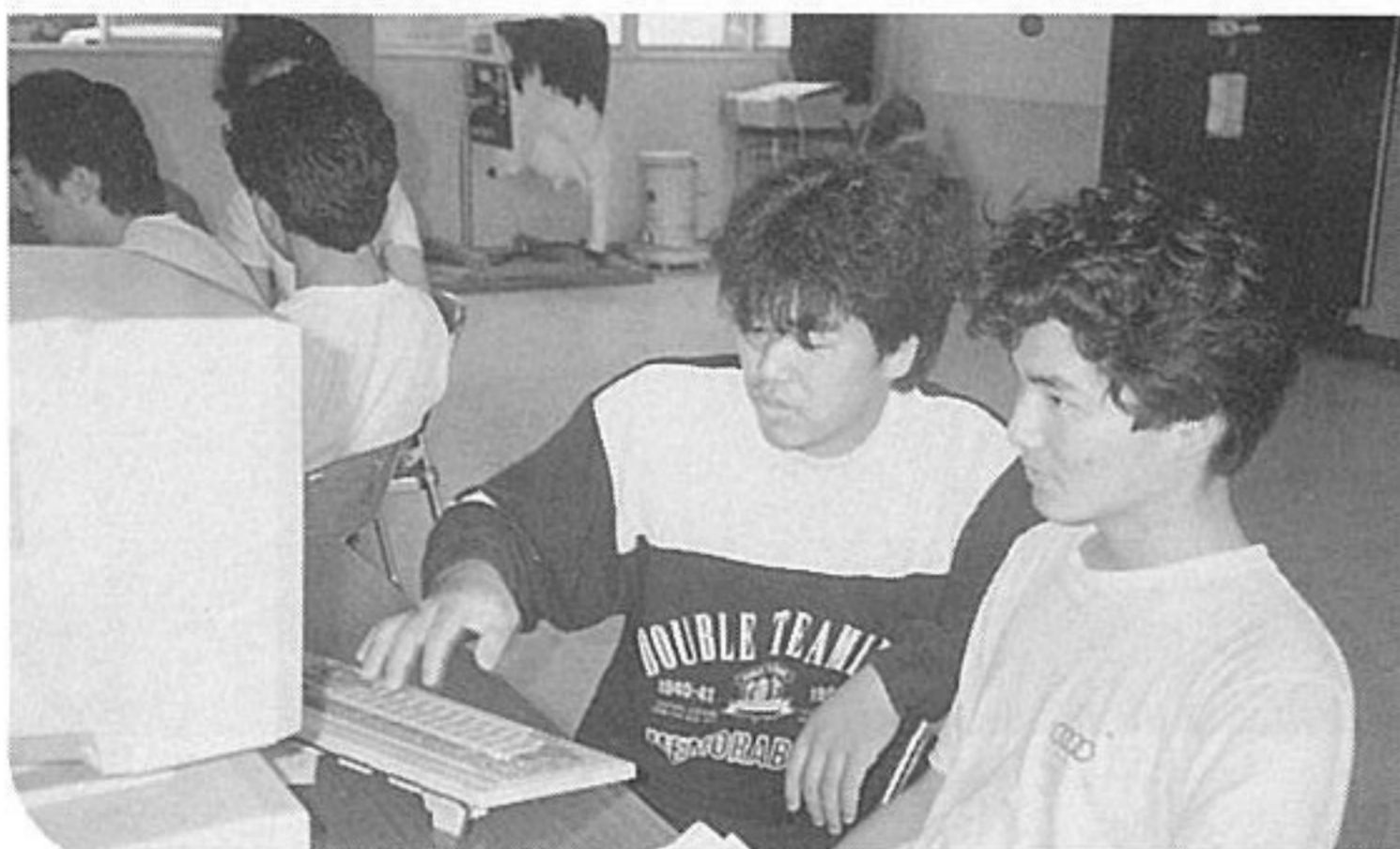
楽器演奏



粗食 (ウナ井)



バレーボール



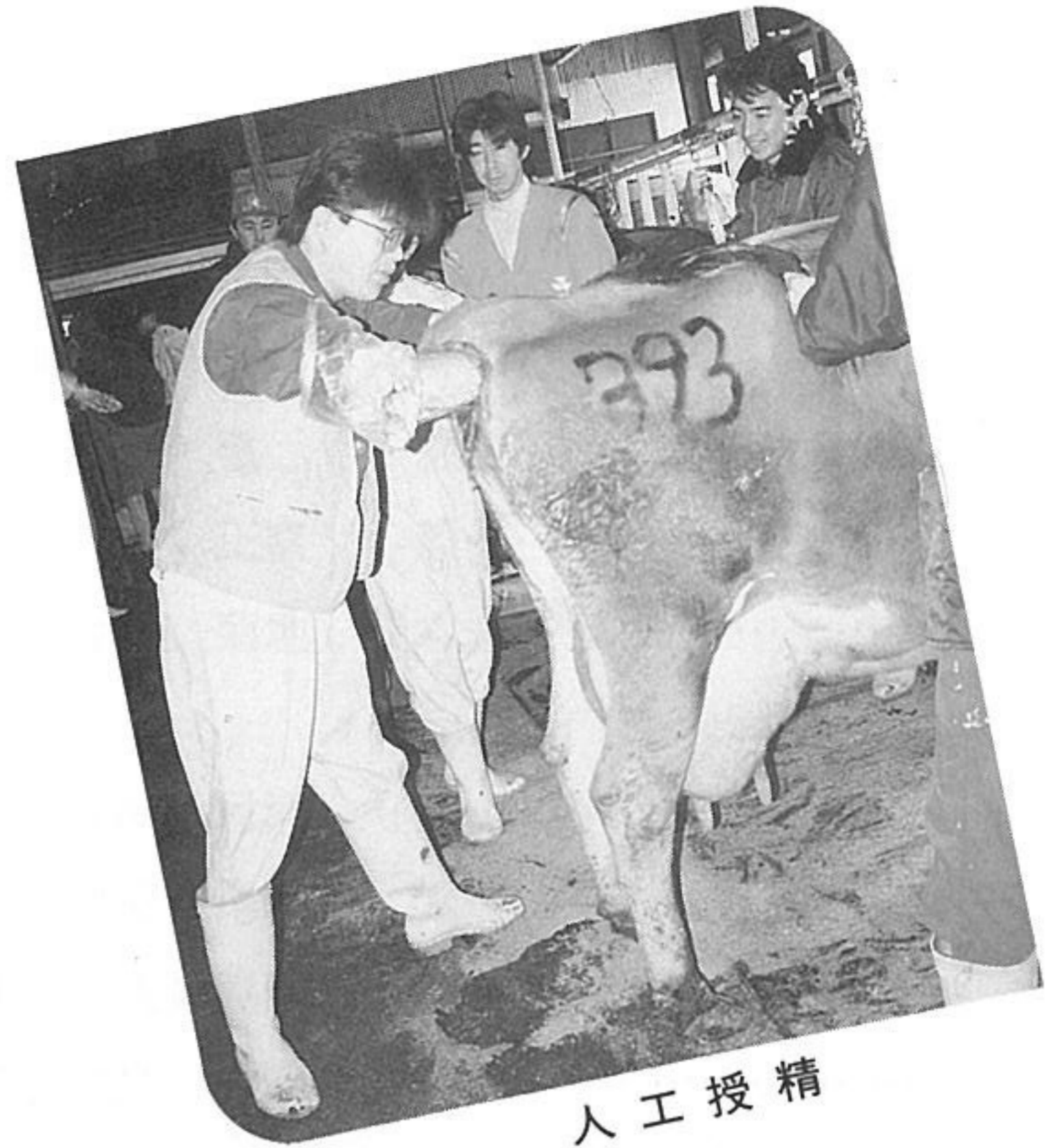
パソコン実習



乳製品製造演習



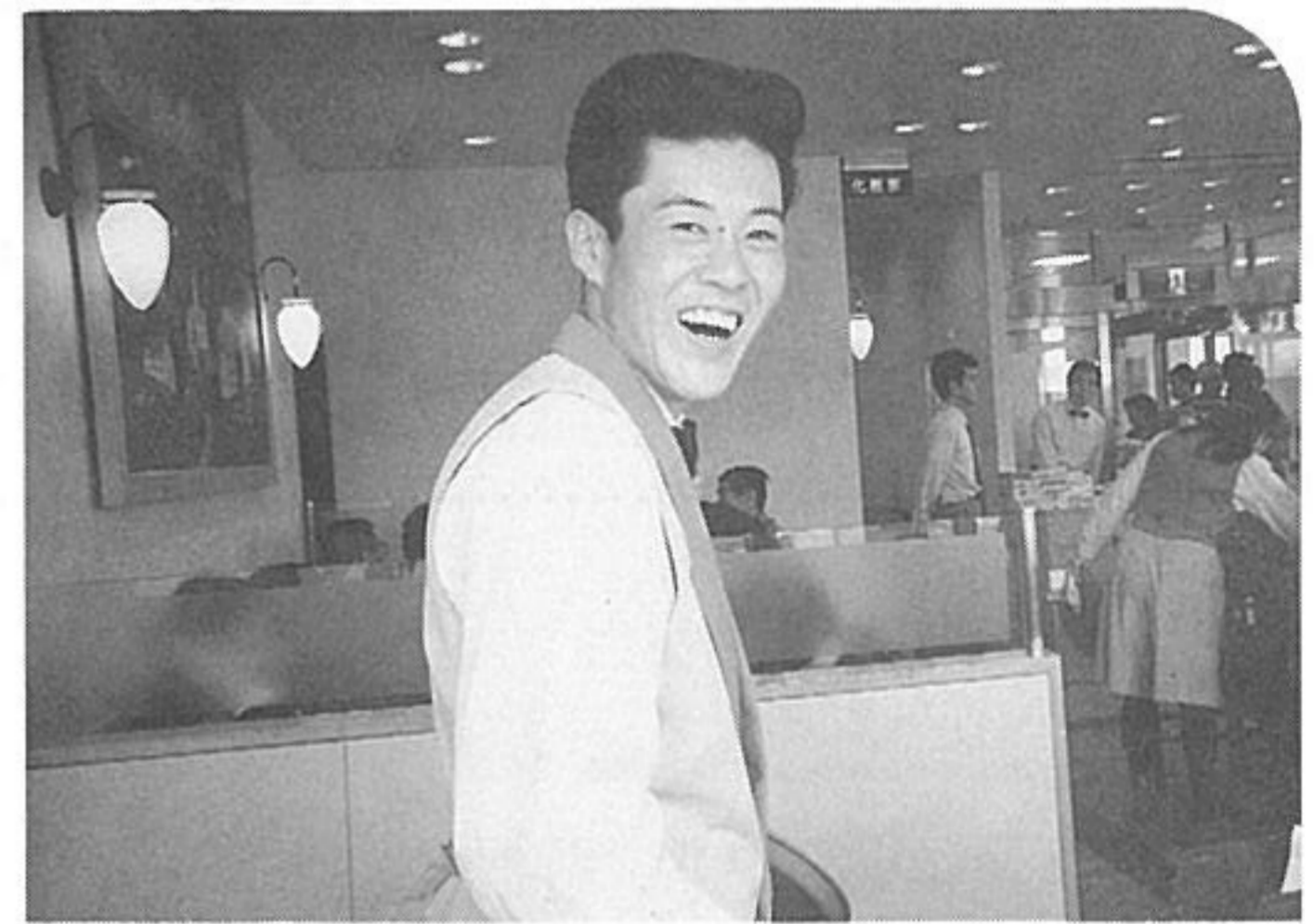
永井先生の講義（牛群検定分析）



人工授精



削蹄



アルバイトに精を出す



運動会に参加



スキー



天の岩戸引きに参加



乗馬

## 目 次

1. ごあいさつ	(財)中国四国酪農大学校 理事長	長野 士郎	1
2. 祝 辞	農林水産省中国四国農政局長	山口 保身	1
	地方競馬全国協会会長	甕 滋	2
	川上村長	正富 毅	4
	(財)中国四国酪農大学校同窓会会長	菊地 俊六	5
4. 30周年に寄せて			
	岡山大学教授	目瀬 守男	6
	鳥取大学教授	尾崎 繁	7
	岡山県酪農農業協同組合連合会		
	代表理事会長	山崎 博文	8
	地元川上村茅部地区		
		桑田 茂	9
5. 酪農大学校が目指すもの	(財)中国四国酪農大学校長	古好 秀男	11
6. 現役員名簿			12
7. 歴代校長、副校長			13
8. 思い出			
「20年のあゆみ」より			
○ 県立酪農大学校創立時の思い出の記	元教務課長	花尾 省治	15
○ 「これからの酪農」	元校長	惣津 律士	17
○ 「苦心惨澹中国四国酪農大学校の発起			
	元岡山県農林部長	山下 肅郎	19
旧職員 三秋 尚、守屋 典彦、永井 仁、日笠 重雄			20
	奥 一郎		
9. 酪農大学校に入学して			
	住田 善一、土井 里恵、小松原理恵、小笠原正芳		28
10. 酪農大学校の沿革			32
11. 写真でつづる30年			36
12. 同窓生ふたくみ			44
13. 酪農大学校の研修生を受け入れて			
	愛媛県	宇佐美鈴枝	52
	京都府	野村 拓也	53
	岡山県畜産会社 事務局長	内藤 照章	55

14. 卒業生の思い出	57
(兵庫県) 齊藤 仁孝、(鳥取県) 小谷 茂、(島根県) 石橋 守、(広島県) 野崎 幸雄、前田万里子、(山口県) 松田 芳行、 (香川県) 古川 亜紀、(徳島県) 兼松 裕子、(愛媛県) 松浦 幸央、(高知県) 増田 泰男、(岡山県) 千葉 靖代、筒井 一、(長崎県) 中岡 信治、(北海道) 田村 正司	
15. 酪農大学校と共に	
津田 清子、池田 富幸、樋口 照夫	72
16. 校外講師一覧表	75
17. 学科目担当講師名簿	76
18. 現職員名簿	78
19. 旧職員名簿	80
20. 出身県別卒業生及び在校生の状況	88
21. 卒業生就業状況	90
22. 卒業者名簿	91
23. 編集後記	





## ごあいさつ

財団法人中国四国酪農大学校  
理事長 長野 士郎

ポプラ並木が立ち並び、ジャージー牛が広々とした草原で草をはむ風景の美しい蒜山高原に、財団法人中国四国酪農大学校が創立されて、今年で30周年を迎えました。

ここに、永年にわたって本校の育成強化に御尽力を賜りました関係機関の皆様方に深甚の謝意を表する次第であります。

財団法人中国四国酪農大学校は、昭和40年に地域のリーダーとしての酪農後継者を養成することを目的として創立され、今年まで751名の卒業生を送りだしており、その大半が酪農後継者として活躍しているところであります。

この間、酪農を取り巻く情勢は、昭和40年代の生乳の増産体制、昭和54年からの生乳の計画生産、さらには、牛肉並びに牛乳・乳製品の自由化等大きく変化してきました。

しかし、本校卒業生は、このような情勢の変化にも的確に対応しながらそれぞれの地域において、中核的なリーダーとして足腰の強い酪農経営を続けておりますことは、誠に心強い限りであります。

今後も、国際化の進展等、畜産情勢の変化が予想されるなか、本校では本館を整備し、AVルーム、情報処理室、ハイテク実習室等設備の充実により、新たな時代に対応した教育を行い、21世紀を担う人材を養成することとしております。

また、国際感覚を身につけた酪農後継者の養成に努めるため、オーストラリアの酪農専門学校と姉妹縁組を結び学生相互の交流を行うとともに、ゆとりある酪農経営をめざして、酪農ヘルパーの養成を推進することとしております。

今後とも、近代的な環境のもとで、21世紀を担える優れた酪農後継者の養成に努力して参りますので関係各位の特段の御援助御協力をお願い申し上げ、御挨拶といたします。



## 祝 辞

中国四国農政局長  
山口 保身

この度、財団法人中国四国酪農大学校がめでたく設立30周年を迎えられたことに対しまして、一言お祝いを申し上げます。

貴校は、高度な技術を身につけた酪農経営者を養成し、酪農の健全な発展を図ることを目的として、昭和40年に設立されて以来、実践的かつ近代的な専門教育を中心とした教育を推進されてこられました。その結果、貴校を卒業された多くの方々が、酪農経営の最前線において、地域のリーダーとして各地で御活躍されておられますことは誠にたのもしい限りです。このことはひとえに関係者の皆様方の御尽力の賜物であり、深く敬意を表する次第であります。

さて、最近の我が国の酪農を取り巻く情勢をみますと、国内的には、昨年の猛暑等の影響によ

り、飲用をはじめとする生乳需要が大きく伸びる一方で、生乳生産は前年を下回って推移し、生乳需給はひっ迫化傾向にあります。

また、国際的には、ガット・ウルグアイ・ラウンド農業合意に基づく乳製品の関税化が本年4月1日から実施されましたが、不足払い制度を前提として、高水準の関税相当量の設定及び畜産振興事業団による国家貿易の維持等を確保することによって、実施期間中における国内への影響を最小限にとどめることとしております。

しかしながら、中長期的には国際化の進展に伴い、徐々に国際市場からの影響が強まっていくものと考えられますことから、今後とも、需要に見合った計画生産を的確に実施しつつ、酪農経営の体質強化を一層強めていくことが重要であると考えております。

一方、酪農は投資規模が大きく、投資の回収に長期を要するため、生産者等から中長期的な酪農の施策展開の方向を示して欲しいとの強い要請があります。

このため、農林水産省といたしましては、現在、平成17年度を目標年次とする「農産物の需要と生産の長期見通し」及び「酪肉近代化基本方針」の策定並びに「家畜改良増殖目標」の改訂を進めているところであり、その中で酪農の中長期的な施策展開の方向付けについて検討しているところであります。

また、中国四国農政局におきましても、管内地域の実情を踏まえつつ、農業・農村の将来展望が切り拓かれるよう、何が求められ、どのような施策が可能なのかについて所要の調査、検討を進めているところであり、酪農経営の体質強化が図られるよう引き続き全力を挙げて取り組んで参る所存であります。

以上のような状況の中にあって、我が国の農業・農村が、今後、健全な発展を遂げていくためには、技術及び経営管理能力に優れた担い手の育成・確保を図ることが最重要な課題であると考えます。特に若い活力に満ち、たくましい創造力と行動力に富んだ人材が今後の我が国酪農の発展のために不可欠であります。

近年、貴校への入学生は年々増加しておりますが、更に、酪農ヘルパー専門技術養成研修を実施され、管内のみならず西日本各地からの参加者に対する教育が行われており、酪農経営の支援体制の確立と21世紀を担う人材育成推進を図る上で貴校に期待するところは誠に大きなものがあります。

今後とも、幅広い知識を身につけた酪農後継者及び技術者の育成を図る観点から、貴校の役割が一層発揮されますよう、関係各位の更なる御尽力をお願いいたしますとともに、貴校の益々の御発展と関係者の御健勝と御活躍を祈念いたしまして、私のお祝いの言葉といたします。



## 財団創立30周年の歩み発刊によせて

地方競馬全国協会

会長 齋 滋

この度、財団法人中国四国酪農大学がめでたく創立30周年を迎えられ、その記念行事の一環として「30年のあゆみ」を発行されますことを心からお喜び申し上げます。

創立以来、学校の運営及び教育の実務に当たってこられました関係各位の並々ならぬご尽力に対し衷心より敬意を表する次第であります。

貴校は、地元岡山県のイニシアティブにより中四国各県と兵庫県の10県を構成員として昭和40

年に酪農後継者の養成を目的に設立されました。こうした広域行政圏で自治体が共同して人材の養成にあたるという、当時としては全く新しい発想により発足され今日に至るまで数多くの地域の中核となる後継者や、中堅指導者を養成されてこられました。即ち、貴校の実学を中心とするカリキュラムの下に酪農を営むのに必要不可欠な諸知識や技術の習得はもとより、経営者として求められる広範かつ高度な経営管理能力に至るまで一貫した教育により、酪農に関する総合的な能力を備えた優秀な卒業生を数多く送り出しております。

そしてその卒業生は、管内のみならず最近では全国各地でも活躍されていることは周知の通りであります。

教育内容の充実に加え、施設の面でも困難な状況のなかで、その時々の養成や技術革新に対応し、逐次拡充、充実を努められ、この度は本館等の建直しを進められ、めでたく竣工の運びとなりましたことを重ねてお祝い申し上げます。

また、平成3年度からは酪農ヘルパー全国協会の実施する酪農ヘルパー養成研修機関としても指定を受け、その委託養成施設として各地の研修生を受入れ養成に努められておられるところであります。近年、我が国の酪農にとって大きな課題の一つは、いわゆる「ゆとりある酪農経営の実現」であります。このため酪農ヘルパーの存在は極めて重要となりつつあります。しかも経営者が安心してその仕事を委ね得る秀れた技術を持つ質の高いヘルパー要員の確保が不可欠であり、その養成が強く求められております。貴校は、この点でもこれまで人材養成の経験と実績を生かされ、おおいに期待されているところであります。

ご承知のとおり、我が国の畜産、殊に酪農は、経済の高度成長に伴う国民所得の向上により、食生活の高度化、多様化等による需要の増大に対応し順調に発展し、今や我が国農業の重要な基幹作目となっております。

しかし、近年の畜産を取り巻く情勢は、昨今の経済の停滞による需要の伸びの鈍化、畜産環境問題、後継者問題、円高及び昨年ワット・ウルグアイ・ラウンドの農業合意の実施に伴う一層の国際化の進展等内外ともに非常に厳しい情勢になっております。このような状況にあって、我が国畜産が日本農業の基幹作目として存立していくためには更なる経営の合理化、省力化、低コスト生産の推進、品質の向上を図るとともに新しい技術の導入等による経営の体質強化に加え、高度の技術を実につけた経営能力の高い農業後継者の育成確保が不可欠であります。その意味からも貴校の果たす役割は今後益々重要となるものと考えます。

当協会としましても、酪農をはじめ畜産の分野における後継者の確保、人材の育成は、我が国の畜産の振興を図る上での基礎となるものであるとの認識の下に、貴校に対しましてもこれまで微力ではありますが支援をさせて頂いてまいりました。今後とも出来る限り協力させていただく所存であります。

貴校におかれましては、創立30周年をひとつの節目とし、この輝かしい歴史を踏まえられまして、21世紀の日本酪農のため、今後さらなる前進をされますよう心から祈念し、お祝いの言葉といたします。



## 祝 辞

岡山県真庭郡川上村長

正 富 毅

蒜山三座が紅葉彩る候、財団法人中国四国酪農大学校創立30周年を迎えられ、記念式典と同時に本館建設竣工式を挙行されるにあたり、地元川上村民に代りお祝いの言葉を申し上げます。

貴校は、昭和40年11月岡山県立酪農大学校から発展飛躍され、財団法人中国四国酪農大学校として改組開校され、酪農自立経営者の教育養成機関として発足以来、30年の歴史をこの地に礎かれたのであります。

創立初期の昭和42年早春には、大学校内で昭和天皇皇后両陛下の第18回植樹祭お手幡き行事が行なわれ、学生と共にジャージー牛を供覧され、次いで43年には第1回全日本ジャージー大会が本村で開催され、いずれも貴校の多大の御協力をいただいたことに対し、深く敬意を表する次第であります。このように創立初期からの貴校との密接な関係から、貴校の歴史は本村の酪農発展の歴史でもあり、創立30周年と言う節目に改めて思いを新たにしますものであります。

今日まで酪農経営士として卒業された数多くの皆様は、貴校において修得された酪農に関する様々な科学的知識と、牧場において流汗額にした実践的な技術を生かし、厳しい環境にある酪農界の先駆者として活躍されていることと存じます。

現在、時代の流れは多様化し変化の速度が加速し、これに対応できる豊かな個性が求められています。貴校はオーストラリアの酪農専門学校と姉妹縁組を結ばれ学生相互の交流に取り組んでおられますが、新たな酪農教育が要請される今、貴校に期待される大きなものを感じずにはられません。また新築された本館は、酪農教育の学舎としてだけでなく、本村の牧歌的風景を一層引き立て、広く一般に親まれるものと期待しております。

創立30周年記念式典、本館建設竣工式は貴校の輝かしい伝統を顧みながら、将来を展望する極めて意義のある二重の慶事であり、心よりお祝い申し上げます。

どうか今後とも全校一致の御努力と関係各県の御協力により、貴校が益々隆盛なる前途を開拓され、本日の30周年式典、本館建設竣工式が真にその礎とならんことを、また貴校の教育目標の追求により酪農教育に専念され、一層の発展を遂げられますよう念願いたし、併せて校長をはじめ教職員各位の御健勝をお祈りいたしましてお祝いの言葉といたします。



## 祝 辞

(財)中国四国酪農大学校同窓会  
会 長 菊 地 俊 六

財団法人中国四国酪農大学校創立30周年を迎えられましたことを同窓生に代りお慶び申し上げます。

この30年を顧みますと、本校は岡山県立酪農大学校から財団法人中国四国酪農大学校に改められたのが昭和40年です。800名を越え900名ちかい酪農経営士を送りだし各地で酪農発展向上へと頑張っております。

昭和40年代から50年前半までは酪農は飛躍的な発展期で経営は大型化し安定していた時期でした。

昭和54年には経営は安定したものの牛乳の生産は需要を大きく上回ることになり計画生産が実施されることとなりました。この頃から経営努力が強く望まれるようになりました。その後牛肉の自由化によって仔牛、廃用牛の価格は暴落となり酪農経営は非常に厳しいものとなりました。ウルグアイランドの妥結も必ず経営を圧迫することになりましょう。

このような状況の中で同窓生は努力し頑張っております。

この時期に創立30周年式典が行われ本校発展を期されますことは極めて意義深いことであり、今後も新しい技術力と経営感覚のすぐれた酪農経営士を送りだし酪農発展に大きく貢献されることを望んでおります。



## 財団法人設立30周年に寄せて

岡山大学農学部教授

目 瀬 守 男

本校設立30周年を迎えられ、心から御祝い申し上げます。設立当初から現在までの30年間を省みますと感無量でございます。

歴代の校長先生を始め多数の教職員の方々の御苦勞に想いを馳せますと、いろいろとお世話になりました事等が走馬燈の様に思い出されます。

この30年間、わが国経済は高度経済成長から低成長へと変化しましたが、優秀な酪農後継者養成と言う理念に立ち上られた皆々様の意気にふれ、不肖私もお手伝いさせて戴くことになりました。美しい蒜山高原の緑と空気にふれる度に、明日への活力が体中にわいてきて、いつもリフレッシュした自身に立ち戻る事ができました。

農業経営学や農業経済学の講義を担当する非常勤講師として、当初から今までに900名の卒業生諸君に接することが出来ましたことを本当に光榮に存じます。

さて、記憶の糸をたぐりますと、30年間のうち、当初の10年間は岡山から中鉄バスで通い、後の20年間はマイカーで往復しました。宿泊は当初から「むさしや旅館」にお願いしました。むさしやさんの変らぬ気くばりと暖かい雰囲気にもまれて、30年の間にはつきない思い出が一杯あります。

20年程前のある冬の時期、午前中から降っていた雪が講義を終える頃には胸の高さにまで達し、数名の先生方が「人間ブルトナー」さながらに雪かきをしながら「むさしや」さんまで送って下さった事がありました。その時の皆様の御好意を今でも鮮明に憶えております。また大雪で岡山に帰ることができず、むさしやさんに居らして戴いた事もあり、昨日の様に思い出します。冬の白い雪、夏のきれいな緑、美しい蒜山高原のうつり変りと共に歩んだ幾星霜でした。

ところで、この30年間、わが国農業は大きく変化してきました。現在は戦後50年を経過しましたが、その間牛乳需要のライフサイクルから見ると三つの段階を経過してきたと思います。戦後から昭和34年までを「導入期」としますと、35年から52年までは「成長期」と云えるでしょう。昭和53年から現在までは「成熟期」と云えるでしょう。今後牛乳需要は「飽和期」に入る事が予想されますが……、もうすでに飽和期に入っていると云えるかもしれません。その様な意見の方もおられる様です。国際化も含めて、現在は厳しい状態の中にある事には変わりありません。

時代はさかのぼりますが、三木知事時代の施策の重点事項の一つに酪農振興がありました。昭和29年の国の酪農振興法の制定を受けて、昭和30年に美作地域（津山、蒜山）が集約酪農地域に指定されました。これより先、昭和29年にはジャージー乳牛が蒜山に導入されました。これが「乳の流れる里」として、現在の蒜山農業を観光開発との端緒となっています。そして昭和36年に酪農大学校が開設されました。その後名称が変り、昭和40年、財団法人中国四国酪農大学校となり、現在に至っています。

私は津山市の出身でありますので、美作集約酪農地域指定前後の津山市周辺の農村の動きに大変関心を持っていました。この様な背景から、私は京大大学院の修士論文の課題を「美作高度集約酪農地帯における酪農経営の発展に関する研究」（昭和32年3月）としました。それ以後酪農には関心を持ち続けています。

戦後50年、財団法人設立30年、農業や酪農をめぐる国際環境は、極めて厳しさを増しています。平成5年12月、ガット・ウルグアイ・ラウンド交渉の最終合意により、農業の貿易自由化が一段

と進んできています。この様な背景の中で、岡山県では「岡山県農産物等国際化対策協議会」（会長、筆者）を設置し、「国際化に対応した岡山県農業の展開方向」（1994）を答申しました。

この答申の中で、酪農については思い切ったコスト引き下げを図るため、スーパーカウの導入や効率的な飼養管理施設の整備と技術革新、公共育成牧場の育成強化などを取り上げています。また環境保全型酪農の確立、意欲ある担い手の育成、消費拡大と流通改善などを併せて推進するよう指摘しております。

ともあれ、農業や酪農は人間の生命に係る重要な産業であります。そして、酪農の発展にとって後継者の養成、確保は極めて重要な課題であります。本校がこの課題に応え、多くの人材を養成し社会に送り出されることには大きな意義があると思います。本校の益々の発展をお祈り致しております。



## 「酪農施設学」とともに27年

鳥取大学農学部

尾崎 繁

私と本大学校とのお付き合いは、1969年（昭和44年）3月に初講義をして以来のことですから、ことしで27年目になります。クラスは卒業直前の第3期生36人で、「乳牛舎と付属施設の設計と管理」と題して午前、午後各3時間のぶっ続け講義をしました。この時の学生諸君はいま40代半ば、第一線でバリバリ活躍しておられることと思います。

そのころ、私は鳥取大学農学部で「農業施設学」の講義を担当し、農業および畜産に関わる生産施設（ライスセンター、温室、畜舎など）の合理的設計方法を研究しておりました。とりわけ酪農関連の牛舎や付属施設に関心を持ち、単に工学的な視点からだけでなく、経営的に採算の合う牛舎建設の必要性を強く意識するようになっておりました。しかしながら、このような研究はまだ緒についたばかりで、きわめて学際的な分野でした。当時、わが国の酪農は牛乳消費の急速な伸びに応じて、「加工原料乳の不足払い制度」（1965）や「第一次酪農近代化方針」（同年）が相次いで決まり、本格的な飼養規模の拡大期に入ろうとしていました。また、「総合施設資金」という長期低利返済の制度資金が設けられ（1968年）、大型牛舎の建設を資金的に援助し始めたのもこの時期です。私のみならず酪農家の関心が牛舎施設に集まってきたのも、このような背景があったからです。

4月になると、5期生39人が入学してきました。当時の学生は入学すると9月まで第1期（前期）の講義を受け、10月から翌年9月まで自営実習を行い、10月から卒業まで再び第2期（後期）の講義を受ける仕組みとなっておりました（1988年まで）。修業年限2年のうち、通産すると講義と実習が各1年間となります。したがって、5期生が実習に出ると、入れかわりに前年入学した4期生が戻ってきて講義を受けるわけです。これに合わせて、私も新年度から5、4期生に前期と後期の講義を10時間ずつ受け持つことになりました。後期になって実習を終えて戻ってきた学生諸君と再開すると、1年前に比べて急におとなっぽくなっていることを、いつも印象深く感じたものです。

1973年になると講義時間が倍増し、前、後期20時間ずつ、年4回（1回2日連続）となりました。通算するとこれまでに90回余、蒜山を訪ねたこととなります。講義名も当初は「農業施設」でしたが、1974年からは「酪農施設」に、そして79年からは「酪農施設学」と改称されました。

この27年間、3期生から31期生まで、私の拙い講義を受けた学生は約830人ほどになります。地元蒜山地域はもとよりのことですが、あちこち思いがけぬところで卒業生との再開があります。12期生（1978年卒）の加倉井英彦君もその一人です。1989年夏、別の用事で茨城県を訪ねたとき、時間があつたので地元の県北酪農協に紹介していただいで見せてもらったのが、偶然にも加倉井君のところだったのです。卒業後アメリカで研修、帰国してからフリーストール牛舎を建築、40頭搾乳を目標に奥さんと一緒に頑張っていました。学生時代の思い出やこれからの酪農について、ひとしきり話し合ったことが懐しく思い出されます。

ふりかえって見れば、この27年間はまた、わが国酪農が欧米並みの規模に追いつき、牛舎施設にも各種の新技术が次々と導入された時期でもありました。牛舎関係だけでも慣行のストール牛舎にフリーストール牛舎が加わり、前者ではパイプラインミルク、バルクミルククーラ、バークリーナ、気密サイロなど、後者ではミルクングパーラ、コンプリートフィーダ、ロールペーラなど数え切れません。しかし、施設・設備の拡充には莫大な資金が必要な一方で、過剰投資の危険がたえずつきまといましますし、土地の狭いわが国では飼料生産やふん尿処理（環境）問題が規模拡大を阻んでおります。

内外の酪農情勢は牛乳生産のいっそうのコストダウンを強く迫っており、それを実現するための適正な飼養規模、日本型の牛舎施設のあり方など課題が山積しています。牛舎についていえば、これまでの人間本位で考えた牛をただ収容するだけの建物というのではなく、牛にとって快適な生活ができる住居としての役割が強調されるようになりました。今後はこのような点に配慮しながら、「酪農施設学」をさらに充実させたいものと、この機会に思いを新たにしております。あわせてこの記念すべき創立30周年を、関係者の皆さまとお祝いできますことを心より感謝するしだいでもあります。

おわりになりましたが、財団法人中国四国酪農大学校の益ますのご発展と、卒業生各位のご活躍を心よりお祈り申し上げます。



## 財団法人中国四国酪農大学校創立30周年によせて

岡山県酪農農業協同組合連合会  
代表理事会長 山崎博文

財団法人中国四国酪農大学校が昭和40年11月に創立され、ここに30周年を迎えられお慶び申し上げます。

その間中国四国はもとより、全国から多くの酪農家の師弟また酪農を目指す若者を、蒜山山麓の広大な自然に囲まれたすばらしい環境のなかで実践的な技術と近代的な感覚の教育をされ、それぞれが持ち場で活躍しており、また卒業生の80パーセント以上が酪農後継者としてまた経営者として自営に携わっております。更には地域のよきリーダーとして活躍しており、酪農の発展、向上に大きな貢献をされていることにたいし、歴代の校長をはじめ教職員の方々のご尽力に心から敬意と感謝を申し上げます。

また酪農ヘルパーの養成機関としても大きな貢献をされ、すぐれた人材を育成され、岡山県内で貴校ならびに貴校のヘルパー講座の卒業生が専任ヘルパーとしてすでに12名が活躍しており、あわせて感謝を申し上げます。

さらには、雄大な蒜山の自然と言えども、第2牧場の草地とジャージー牛の放牧風景は蒜山を



語る時無くてはならないものとなりました。

さて、この30年間は岡山県の酪農にとってまさに激動の時代であったと言えます。

戦後酪農が導入され昭和29年には「酪農振興法」の制定とも相俟って酪農家戸数は昭和37年には1万戸に手が届くまでに発展しました。更に昭和41年4月の「不足払法」の制定により確実に発展を続けましたが、昭和40年代には我が国の高度経済成長に反比例するように酪農家戸数は急速に減少するとともに規模は拡大に向かい、40年代後半は経済の発展、牛乳消費の伸びとともに生乳の生産も急速に伸びてまいりました。

その後第2次オイルショックを乗り切った酪農界ではありますが、消費の停滞により昭和54年より生産者自らの実施による計画生産の時代に入り、安定的発展を目指す時代へととなりました。

平成にはいりますと、飽食の時代、輸入の自由化、環境保全問題とうとう時代は大きく様変わりをし、食品も多様化また消費者の好みも多様化し、量から質へと変換しております。

バブル経済の崩壊後は経済は停滞を続けており、今後は消費者とともに新たな需要を掘り起こさなければなりません。

平成7年度からは乳製品は完全自由化となり、我が国の酪農を取り巻く環境はますます厳しくなって来ております。

しかし国民に良質な蛋白質を供給し国土を保全する酪農の重要性はますます増して来ております。また食品の安全性、地球の環境にたいする関心も強くなっております。その証拠として貴校への入学者もたいへん多くなり、とりわけ女子学生の姿が目につきます。

このような我が国の酪農を守り、国際競争力に打ち勝って行くためには経営体質の強化が急務であり、すぐれた経営はたしか知識とすぐれた技術によって成り立ちます。今後貴校にたいする期待はますます大きくなってまいります。

財団法人中国四国酪農大学校本館の新築と創立30周年を機に、新たな伝統のうえに酪農教育にますますのご発展を祈念いたします。



## 財団法人設立30周年に寄せて

川上村・茅部

桑田 茂

川上村大字西茅部字茅部地内に財団法人中国四国酪農大学が創立されて30年。心より「おめでとうございます」。お祝いを申し上げます。

この間900余名の卒業生を全国各地へ送り、今や日本酪農の中核となって懸命に御努力されておられるとの事は地元に住する者のひとりとして誇り高い気持ちであり、この歴史こそ先見性を見極め将来への確固たる人材育成への道であったものと、敬意を表するものであります。そして今、希望溢れる殿堂と言うべき学舎が天高く聳える時計台の基に新築され、ますます発展して参った事、私達が遠くより眺めても胸躍らされるものがあります。最近では学園近くで仕事などしていません時、学生の語らい、賑やかな笑い声などを耳にする事がしばしばであり、特に女子学生の積極的な生活ぶりと申しましょか、勉強の姿勢に頼もしい期待を伺わせるものがございます。このようなすばらしい学園が村の一角に「でん」と構え活力を生み出している事は、全国でも稀であろうと自負せざるを得ない気がしておるところでございます。

この充実発展の陰には30年以前よりの隠された苦難の道乗り越えた職員の方々の御努力が

あった事を忘れることが出来ません。ここにいくつかの思い出を述べさせて戴きます。

昭和20年代岡山県は八束村中福田に家畜保健所を設置和牛は勿論、乳牛の飼育にも目を向けられ、浅羽、三秋両先生が中心となられ、大変な苦勞をされておられました。当時私は両先生と「かじや部落地内の同じ屋根の下」で半年程お世話になった時、ニュージーランドでの牧場の話、更にジャージー牛の買い付け、横浜港からの牛の輸送のつらさ、これからの飼料の確保、乳価の問題、今後の蒜山での酪農の重要性等、全く無知な私は、ただ珍しい話ばかりで、盃を汲みかわしながら聞かせて貰うだけで過ごしておりました。

昭和32年茅部の地に岡山県立酪農試験場蒜山分場が誕生、茅部、笠木の農家の方々の田畑草地在り提供され、酪農のメッカが築かれる礎となりました。本館・官舎・畜舎・倉庫・大型農器具等開村以来の新農家経営の第一歩であったわけで、時の村長亀山乾氏の御努力と伺っております。それからは茅部の里も一変し、三浦場長を始め、岸川、広友両先生方の御家族様が見知らぬ村へ越して地元の茅部小学校へ通学されるなど賑やかになったもので大変有り難たい時代でもありました。

ところが、田部・大蛇の児童が才ヶ岬<sup>さいがたわ</sup>を通学した時、仔牛に追われ逃げまどうというハプニングがおこり、その対策に戸惑った事もございました。更に忘れてならない事として最も光り輝いた出来事、それは昭和天皇の蒜山地域への行幸であります。現本館前に天皇御自身の御手によって立派な苗の植樹に与った感激の一時で今もってすくすくと成長した樹木を見るに当時を偲びます。

また若い職員さんとの交流を深めるため、役場、局、農協、小中学校の職員さんとの野球大会を開き、後で懇親会を設け大さわぎとなってお互いに顔見知りとなり親しくなりました。そして冬は常守先生の御指導を戴き、現北東向斜面の牧草地をスキー場にさせて戴き茅部小学校のスキー大会、蒜山スキークラブのスキー講習会等で終日銀世界の牧草地が賑わったことも忘れる事が出来ません。勿論職員の方々も大喜びで滑っておられました。

昭和36年岡山県立酪農大学校開校、一段と基盤が整い、県下各地より生き生きした学生諸君が入学、全寮制での学園生活が始まったのであります。生活はきびしく、早朝より第2牧場へ、乳牛の飼育・搾牛と実習を重ね、学問を探究し、酪農の担い手としてしっかり身に付けておられたようで感心しておりました。反面若い人々は、夜になると、三々五々夜半賑やかな一団が、帰ってくる？中福田のどこかで……息抜きか、いやいや将来への論争か？若者の元気さであろうと？また体育祭には得意の足で参加して貰った方もおられました。

昭和40年財団法人中国四国酪農大学校の創立、体育館、女子寮、すっきりしたテニスコート等、時代の流れに則し、今や中四国のみならず、遠方よりの学生や女子学生が増えて、大きな乳牛の世話、草刈機を使つての作業、大型トラックに乗って牧場整地学、颯爽としたお姿に接するこの頃、蒜山体育祭には全員参加。村のイベントには多くの諸君が挑戦と、良き思い出を胸に秘めて卒業される事は、この上ない喜びであります。

しかし時代はきびしい、酪農も大変だと思いますが、天下の酪農大学校として学生諸君の活力と職員先生方の創造を期待して、蒜山茅部の地に咲いたすばらしい特色ある学園を充実発展させ、全国の若者が「わんさ」と押しかける財団法人中国四国酪農大学校と成長されんことを願うものであり、地域をあげて応援致します。この輝かしい創立30周年記念に寄せて、私的視点ではありますが感無量の心を込めて記しました。今後の発展を、お祈り申し上げて筆を置きます。



## 酪農大学校が目指すもの

財団法人中国四国酪農大学校  
校長 古好秀男

早いもので、財団法人中国四国酪農大学校が発足してから30周年を経過することになりました。この間、本校に対し、国、県、構成県、川上村、八束村及び地方競馬全国協会並びに関係団体の絶え間ないご指導、ご支援を賜りまして、年々施設整備の充実を図り、今日までに約900名近い卒業生を送り出し、その86%が酪農後継者、畜産関係に就農し各地域で中核リーダーとして活躍しておりますことは、誠に喜ばしい限りでありご同慶にたえません。ここに改めて、関係者に心から厚くお礼を申し上げます。

今年は、蒜山の地域にジャージー牛が導入されて40周年、本校が開校して30周年と同時に関係者の長年の念願でありました本館の竣工、更には、平成7年4月からの輸入自由化に伴ない、国際感覚を持った酪農後継者を養成するために、オーストラリアのビクターハーバー校との姉妹縁組を結ぶなど、酪農大学校にとりましては、21世紀に向けての新しい教育方針の基礎造りをする歴史的な記念すべき年でもあります。

酪農大学校が目指す酪農実践教育の基本的な理念は、創造性の豊かな行動力と国際感覚を持った幅の広い酪農後継者を養成するところにあります。

又、全国酪農ヘルパー協会の指定を受け、酪農ヘルパー研修所として今日までに、約80名の研修生を送り出し全国各地の第一線で活躍しているところでもあります。

酪農大学校は、創立以来多くの先人達の血の滲む様な絶え間ない努力によって発展して来ましたが、昭和41年頃に主要な施設を一度に整備をしたために、今日では、施設も老朽化しており、教材としての役割を果し兼ねておりますので、今後は環境整備を含め、一日も早く時代に合った教材としての新しい施設に整備することが余儀なくなっておりますから、何分共に関係者の格段のご理解とご支援を賜りますよう節にお願い申し上げます。

特に、輸入自由化時代を迎え、国際感覚が強く求められる今日、人材の養成ほど重要な課題はないものと思われまます。

幸いにして、酪農大学校は、開校当初から実践教育のあり方について検討し、自宅研修から校内研修、校外研修等を試行錯誤した結果、今日では、1年生においては、校内で充分酪農関係の基礎を学び、2年生においては、4月～11月までの8カ月間の中に2カ月おきに全国の酪農家を対象に研修場所を選定し、酪農家で校外研修を実施するに至って成果をあげております。

実践教育に優る教育はないと思いますが、人には、それぞれ感情や相性があり、繰り返し訓練をして、体で覚える教育は非常に難しく、教育を受ける者も、又教育をする者もお互いに根気と忍耐のいる仕事であり、毎日の訓練の積み重ねが優秀な人材を養成する錠なのです。

人間の人生には、自分の将来を見透すことが出来ない悲しさから遠廻りをするところがあると思いますが、世間一般に言われている良い意味での「あの人」を目指して、真の実践教育を精力的に粘り強く実施したいと思っております。







最後になりましたが、創立30周年を機に、酪農後継者の養成実践教育が、酪農発展にとって如何にあるべきかを充分検討し、長期展望に立脚した教材としての施設整備の充実を図り、更なる発展の基礎を築き、その役割を果すために限りない努力をして参りたいと考えておりますので、関係各位のより一層のご理解とご支援を賜りますよう伏してお願い申し上げます。

## 現 役 員 (平成7年11月現在)

役職名	氏 名	所属団体及び職名
理事長	長野 士郎	岡山県知事
理 事	和田 秀樹	岡山県農林部長
理 事	古好 秀男	勸中国四国酪農大学校校長
理 事	藤原 久嗣	兵庫県農林水産部長
理 事	伊藤美都夫	鳥取県農林水産部長
理 事	今岡 康彦	島根県農林水産部長
理 事	今井 基	広島県農政部長
理 事	秋本 博之	山口県農林部長
理 事	町田 勝弘	香川県農林部長
理 事	石島 一郎	徳島県農林水産部長
理 事	真田 明志	愛媛県農林水産部長
理 事	溝渕榮一郎	高知県農林水産部長
監 事	菊地 弘美	島根県農林水産部次長
監 事	水上 武雄	山口県農林部次長

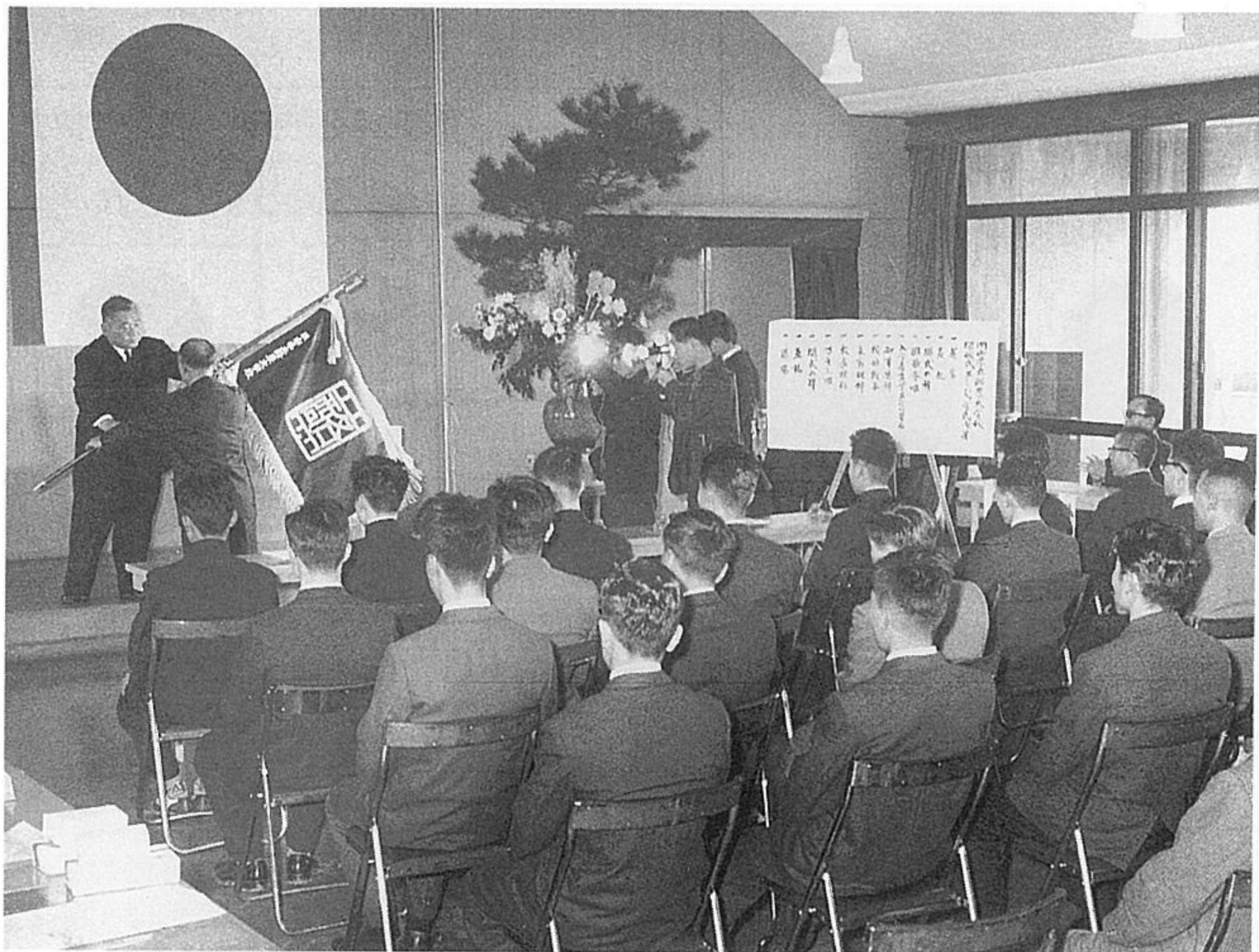
役職名	氏 名	所属団体及び職名
評議員	内藤 照章	岡山県農林部畜産課長
評議員	谷本登久雄	兵庫県農林水産部畜産課長
評議員	前田 茂樹	鳥取県農林水産部畜産課長
評議員	安部 哲夫	島根県農林水産部畜産振興課長
評議員	中西 英三	広島県農政部畜産課長
評議員	佐戸 映治	山口県農林部畜産課長
評議員	湊 恵	香川県農林部畜産課長
評議員	吉田 建設	徳島県農林水産部畜産課長
評議員	伊賀 正	愛媛県農林水産部畜産課長
評議員	上田 孝道	高知県農林水産部畜産課長

## 歴代校長・副校長

校		長		
(県立) 初代	(財団) 初代	2代	3代	4代
				
惣津 律士 (S36.12~38.3)	蔵知 毅 (S38.4~42.5)	花田 時太 (S42.5~48.3)	金島 卓司 (S48.4~49.3)	田淵 志郎 (S49.3~51.4)
副		校 長		
				
		永井 仁 (S48.4~53.3)		

校		長		
5代	6代	7代	8代	9代
				
信江 茂 (S51.6~53.3)	花房 清人 (S53.4~54.7)	三宅 茂 (S54.7~55.12)	宮本 宣明 (S55.12~57.3)	三村 剛 (S57.4~59.3)
副		校 長		
				
永井 仁 (S48.4~53.3)		竹内 秀雄 (S53.4~55.3)	服部 剛 (S55.4~57.3)	

校		長		
10代	11代	12代	13代	14代
				
石田正之 (S59.4～現在)	植月昌彦 (H元4～3.3)	雛川信昭 (H3.4～6.3)	原 真一 (H6.4～7.3)	古好秀男 (H7.4～現在)
副		校 長		



県立酪農大学校の開校式  
校旗授与式

# 想 い 出

「20年のあゆみより」(昭和60年11月発刊)



## 県立酪農大学校創立時の思い出の記

花 尾 省 治

(昭和36年12月～38年3月＝教務課長)

岡山県立酪農大学校創立の思い出について述べたいと思います。戦後の蒜山は、冬は積雪にうもれ、夏になると砂塵を吹きあげる曲りくねった山道を小型バスにゆられながら長い時間をかけてやっとのおもいで、たどり着いたものでした。当時、生活をささえるものは、米・黒牛・馬・タバコ位のものだけで、わびしい寒村で、従って農家経済は、低いものでした。この蒜山を陽のあたる場所にしようと、偉大な時の指導者・故三木知事と情熱の人・故惣津畜産課長のお二人が国を動かし、ジャージー牛導入の指定にこぎつけたのでした。昭和29年秋、川上・八束・中和・二川・湯原の5カ町村に黒牛しか見たことのなかった村に、可愛いバンビのような乳牛が導入されました。続いて、昭和30年12月、1市5カ町村が「美作集約酪農」国の指定となって「乳の流れる里」蒜山高原建設に向けて拳県一致体制がひかれ、指導体制の整備、営農改善、飼養管理、5千ヘクタールに及ぶ原野の草地造成に向けて(美作地域大規模草地改良事業)トラクターのエンジンの響きも高く草原の開墾が進められました。大規模草地は34年秋から調査が始められ、事業実施は36年からでした。

ところで県立酪農大学校の建設は、三木県政の「酪農振興」の一環として昭和36年12月1日の開校となり、初代校長には本県の酪農建設に情熱を燃やされた惣津律士農林部次長に白羽の矢がたれられ、就任されました。入学式は12月1日午前9時から県庁9階ホールで、三木知事をはじめ、30名の第1期生(うち、県内26名)、関係者百数十名が出席して行われました。知事からは「酪農によせる県民の期待は大きい。今後も酪農振興には力を入れてゆきたい。惣津校長のもとによい校風を作ってほしい」と、熱のこもった告示がありました。続いて知事の手から惣津校長の手にしっかりと校旗が手渡されました。更に入学生の宣誓署名が行われ、厳粛のうちに希望に満ちた入学式典は終わりました。その時の情景は、今も臉に焼きついています。

或る日突然、部長室から呼び出しがかかり、当時、部長・次長は同室でしたお二人の前で「お前、惣津校長の補佐役として酪大にゆかぬか」と言われ、一時ためらったものの惣津校長の下でのご奉公であり了承いたしました。

新入生の授業は12月10日から3月末までが第1期となっていました。蒜山原に建設中の校舎ができるまでの間、津山市の県立酪農試験場の一部を間借りして1期生4カ月の授業実習を行ないました。専任職としては私の外に、三秋尚飼料研究主任、事務担当は小谷哲夫主事補だけのこじんまりしたメンバーでのスタートでした。2期生から本格的に蒜山の新校舎で授業実施となりました。

思い出の2～3を取りあげてみますと、①新校舎移転の年は古老もびっくりする程の30年来にない程の大雪に見まわれ、一時交通麻痺の状態です食糧不足となり、2米余の雪を除いてのカンラン掘り出し、牛の藁不足で近くの農家の藁を買い取り、慣れないスキーでの藁運び、②今、亭々と天に向かって伸びているポプラ並木は、職員の方達が食前作業で苗木をスコップの長さと同じ深さに掘り、1本1本丁寧に汗流して植えたものです。③三木ヶ原での種まきは、学生・先生が





## これからの酪農

元初代校長  
元岡山県畜産会長 惣 津 律 士  
元岡山県酪連会長

最近の酪農ムードにつられて、簡単に酪農経営がやれるように思う人が案外多いのではなかろうか。一般に酪農家の経営知識が乏しいとは、よくいわれる言葉である。しかし経営戦略のみで、乳牛は十分な能力を発揮してくれるはずはない。酪農をやる上に必要なすぐれた知識と技術と土性骨を酪農家が身につけているかどうかによって、これからの酪農の勝負が決まるのではなかろうか。

貿易自由化になると「酪農はペシャンコだ」とはよく聞かされる言葉である。そして酪農家は限りない不安をいただいている。しかし私は決して貿易自由化を恐れる必要はないと思う。日本は日本なりの特色ある酪農を樹立すべきである。このためにも国も県も、団体も乳業者も、同一方向に向かって研鑽、努力すべきである。地域の立地条件を最高度に活用して、われわれ酪農人の協同の力で創造した酪農は、やがて自由化のアラシの中で大きい発言の地位を占めるであろうことを私たちは期待して努力すべきである。

私は一昨年12月に蒜山に設立された県立の酪農大学の初代責任者として赴任してしまい、将来酪農経営者たらんと志す若人たちと起居をともにし、昼も夜も酪農の前途を語り合う機会にめぐまれた事は、私の生涯を通じて最良の年であったと思っている。

今でこそ人づくりという言葉が使われているが、当時は口にする人はなかった。これからの酪農に近代的なセンスと技術と知識をもった青年が必要であることを洞察された三木知事の偉大さは、現地で研修が進められるにつれてひしひしと私は身に感じたのである。

「立派な校風を作ってくれ」と一昨年12月の開校式当日に知事が訓示した言葉を、私たちは深く胸にきざんで「酪農の久遠の城」の建設にまい進したものである。

筋金の入った酪農人の造成が、徐々に蒜山の一角に誕生したのである。

私は学生におりにふれて「君たちは私たちの教えることを通じて、物の考え方、見方を精進する必要がある。うんと本を読み、うんと建設的なディスカッションをして疑問をもつようにせよ。そこに進歩があるんだ」と話した。蒜山のジャージー農家で立派な成績をあげておられる方々は、すぐれた考え方をしている。農業教育が今日ほど重要性をもっている時はないと私は思っている。

しかし案外、従来の講習施設に人が集まりにくいのはどうしたことか。農村青年諸君が都市へ行く世相は十分に承知できるけれども、教育施設の内容に魅力が乏しいのではないか。今日の農業施策はとかく行政が先行して、教育とか試験研究はあとからトボトボ歩いているせいである。これらの整備とか拡充になるとあとまわしになるのが通例である。農業構造改善事業があすの日本農業を約束するのであるとすれば、よろしく、試験研究機関と教育機関に為政者はうんと配慮すべきであろう。

“酪農は成長株だ”と時代の寵児のようにいわれ、そのムードは華やかである。単行本も雑誌も、もうかる酪農はこうすべきだとか、何ヶ夕農業は酪農からとか、盛んにとり上げている。しかし、そうした表面的な派手さに目をうばわれ、立派な経営はすぐれた知識と技術によってのみ実現できるという簡単な公式を忘れてはならない。アメリカでは、成功する農家は立派な技術者であり、よき経営者であり、そしてすぐれたセールスマンであるといわれているのだ。

酪農経営者は決してなまやさしいものではない。乳牛は海外から導入された。日本的に乳牛そのものを改良する必要もあるし、飼料作物の研究、自給率の向上と、残された問題はたくさんあ

る。しかし、どうしてもやりとげなければならないことであるとするならば、われわれの英知と根柢よい努力によって、いままでの外国のマネに過ぎなかった酪農から脱皮し、日本の風土に合った、農家経営に調和した独自の酪農を築き上げることが、あすの輝かしい酪農をつくりあげるのだと強調したいのである。



惣津律士胸像  
(財)中国四国酪農大学校校門前

## 寮 歌

作詞 惣 津 律 士

- 一、緑したたる陽春に  
    ジャージ遊ぶ蒜山の  
    文化の香りいや高く  
    学園したいて我は来ぬ
- 二、流れは清し旭川  
    北斗の星座仰ぎつつ  
    固き決意の若人は  
    誇りと栄を歌うなり
- 三、錦繡の影映ゆるとき  
    偲ぶや故郷の秋の曲  
    我感傷の夢追いぬ  
    真理の道はいとけわし
- 四、神秘の白衣蛭が峰  
    無限の光ほほえみぬ  
    われらが築きし酪農の  
    久遠の城を来り見よ

「ある農林部長のメモ」から

## 苦心惨澹中国四国酪農大学校の発起

元岡山県農林部長 山下 肅 郎

農業教育、農業後継者養成、と一口にいうけれども、ノート鉛筆、鋤に鎌の時代はいざ知らず、今日の近代化された高水準の施設を揃えて、若い人達をアピールするような教育をしようとするなら大変な費用がかかる。

一つの事例を示してみよう。

岡山県には、他府県に類を見ない岡山県立酪農大学校がある。

これは三木知事の「南に水島工業地帯、北に乳の流れる郷を」という理想主義計画の一環として、乳の流れる郷作りの基幹として、創設されたものである。

蒜山原野は、日本原（勝田郡奈義町）とならんで帝国陸軍の演習地であり、ここに住む人達は冷害とたたかいつつ、水田をつくり、馬と牛を飼育して貧しい生活に耐えていた。終戦後、軍用地は、農林省の開拓財産になり、開拓に転用され、入殖者が入って来た。また、一部は地元の採草地に払い下げられた。

昭和30年この地が酪振法にもとづき集約酪農地域に編入され、国の融資によってオーストラリア、ニュージーランドから1,175頭のジャージー種が入れられた。

県としても、農業史上、これは一つのエポックメイキングな事業であると同時に、貧しい農家が期待をかけて求めた牛だけに、失敗させてはならない。そこで、この地に酪農指導所を置き、技術指導は勿論、人工受精、家畜診療所一切の世話をすることになった。これが酪農大学校の種となった。

酪農大学校は、36年2月県議会の議決を経て建設に着手し、12月に酪農試験場を借りて開校し、37年4月から蒜山の建築が完了したので移転した。

私が改めて申すまでもなく、この種の県営の、農林部が行なう専門教育施設（教育関係ではないということ）としては、他に類例を見ない規模のものといつてよい。それから4年を経た今日においても、随分立派な種畜場や酪農試験場は出来ているが、農林部の独立した酪農教育施設としては、これだけの規模のものは北海道を除いて全国にないといつてよかろう。

ところがこれだけの施設をしても、決して十分ではない。十分どころか、足りないことが一杯である。

第1は施設関係である。

寄宿舍は4人1部屋だが、長期寮生活ではどうも無理である。

トラクター(借物)、カッター等は揃えてあるが、ハイコンディショナー、ハイベラー、肥料散布機、大型播種機、ランドレベラー等がない。生徒教材用の実際の運用と、少なくとも複数の機械を必要とする。

図書室、娯楽教養室が足りない。

第2は先生関係で、山村僻地のため、子弟教育に不便なので、殆どが単身赴任で、土帰月来先生ばかりである。

第3は最も主要なことであるが、ここで生徒は何を学ぶかということである。どうして草をつくるか、どうして乾草をつくるか、牛の飼料をどうして調整するか。そんなことは酪農大学校で

なくても、酪農試験場で十分出来るはずである。講義も県の職員の講義だから、酪農大学校においてはじめて聞けるというものでもない。そのところを、つきつめて考えると、酪農大学校は他県に類を見ない規模をもつ特異な施設であっても、なお中途半端なもので、「酪農大学校なればこそ」というものに欠けているということが出来る。

岡山県の酪農大学校は、このような意味で危機に逢着している。ましてや、中四国各県においても同様であろうことは推測に難くない。

しかしこれを少しでも魅力のある教育の場に再建するには、なお、1億円を超える投資を必要とする。こんなことを、各県それぞれが設置するということは、およそナンセンスである。非経済もはなはだしい。

そこで中四国農政局とも相談して、中四国酪農大学校に編成替えをする。そのために地方競馬全国協会から、地域開発のための補助金を貰ってくる。中四国9県に兵庫県を加えて、財団法人を設立して運営する。かような趣旨で中四国農林部長会議、同畜産課長会議に話を持ちかけたが、各県ともに、小さいながら、一応畜産技術者の養成施設はあって、それが施設不十分で運営もうまく行っていない。生徒も思うように集まらないということで、いずれもなやみの種となっている最中である。患部は切ればよいというのは正論であるが、行政ともなると在るものを切るとは容易でない。ましてや、今の今までその施設整備で、予算を要求していた農林部長にとっては、岡山に共同施設をつくって、中四国一本にし、立派な酪農大学をつくるから、もうこれは廃止するとか、予算はそちらに出資する方に切り替えてくれとは、なかなか切り出し難い。岡山県に対し競争意識（単に農村のみのことでない）の強い県においてはなおさらで、その辺が反対の中心になる。

それやこれやで、農林部長会議だけでは決め難いから、知事会議に持ち出してくれということになり、県議会議長会（40年2月12日）、知事会議（40年1月11日）に議題として提出することになった。もっとも、これは中国だけで四国各県の知事さんへ依命によって、四国行脚をして依頼をして廻った。

会議をする度に、岡山県が折れて、経営費の赤字は岡山県が負担する、職員は岡山が出向させる、各県の出費は一応10万円とする、というようなことで漸く話が軌道にのって来た。

しかし次の問題が控えている。ほんとうに立派な中四国酪農大学校の設立である。私が県を去るに当たって、気がかりなことの1つになってしまった。

## 旧職員



## 岡山県立酪農大学校創設当時の思い出

元岡山大学、宮崎大学教授 三 秋 尚

（昭和36年12月～昭和38年3月）

### 薄もやの中の記憶

昭和36年12月1日 岡山県立酪農大学校資料研究室主任を命ずる、兼ねて岡山県立酪農大学校助教授を命ずる、兼ねて岡山県酪農試験場勤務を命ずる。私の酪農大学校創設当時の思い出は、この辞令を受け取った日にさかのぼる。

当日は大学校の開校式と入学式が県庁大ホールで行われた。当時世間では、酪農業発展への教育的布石という斬新な構想の実現に関心が集まり、その将来に大きな期待が寄せられていた。と

ころで私は、その日の感慨や情景を何一つ明確に覚えていないことを、本稿の執筆依頼を受けた時に気づいたのである。ユニークな酪農大学校の船出に係わった者の一人として、当日の記憶は私自身の脳裏に深く刻まれていると無意識的に信じていただけに、愕然たる思いであった。

古希を過ぎた男の頭脳には、もはや30数年前の過去を思い出すだけの力はなく、その後の記憶も不確かである。薄もやに包まれたような記憶の中で、上司であった初代の惣津律士校長と花尾省治教務課長が、今は彼岸の国へ旅立たれたことのみが鮮明である。思い出はお二方の墓石への祈りに始まる。

### 仮校舎からの出発

県立酪農大学校は津山市太田の旧岡山県酪農試験場の施設の一部を借りて、職員4名からの出発であった。同試験場の講堂が講義室に、短期講習生宿泊施設が学生の宿泊所に、講堂付属休憩室が職員室に、そして旧場長室（当時、試験場場長が新設されていた）が校長の執務権宿泊室に当てられた。職員は前記の惣津校長と花尾課長、それに小谷哲夫主事補（現蒜山教育長）と小生の4名で、講義は主として大学と県の農業改良専門技術員の方々を講師に迎えて行われた。

試験場のある小丘を吹き抜ける木枯らしに見舞われながら、地域を代表する形で選ばれた学生たちの共同生活と授業が始まる中で、私は教務の仕事に係わった。夕食後に学生を共同宿泊所に訪ねて彼らの生活と教育相談にのり、しばしば脱線し試験場職員宿舎のわが家で彼らと酒を酌み交わしたのである。

仮校舎の校長室には、県議会議員や酪農団体、さらには農林省関係者が表敬訪問の形で訪れ、大仰に言えば「門前市を成す」の状況であった。このことは酪農大学校が世間に注目された証であろうが、しかし多分に惣津校長の個人的人望によるものである。しかも校長は県農林部次長を兼務し、当時の三木知事とともに大学校創設に努力された経緯があった事情も反映されていたのであろう。来訪の客人はだれもが当時高級な角瓶のサントリー・ウイスキーを持参し、私たちはその美酒のおこぼれを夜ごとに頂戴したのである。

### ポプラ植樹に明け暮れた日々

昭和37年6月1日 兼ねて岡山県酪農大学校農場主任を命ず、兼ねて岡山県酪農大学校教授を命ず、兼ねて岡山県乳牛育成場勤務を命ず、というやけに兼務の多い辞令を受け取り、講堂と学生の宿泊施設が完成した蒜山に移った。本拠地での大学校の業務と教育機構は現在に近いものであると思うが、職員は4名から大幅に増員され、旧酪農試験場蒜山分場の施設・設備を一時的に使用し、酪農の実務と教育が本格的に開始された。

惣津校長、花尾教務課長、小生の3人は旧分場の1戸建て職員宿舎で暮らすことになった。私たちは宿舎で頻繁な学生のストームの洗礼を受け、彼らと共に校歌を歌い、蒜山の遅いだけに目を見張るほどに美しい春、涼味いっぱいの夏、何十年ぶりかの大雪の冬、そして再びの春を送ったのである。学生の途絶えた静かな夜には、3人1室に集まり、酪農教育や研究と教育の有り様を論じ、私はまた、お二方の戦前における内蒙古での牧畜調査事情やエピソードに耳を傾けたのである。

毎日の朝食前作業で、農場に配置された学生たちと校内にポプラを植樹し、午後には校内原野の雑灌木の伐採作業に汗を流し、これらの作業には校長と教務課長も参加されたのである。時を越えて今、亭々としてそびえるポプラ並木は、私にとって当時をしのぶ縁となっている。

当時の農場係員松井栄太郎（現広島市在住）、河合英之（現県立農業大学校勤務）、山本草平（現勝山町在住）、常守実（現地元在住）の皆さんと学生の総力は校内に牧草地を作りあげ、さらに三木が原の原野開墾地に牧草の種子を播き、秋の日夕焼け空を眺めるまで乾草調製に精出したのである。現在の大学校牧場の牧草地には創設時代の若者たちが流した汗が詰まっている。

教務関係の仕事で校外講師との連絡などに係わるほかに、夕食後に学生寮を訪れる私の仕事は津山時代と少しも変わらなかった。

当地に移って間もなく、旧分場時代の正門前の私有地を大学校の用地に譲渡してもらう話が起こり、地権者との交渉役のお鉢が私に回ってきた。幸いこの仕事は関係者の好意により短期間のうちに円満に解決したのである。旧試験場分場の用地提供といい、また大学校の用地拡充といい、すべては地元の人々の絶大なる支援によるものである。今は、彼らの過去の好意に充分応えねばなるまい。

私の薄もやに包まれる記憶をたどった大学校創設当時の思い出は、創業に立ち向かう学生たちの直向きな態度と、それを温かく見守り、積極的な支援を惜しまなかった地域住民の熱き心に収斂されるのである。

ポスト工業文明時代にふさわしい酪農業創造の先駆者たる若き学生の勉学に応え、また地域との共存の道を選んでほしいと思う財団法人中国四国酪農大学校の発展を心から祈って筆をおく。

## 財団法人中国四国酪農大学校 設立当時の思い出



守屋典彦

(昭和41年4月～昭和44年3月)

昭和41年4月県庁で辞令をいただき大いなる夢を持って、今は逝去されました藤川総務部長さんと、狩野・石原の両先輩と4人中鉄バスで蒜山に向かってから、来春で30年がこようとしています。

この間、900名に近い卒業生の方々が県内は勿論、全国各地で活躍されておられることは誠に喜ばしいことで、関係者のご尽力とご指導に当たられた先生方に深く敬意を表します。

私は3年間という短い期間でしたが、諸先輩のご指導を受けながら、学生さんと一緒に頑張っ

て参りました当時を思い浮かべ記してみたいと思います。  
学校の辞令で第1牧場長という職名をいただき、身の締まる思いで一杯でした。これまで5年間の家畜保健衛生所勤務と、酪農試験場で8年間乳牛の飼育管理に携わっており、常に経産牛35頭前後の牛と関わりがありました。

設立当時第1牧場と第2牧場はホルスタイン種35頭の経営で、第3牧場はジャージー種70頭の放牧経営でスタートしました。

赴任当時まず驚きましたことは、計画されていた牛舎施設は勿論、草地管理に必要な最新の機械器具が揃っていたことです。大型のフォーレイジハーベスター・ヘイベラーと大型のトラクターおよびブルドーザーまでが整備されており、この計画を立てられた方々に感心しておりました。

さて、当時は県立の大学校から財団法人の大学校に移行する時期でした。従って建物も第1牧場の方は主に県立時代の建物が使われ、畜舎も同様でした。第2・第3牧場は今だ建設途上でした。

従って、第1・第2牧場に繋がる予定のホルスタイン種の70頭と、ジャージー種70頭が第1牧場にいたようにおもいます(当時全頭は揃ってはいなかった)。第1牧場の畜舎の上にあった畑に牧柵がはられ、その中で多くの牛を飼育したため管理が大変であったことが思われます。

しかし、購入された大部分の牛が妊娠後半の初妊中であったため、第2・第3牧場の放牧草地が入牧出来る状態になって、分娩の遅い牛はそれぞれの牧場に引き取ってもらい、第1牧場は搾

乳牛ばかりとなりました。学生諸君の力を借り早朝から搾乳にとりかかっていたいただいた次第です。

搾乳は、県立時代のタンDEM型のミルクパーラーを使っていましたが、第2・第3牧場に上がっていた牛も分娩が近づくとつれ毎日のように第1牧場に下りて参りました。

旧牛舎の分娩房に繋ぎ、分娩後はパドックの中に入れるわけで、最も多い時が第1牧場のフリーバンとパドックの中で80頭近い牛を搾乳したようなことで、パドックの中に移動式の搾乳施設を導入し、二手に分かれ日々の搾乳を行っておりました。

当時上原教務部長さん並びに竹原業務部長さんには毎日陣頭指揮をいただき、職員・学生さん一丸となって各牧場の施設が完備する8月頃まで奮闘いただいたことが、今になっても懐かしい思い出です。

その後第1牧場は多くの経産牛を管理したことと、草地の管理も十分できなかつたため、地域の開拓農協の草地を借り不足する貯蔵飼料の確保につとめました。現在のように購入できる粗飼料は少なく、購入出来たものはビートパルプのペレット程度だったと思います。

辛うじて第1年度の後半からは牛の状態も順調になり、泌乳も繁殖もよくなったように思います。しかし今も私にとって忘れることの出来ない事は牛の汎骨髄癆です。

第2年次の夏以降牧場内の草量が不足したため、借用した草地から2番刈りの混播牧草を毎日刈り取り、半日程度予乾したものをトラックで搬入し給与していました。

給与した牧草の中に幾分のわらびは混入しておりました。しかし給与前により分けすることができず、給与期間も長かつたため急に多くの牛を発病させる結果となりました。

発病後は上司のご指示を受けながら、国と県関係職員の病性鑑定をいただき、コバルトグリーンポールを中心に治療を継続いたしました。

また、県内の各家畜保健衛生所から多くの薬品をいただき、約1カ月間各牧場の方々の応援を受け終息出来ました。しかし大切な牛を廃用させたことは誠に申し訳なく思っています。

色々の事がありました。最近卒業された方々のお宅を訪問させていただく機会があり、その後研鑽を詰まれ、地域のリーダーとして活躍されておられる姿に接し心から喜んでいる次第です。

最後になりましたがお亡くになられた方々のご冥福と、皆様の益々のご健勝とご発展をお祈りいたします。



## 創立30周年に寄せて

永 井 仁

家畜改良事業団岡山種雄牛センター  
(昭和48年4月～昭和53年3月副校長)

財団法人中国四国酪農大学校創立30周年心からお祝い申し上げます。

これに花を添えて、関係したものの一同が、熱望してやまなかつた素晴らしい本館の落成、重ね重ねおめでとうございます。

私は県職員の最後、昭和48年4月から昭和53年3月まで、財団になって丁度10年を挟んで、8期から12期の皆さんと、一緒の釜の飯を食べたのが、最も楽しく、充実した期間でした。

一口に30年と言いますが、ここまで来るには多くの関係者、関係機関のかたがたの、大変な努力と協力が有ったことを忘れてはならないと思います。

私事で恐縮ですが、私は県在職25年弱の間、ほぼ酪農一筋でございましたので、学校の沿革にないエピソードの一部を紹介してお祝いの言葉に代えたいと思います。

岡山県の酪農の歴史は古く、大正11年には、西大寺に旭東練乳と言う工場が出来た位盛んでし

たが、岡山県は従来から和牛と養鶏の王国、酪農の入り込む隙間はありませんでした。

これにスポットを当てられたのが、桃太郎知事として親しまれた故三木行治知事と、学校の正門前に遺徳を偲んで建てられている胸像の主、故惣津律士畜産課長のコンビが生まれた昭和26年からでした。

昭和28年、酪農振興法ができるや、津山市を中心に県北一帯、特に酪農処女地のここ蒜山にジャージー牛を導入したのを手始めに、昭和34年までに県内を3つの集約酪農地域の指定を受けて、組織的な酪農振興が図られることになりました。

ところが10年間お世話戴いた、偉大な故惣津畜産課長が、突然技術者としては異例の、監査事務局長に栄転され、課員一同父親を失ったような感じで茫然としました。

しかし在任1年で農林部次長に復帰され、一同ほっとしましたが、それは三木知事から、『惣津君、牛を作る体制は出来たが、これを飼う人作りが出来ていないではないか、ありきたりではない、酪農経営者を育てる学校を作れ』、

との特命があって、現在の全国でも希な酪農大学校の基礎作りが始まりました。

惣津次長の頭には、デンマークの国民高等学校のように、農閑期に学ぶ学校を作りたいと言う構想がありました。

当時酪農経営者養成に、ユニークな教育をされていたのが、北海道の酪農学園大学で、早速視察に行かれました。その時若輩の私に『学校が出来たら君を連れて行くから手伝いをせよ』とのことで、北海道へもお供をしました。

酪農学園では非常に暖かく迎えて頂き、

『学校を作るのは簡単だが、特色のある教育をしようとすればするほど、学生募集に苦労する。安定するまで10年はかかる』

とのアドバイスは今も頭に残っています。

そして学生募集を4月、8月、12月の年3回とし、就学期間は3年間とする。

在学期間の4カ月以外は、自宅等で研修することとし、昭和36年12月1日、第1期生30名の入学式が県庁9階ホールで、三木知事を迎え希望と、熱気に満ちて行なわれ、関係者は大感激でした。

ユニークな学制のため、県単独で経営するには経費の負担が重く、また学生募集の関係から見直しの機運が高まり、加藤知事、山下農林部長、出口畜産課長、蔵知校長の時代に、中国四国9県に兵庫県を加えて、財団法人に衣替えして運営するという構想が纏まりました。

各県の協力を得るには大変なご努力だったようですが、昭和40年11月10日、現在の財団法人中国四国酪農大学校が誕生し、学生募集は4月、就学期間は2カ年に改められ、県立酪農大学校は昭和42年3月、4期生の卒業でその幕を閉じました。

財団法人中国四国酪農大学校は、各県から100万円の出捐金を出して貰い(各県の事情で実際の払込は10万円)、施設整備には、地方競馬全国協会から多大の補助金を頂いて、当時としては近代的に学校が出来上がり、酪農のムードも良かったので、学生募集も順調でした。

さきに私は惣津校長のお供をして、県立酪農大学校に行くことになっていましたが、最終的に後方で支援せよとのことで、畜産課に残ることになりました。

昭和48年4月学校に赴任して感じたことは、学生が個性豊かで、純真でやる気のある好青年が揃っていることでした。

また訪れてくれる卒業生が、立派な経営者に成長して地域で頑張っていることでした。

そこで今後の学生の為により良い施設にすることが我々の使命だと考え、創立10年の節目でもあり、施設整備5カ年計画を樹立し、岡山県、中国四国農政局、地方競馬全国協会の大変なご協力を頂いて、施設を一新することができました。

特に地方競馬全国協会にはご無理を申しましたが、その時『収容施設に余裕があるときは構成



県外からの学生も受入れる』との条件が示され、構成県のご理解を頂いて、全国に門戸を開放し、広く学生が集まることになりました。

懸案であった出捐金も、構成各県のご理解で、100万円の満額にして頂いたのも感激でした。最大の懸案の学校のシンボル本館も作って頂きました。

わが国の酪農は、我々酪農大卒業生が担うんだという気概を持って頑張りましょう。

## 蒜山での思い出



日 笠 重 雄

昭和43年4月～昭和47年3月  
昭和50年3月～昭和53年3月  
昭和56年4月～昭和58年3月  
悠悠自適

創立30周年と言う節目に待望の本館を竣工され本当におめでとうございます。

この大変なイベントの時に私のような者に酪大の思い出を書いてくれとの依頼を受け私でなくともお暦々の校長さんが大勢おられるのにナゼと問い返しますと何回も酪大に赴任されているので是非にもとの返答でやむなくお引受けした次第でございます。

私が蒜山と言う言葉を耳にしたのは最初の任地で先輩から陸の孤島で島流しと同じだと言う言葉でした。その時は自分には関係ないと思って聞き流していましたが昭和29年の夏に島流しが現実になって中福田家畜保健衛生所勤務の辞令を頂戴したのが蒜山との最初の出合いでもまだ湯原ダムの工事中でダムの湖底の道路をボンネットのある箱型バスで勝山駅から2時間30分もかかって大前旅館前と言う停留所に降り事務所は何処と聞きますと家畜市場の隅の掘立小屋風の小さな事務所で机も同僚と共有で使用するという程の狭さでしたが何か違ったムードがあり活気に溢れていました。その訳はこの地にジャージ種を導入して酪農地帯にすると言うパイオニア適要素があったからと思われます。

私どもの業務は牛、馬の診療と家畜人工受精で土、日曜日の無い毎日の連続でした。同時期に赴任された先輩のA.M.氏は海のものとも山のものともわからない蒜山地域にジャージ種を導入して酪農地帯に転換するという夢の様な仕事に情熱を燃して日夜普及活動に精進されたその成果が現在の蒜山酪農の姿です。この時期はエピソードも数々ありますが酪大の前身期なので省略させて戴きます。

酪大へ赴任の1回目は昭和43年から4年間で学生は財団法人に成って2期生からと思いますが酪農ブームの時期で学生さんは酪農後継者が大半で優秀な人材が多く私の様な不勉強な先生ではドチラが生徒か先生かと言う言葉がピッタリで昼は業務で手一杯で夜はネジリ鉢巻で参考書と首引の一夜漬の知識で明日の授業に向えば自分でさえ良く理解していない事を人に教えると言う事はどんなに苦労か学生さんの方はいい迷惑で果ては昼寝の時間に早変わりして起きて居る学生さんは数える程度でも持ち時間は消化しなければならず時計の針の遅さに腹が立って来ると同時に自分の頭の悪さと力量不足を痛感させられました事ともう一つは大型草地酪農で大型機械の使い方この方は体で覚える事で得意の分野とっていましたが若い学生さんにはかなわず不器用さを思い知らされ学生さんに笑われ何度もカッと頭に血が昇ったことか、当時の飼養形態は自給飼料確保が必要で冬場の飼料としては乾草オンリーでサイレージはツマミ程度の考えから夏期の乾草調整は天候次第で何度不良乾草を調整した事かそのツケで冬場は乾草のカビで煙幕の内での飼料給

与と成り病気の多発と乳量の減少でその都度良い方法はと上司に言われても発想の転換が出来ない私の頭では天を恨むより道なしと達観し将来の冬場の飼料はどうすればとの思考もせず学生を養生したと思えば今更ながら穴にでも入りたい心境です。

2回目の時は昭和50年から3年間でこの時期はN校長時代で猛将の下に弱卒なしの処に弱卒で赴任したものですから大変でオマケに学生も酪農する事が天職と思っている人が多くこれはとんだ時に来たと1日でも早く転勤と思っても1000日間はどうにもならない運命とあって諦めの境地でしたが酪大が飛躍する時に巡り合って今迄経験したことの無い物を作る楽しみを味合せて戴きましたがこれが茨の道、建設する建物の外観図を景観にマッチしたものと言う条件で絵の上手な職員のN氏に何枚も書替えて戴きOKの出るまで何日かかった事か又ロータリーパーラーの建設も耳にタコが二重に出来る程発想の転換、石頭と言われたことが昨日の事のように思い出されますと共に多くの補助事業を実施してありましたので国の会計検査を事業主体として受けた時、事業そのものが全く頭に入っていない為O氏に何日も出張して来て戴き検査の解答方法を伝授して戴きながら本番に望みトンチンカンな解答をして冷汗を流した思い出等紙面に書き尽せない程の苦い経験の連続でしたが今日では良い経験で楽しい時期であった様に思われます。

3回目は昭和56年から2年間ですが此の時期は酪大運営の問題で苦しい時で多くの補助事業の事業主体返済分の一番ピーク時であり飼料関係で当時の職員さんは大変な辛酸を味合されたと思いますが肥育牛舎の柱が細くなるような飼料不足の状況で学生さんに肥育経営を酪農に併用することを推奨し現実の学校の肥育のあり方を見た時言う事となす事のギャップの大きさに学生は苦慮したことでしょう。幸いに社会状況は内の需要が伸びている時で経営次第では儲ると弁明した事が記憶に新しいが酪農は下降線をたどって居り将来の経営理論がつかみきれない時で何か暗夜に星の存在は無いものかと暗中模索しても解決策はなく学生さんに方向づけが出来ないまま言葉を濁して転勤しましたが現在でも優秀な酪農後継者の紹介記事、テレビ放映の酪農家を拝見すると酪大卒業生が多く今では何んの関係もない私でも私事のように喜びと感じ楽しくなって来る感情は何故か自問するまでもなく酪大に勤させて戴いたと言う目に見えない絆での仲間意識の強さで私の心の宝物です。

これからも酪農大の発展を願って私のつたない思い出の1頁を終らせて戴きます。



## 酪大回想記

(株)津山総合木材市場 奥 一郎

(昭和48年4月～昭和51年3月)

財団法人中国四国酪農大の創立30周年、誠におめでとうございます。心からお祝い申し上げます。

この度、古好校長から「酪大の思い出」を寄稿するようご指名がありました。早速お引き受けしましたが、20余年後の今も鮮明に覚えていることは、失敗したことと、その度に助け頂いた多くの方々のお蔭です。

漫画チックな愛嬌で済む失敗から、冷汗三斗寿命の縮む思いの大失敗まで、数限り無し。

当時の私を知っている上司同僚の先生職員、一緒に過ごした8・9・10・11期の学生諸君は、失笑苦笑を洩らされるのではと、赤面の思いで一杯です。

私が岡山県畜産課から、酪大に出向を命じられ単身赴任をしたのは、今から22年前の昭和48年4月です。

入学式は、残雪の蒜山三座が春の陽に美しく輝き、秀峰大山の純白の南壁が遠くにくっきりと浮かぶ、まるで名画を見るような快晴の日でした。蒜山高原は、心憎いばかりの演出で、新任の永井校長・有安次長・宇山総務部長を始めとする私達職員と、9期の新入生を歓迎してくれたわけです。

永井校長から頂いた辞令は、助教授兼第1牧場副場長でした。当時の第1牧場のスタッフは、道繁場長、名越・常守先生と私の4人です。また担当学科は、草地管理学に決まりました。浅羽前次長と岡山大学の三秋博士からあれこれと親切な引継ぎを受けましたが、実地管理については常守先生に大変お世話になりました。

酪大の春から夏の実習は草地への施肥、コーンの作付け、乾草作り、サイレージ造り等の日程で埋まってしまう。実習作業は、名越・常守両先生のリードで学生が大活躍。実践の中から作業の段取り、進め方等を習得するシステムです。

翌49年4月、道繁・名越の両先生は岡山県に帰任、常守先生は教育部へ移動されました。第1牧場の新しいスタッフは、場長に任命された私、県から来られた湯浅副場長、第2牧場から転入の川村先生の3人になりました。アイディアと行動力抜群の湯浅先生。こつこつと縁の下の力持ちの役割に徹した川村先生。教育部に赴任して来られた新田先生の献身的な応援。そして、己を知り、酪農一筋を目指して入学して来た素晴らしい学生達が加わり、お陰で元気な牧場に再生しました。

さて今一つ私にとって、忘れることのできない思い出があります。

永井校長が着任早々、48年度を含め酪大全体の事業計画の根本的な見直しを断行されたことです。近代的な酪農経営の実践を通して、前向き・やる気・生き生き元気な・担い手を世に送り出すことと、地域酪農振興の拠点基地としての役割を充実する目的達成のため、校内の空気を一新し活性化を図る狙いがあったわけ。玄能で叩きつけるような厳命に、ソフト・ハードを問わず収支計算からやり直しです。当該年度がすでに始まっている訳ですから事は急ぎます。てんやわんやの徹夜が続きました。計画策定がまとまると、即実行です。第1牧場では、とりあえずフリーバン牛舎を30頭余繋養のパイプラインミルクカー搾乳方式に改造しました。また地方競馬全国協会の助成事業と団体営公共事業の飼料基盤整備事業等の実施計画を作成。私は、飼料基盤整備事業を担当し、49年度から事業着手。第1・第2牧場内の道路整備、草地飼料畑の造成、糞尿散布施設等の慣れない測量設計と施工管理に苦労したことが、懐かしい思い出となりました。

50年には、スペシャリストの日笠先生が教育部長として赴任して来られました。第2牧場には意気盛んな赤木・百野先生が場長・副場長として頑張っておられ、酪大全体がパワー全開状態の熱気に包まれていたように思います。

51年春、広大で風光明媚なキャンパスと、卒業生の就農率、ユニークさ等では日本一の酪大を、私は10期生と一緒に卒業出来ました。

永井校長の懐の深さ、洞察力、決断の早さと、実行力、厳しさと優しさ、その人柄にはすっかり参りました。

その校長の下での、酪大の3年間は、私の県職員としての丁度折り返し地点になりました。以後20年間の業務に酪大での経験が如何程役立ったことか、本当に幸せだったとの想いを新たにしています。

誌上をお借りしまして、お世話になりました当時の上司同僚の先生職員、学生諸君、地元川上・八束両村の関係者、国・県の関係者の方々に心から感謝し、お礼を申し上げます。「ありがとうございました。」



## 酪大に入学して

第30期生（2年生）

島根県 住田 善一

卒業後僕は家に帰り、今までこの酪農大学で学んだこと、校外研修の経験を生かし、酪農道を進もうと思っています。飼養管理技術等はまだまだ勉強不足なので、父に学びながら少しずつマスターし経営者としての勉強もしなければと思っています。

酪農は休日が少ないため肉体的に大変なこともあります。頭数と労働力とをてらし合わせ何頭ぐらい飼えば経営として成立し、借金もどのくらいの負債なら楽に返済できるかなど考えていると思っています。とりあえずは今の目標搾乳牛100頭を家族労働力でやっていき、休日も週に1日は自由な休みがとれるようローテーションをくんでやっていきたいと思っています。

他には先進地視察も国内だけでなく海外にも出かけ、視野を広げ知識を広くもちたい。畑も13haあるので低コストでも省力的な粗飼料生産ができるように活用していきたいと思っています。

僕は商業高校を卒業しているのでそれを生かし、自分の牧場の経理をしたり、パソコンを利用した飼料計算、繁殖管理等もやっていきたい。

現在、僕の家では育成は行わず、初妊牛を北海道から導入しているが、高能力牛の子牛は残し自家育成していきたい。

他にもいろいろ考えられるが、毎年可能なことを少しずつでも実現していきたいと思います。



## 卒業後の私

第30期生（2年生）

大阪府 土井 里恵

非農家に生まれた私は、人と人との争いを嫌い、変化のない毎日が嫌で生き物の世界に入りました。折角、命ある人間に生まれてきたのだから“生命”を感じる職業に就こうと思いました。大阪という都会から、自然があふれる新鮮な所に移り住み充実感あふれる毎日を過ごしています。しかし、あと半年でここ財団法人中国四国酪農大学校を去らなければなりません。都会から来た私は、牛関係の仕事につきたいと何時も夢を持って友達と話をしています。

私は普通の会社にOLがあるように、牧場のOLになりたいのです。通いで牧場で働きたいと思っています。会社のように、保険、退職金、休日があるような所に勤めたいのです。個人の牧場に入ったら、住み込みでこんな決まりが確実ではないと思います。町や村が経営している牧場が一番良い条件だと聞きましたが、めったに空きができないそうです。

そして、いろいろ悩んだあげく卒業後はヘルパーになり、多くの酪農家を見てまわり勉強し、良い条件で雇用してくれる牧場を探そうと思います。3年間ぐらい働いて、結婚し、家庭菜園がもてるぐらいの家に住み、のんびりのどかに暮らしたいです。

もちろん結婚しても牧場で働きます。

もし、この世にお金がなかったら、私は家族で食べていけるだけの牛や鶏や豚を飼い、野菜やチーズ・バターを作りお菓子を作って、家族とわきあいあいと一生を過ごしたいです。

誰にも邪魔されずのんびりと……

好き勝手に夢を語らせてもらいましたが、これが私の一生の夢＝卒業後の私につながります。



## 酪農大学校に入学して

第31期生（1年生）

島根県 小松原 理 恵

私は、島根県立出雲農林高校卒業後、この学校に入学しました。

私の家は非農家で、ましてや牛には全くと言っていい程縁のない人間でしたが、獣医になるのが夢で農林高校へ入学し、そこで初めて牛に接しました。

初めて牛の側に立った時思ったことはなんて大きいんだろうということだけでした。初めは何とも思っていなかった牛も、牛舎へ足を運ぶうちに好きになり、高校2年生になる頃には毎日牛舎へ通うようになりました。そのうち、いつからなのか自分でもわからないうちに、毎朝そして放課後牛舎へ行っては牛を観察し、帰ることが習慣になりました。

私の家は学校から約40km離れ、汽車と自転車を利用し通学していたので、牛舎に寄ってから学校へ行くためにはとても早く家を出なければならず、今思えばとてもキツイ生活を送っていたなと思うと同時に、私にそこまでさせたものは何だったんだろうと考えますが、未だにはっきりとした答えは出てきません。母親には大変な苦勞をかけましたが、ひとつ言えることは、「私は牛が好きだ」ということ。けれど、どうして牛が好きなの？と聞かれてもまた困ってしまいます。自分でもわからない間に好きになっていたのだから、どこかと聞かれても、ここだとはっきり言えるものは何もありません。ですが私は、牛はこちらが手をかけてやれば、その分何かを返してくれると思っています。現実には決してそんな甘いものではないということもわかっているつもりですが、それでも私は、いつもそういう気持ちを持って牛に接してやりたいのです。

私の家は非農家でもあり、性格上牛をペットのように思ってしまう所が少しあります。“牛は経済動物だ”と人にも言われますが、頭ではわかっている、なかなか気持ちがついて来ないというのが現状です。

私が、将来酪農に関する職業につきたいと思い始めたのは、高校1年の終りごろでした。それからは、勉強ギライだった私も、牛に関する事には自分から積極的に取り組み、自分なりに勉強してきました。

その中の1つが、先進地留学研修でした。家から長期間離れたことのなかった私には、3週間も他人の家で生活することができるのだろうかという大きな不安もありましたが、将来のために学校では学べないことを学びたかったということ、そして何よりも、酪農の素晴らしさや良い面をもっと沢山知りたいと思い、参加を希望しました。

私がお世話になったのは、静岡県の朝霧高原ファーム植竹牧場でした。富士山麓で牛がのびのびと生活しているのを見て、私もこんな環境の元で牛を飼いたいと思いました。私の研修は、夏休みのうちの3週間という短い間ではありましたが、そこで学んだことは多く、酪農に従事する者として、又人間としても成長することができました。

この研修に参加したことで、私はやっと自分自身の本当のスタート地点に立てたのだと思っています。

そんな過程を経て、私は3年生になり進学することを決め、そしてこの学校を選びました。入学志望の動機は、牛が好きで、将来酪農に関する職業につきたいと考え、そのために多くの知識と技術、そして資格を取得したいということでした。

入学した今でも、その気持ちは少しも変わっていません。変わるどころか、その気持ちは増すばかりです。

毎日の実習や生活の中から、何かを吸収できているのかどうか今はまだわからないけれど、それらはけして、私にとってマイナスにはなっていないはずだし、私自身、ここに居ること自体に大きな意味があり、価値あることなのだと思います。

今年の新入生は、男子16人、女子6人と人数が少なく、少し寂しい気はしますが、実習の面では1人当りの役割多く、自分のためになると思っています。

3Kと言われ一般の人にさげられがちな酪農ではありますが、第1次産業と言われる程重要なものです。だからもっと一般の人に理解され、愛されるようにならなければいけないと思うのです。そうなるためにも、次世代の私達が努力していかなければなりません。

私の勉強はまだ始まったばかりです。これからが本番。ここの施設や教材、そしてここでの2年間全体をムダにしないよう、多くのことを学び吸収し、精一杯努力していきたいと思っています。

将来は酪農に関する職業につき、酪農家に嫁ぐことができたなら、私の人生は最高のものになるでしょう。大きな夢ではないけれど、これが今の私の大切な夢です。



## 私 の 道

第31期生（1年生）

岡山県 小笠原 正 芳

私の家は、岡山県の南東部に位置し、気候もよい所で酪農をしています。幼い頃から手伝いをしていた私は、岡山県立高松農業高等学校畜産科で3年間勉強しました。家業は長男である兄が継ぐことになっていましたが、私も酪農家になりたいと考えるようになりました。でも私自身が酪農経営を始めるにしても、この不景気ではやっていけるかどうか分かりません。けれども酪農に関わる仕事に就きたいので兄とはちがった立場から、酪農の将来に役に立てる、そんな仕事を探しました。そんな時、酪農ヘルパーの存在を知り、これなら“ピッタリ”だと思い、自営をしている人の手伝いができたらと、酪農ヘルパーになる決意をしました。人工受精、受精卵移植師や酪農ヘルパーなどの資格や酪農経営に必要な知識など、いろいろな面でまだまだ得たいものがあつたので、酪大に入学しようと決意しました。

昨年12月20日、私は2つの不安な気持ちの中でニュージーランドへ向う飛行機の中にいました。その1つの不安とは出発の前日に酪大を受験したばかりで、その合格発表が2日後の22日だったことです。そしてもう1つの不安とは、その2週間の予定で行くニュージーランドのホームステイのことでした。

ニュージーランドへはシンガポール経由で、ほぼ1日かかって到着しました。ホームステイ先のジェミーさん宅に着いた時には本当にここに来て良かったのだろうか不安でした。ジェミーさんはとても背が高く、どう見ても2才の子供がいるお父さんには見えない位若々しいので、私には、ジェミーさん夫婦が兄か姉のように感じました。ホームステイ中はジェミーさん一家といろいろな所へ連れて行ってもらいました。クリスマスは、日本と同じように、クリスマスケーキやクリスマスのプレゼントをととても大切にしていました。私もたくさんのプレゼントをもらい、困ったあげくにお返しに日本から持って行った手ぬぐいや英語で書かれた牛窓のパンフレットをプレゼントしました。この時、みんなが表紙の写真を見て、牛窓の港はビューティフルだと言っ

てくれたのでとてもうれしく思いました。

ひとつ困った事は、小さな事ですが高松農高が四国の高松市にあると勘違いされたことです(高松市は知っていたようです)。私は、カタコトの英語で「岡山市の備中高松にあるんだよ。」と必死で説明しました。なんとか伝えることができた時は、とてもうれしかったです。特に印象に残ったのは、ニュージーランドの牧場を案内してもらった事です。ジェミーさんの親戚のその牧場はとてつもなく広く、牧場全部を見ようとしてもなかなか見ることができませんでした。その他、いろいろな所を見せてもらっているうちに、いつの間にか最初の不安(ホームステイのこと)は消えていました。

12月22日(合格発表)のことは? 私は引率の先生に「日本に電話したのか」と聞かれ、その日になって電話をかけました。合格したことがわかり、もう1つの不安は瞬間に消えました。それ以後の毎日があっという間に過ぎてしまったことは言うまでもありません。1月4日、無事故郷牛窓に戻りました。

ニュージーランドで過ごした2週間の中で、私は私の進むべき道で、何を目指すべきか少しわかったような気がしました。そして日本から遠く離れた土地で知った合格の知らせ、それはまさに私の進もうとしている道に対してのエールのように心に届きました。その喜びを生涯忘れず、私の進もうとしているこの道を一生懸命生きてみたいと思っています。

# 学校の沿革

## 前身

昭和24年7月○岡山県中福田家畜保健衛生所開設  
(岡山県真庭郡八束村中福田)

昭和32年4月○岡山県酪農試験場蒜山分場設置  
(県立酪農大学校前身、川上村西茅部)

昭和38年4月○岡山県乳牛育成場開設  
(第2牧場前身、川上村上福田)

## 岡山県立酪農大学校

昭和36年12月○津山市大田の酪農試験場内に開校  
○酪農に関する基本的な知識技術修得と健全な酪農経営者を養成するための教育を実施

昭和37年4月○真庭郡川上村西茅部に新校舎を建設、酪農試験場蒜山分場を吸収してここに移転し、新たに岡山県家畜保健衛生研究所を併設した。  
○募集人員は1学年30名、1年目に4ヶ月就学し、8ヶ月は在宅研修とし、修学期間は3年間である。  
○この間学生は草地の開墾、ポプラの植樹を精力的に行った。

昭和42年3月○閉校

## 財団法人中国四国酪農大学校

昭和40年11月○中国四国および兵庫県各県は、基金を積み立て、財団法人組織による(財)中国四国酪農大学校を創設。  
○岡山県立酪農大学校と三木ヶ原の岡山県乳牛育成場の施設を譲り受ける。  
○目的：わが国農業の近代化に即応し、企業的経営能力を有する健全な酪農自営者を養成する。  
○募集人員は1学年40名、修学期間は2年間。

昭和40年8月○皇太子殿下行啓(現、天皇)  
(津山市を中心として開かれた第15回海洋少年団全国大会に御出席)

昭和41年8月○財団法人第1期生入寮

昭和42年4月○昭和天皇・皇后両陛下下行幸啓  
(金甲山で行われた第18回全国植樹祭のお手播き行事で来校)  
6月○西日本飼料研修会が本校で開催される。



6月○明るい農村“農村新時代酪農大学校”の撮影がNHKで2日間に亘り行れ全国放送された。

10月○ワラビ中毒が発生した。

11月○天皇皇后両陛下お手播き記念碑除幕式

昭和43年2月○蒜山地方は朝9時頃より激しい猛吹雪に襲われ第2牧場は孤立し、牛乳の出荷を15日 中福田まで人力ソリで行う。

22日も同様再び猛吹雪となる。

4月○牧場統合（第2、第3牧場を統合し第2牧場とする。）

4月○オーストラリア駐日大使アレンスタン・レイブラン氏夫婦来校

（蒜山地方ジャージー酪農視察）

9月○ニュージーランド交換学生来校

10月○第1回全日本ジャージー共進会開催

○「学園だより」第1号発刊

昭和44年8月○ホルスタイン種優良基礎牛導入（アメリカ）

昭和45年2月第2牧場牛舎より出火（被害僅少）

8月○ジャージー種優良基礎牛導入（ニュージーランド）

○RSK酪農大学校を撮影

昭和46年2月○蒜山地方豪雪に見舞われ、事務所より宿舍までロープ伝いで帰宅する（第2牧場9日）。

10月○高松宮殿下御来校

昭和47年5月○RSKテレビ生放送、岡山・福岡・大阪より三次元放送、女子学生3名出演。  
26日

7月12日○集中豪雨で第1牧場水源池に被害。

昭和48年3月○第7期生卒業記念に牛魂碑建設

（第7期生三好正文氏、揮毫による）

昭和49～53年○施設整備5ヶ年計画で、第1・第2研修センター、男子寮、女子寮、酪農後継者養成施設、体育館、ロータリーパーラ、気密サイロ、スラリーストアー、草地造成、牧道整備等を実施する。

昭和49年10月○全国ジャージー大会開催

ジャージー導入20周年記念事業

昭和50年5月○NHKテレビで「酪農大学校を訪ねて」放映

昭和51年 ○財団法人構成県、各県の出損金1,000,000円が納付完了。

昭和52年 5月○酪農大学校教育施設落成式挙行（第1、第2研修センター、体育館、女子寮他）  
27日

昭和52年11月○故惣津律士初代校長胸像除幕式挙行  
6日

昭和57年 ○9月台風により  
本校のポプラ倒木（約50本）

昭和59年 4月○故三木知事由来のスズランを津山市内の福祉施設へ贈呈  
9月○第二回全日本ジャージー大会開催  
（ジャージー導入30周年記念事業）

昭和60年10月○財団法人創立20周年記念行事開催

昭和61年 ○コンピュータ利用講座を開始する。

昭和62年 ○受精卵移植技術講習会を開始する。

昭和63年 ○第24期生から学制を変更し  
4月～翌年の3月までの1年間校内、2年次の4月から11月まで校外研修（内  
2ヶ月は校内研修）12月～3月を校内  
（旧学制：4～9月校内、10～翌年9月校外（内2ヶ月校内）10月～3月校内）

平成2年 ○牛削蹄師免許講習会を開始する。

平成3年 ○1月、山陽新聞奨励賞受賞  
（長年にわたり酪農後継者の育成に努めた一産業部門）  
○（社）酪農ヘルパー全国協会委託研修所としての指定を受け、酪農ヘルパーの養成を  
開始する。  
○9月、19号台風により第2牧場のポプラ並木のポプラ倒木（約50本）

平成4年 ○3月23日ジャージーホール開催  
○女子学生の増加に伴ない女子寮を増設する。  
○学生の情操教育用として第2牧場に乗馬施設（パドック）を整備する。

平成5年 ○第2牧場にオートタンドム型パーラを導入し、あわせてパーラ屋根にカリオン、  
時計を設置しシンボルタワーとする。  
○県道上福田線改良工事に伴い、職員宿舎（1棟2戸）、車庫、格納庫を移転新築す  
る。  
○第2牧場建物周辺を「ジャージーとのふれ合い広場」として（年次）計画的に舗  
装整備。  
○学生寮裏の稲荷神社修復（鳥居、神社、新築）  
○冷夏長雨でトウモロコシ、牧草の収量減少。

- 平成6年 ○本館の新築を平成6年度より2ヶ年計画で行う。  
○学生の増加に伴い、男子寮の増設（3部屋）
- 10月20～21日 ○本校において担手ホーラム（経営発表会等）開催（中央畜産会主催）  
○異常早魃のため第2牧場の水源を整備。乳量及び牧草収量減少。

平成7年6月 ○旧校舎閉舎式を行う。  
22日

- 平成7年11月 ○財団法人設立30周年及び本館新築落成記念式典  
オーストラリア（ビクターハーバー校）との姉妹縁組調印。  
ジャージー導入40周年記念式を同時に行う。
- 学生と職員のコミュニケーションの場としてテニスコートを新設する。  
○第2牧場に貯水槽を新設する。







昭和42年4月10日 昭和天皇・皇后両陛下の  
行幸啓を迎ぐ（お手播きをされる両陛下）



昭和43年2月15日 豪雪



ソリで中福田まで牛乳缶を運ぶ  
（昭和43年2月15日）

(財)第三期生実習歌  
作詞 近成吉行

一、若い我らの酪大は  
蒜山三座のすそに咲く  
今日も行く三木ヶ原にや  
でっかい希望の雲がわく

二、燃える闘魂酪大の  
腕はくろがね心は火玉  
でっかい大地に汗を流し  
友とつちかう酪大根性

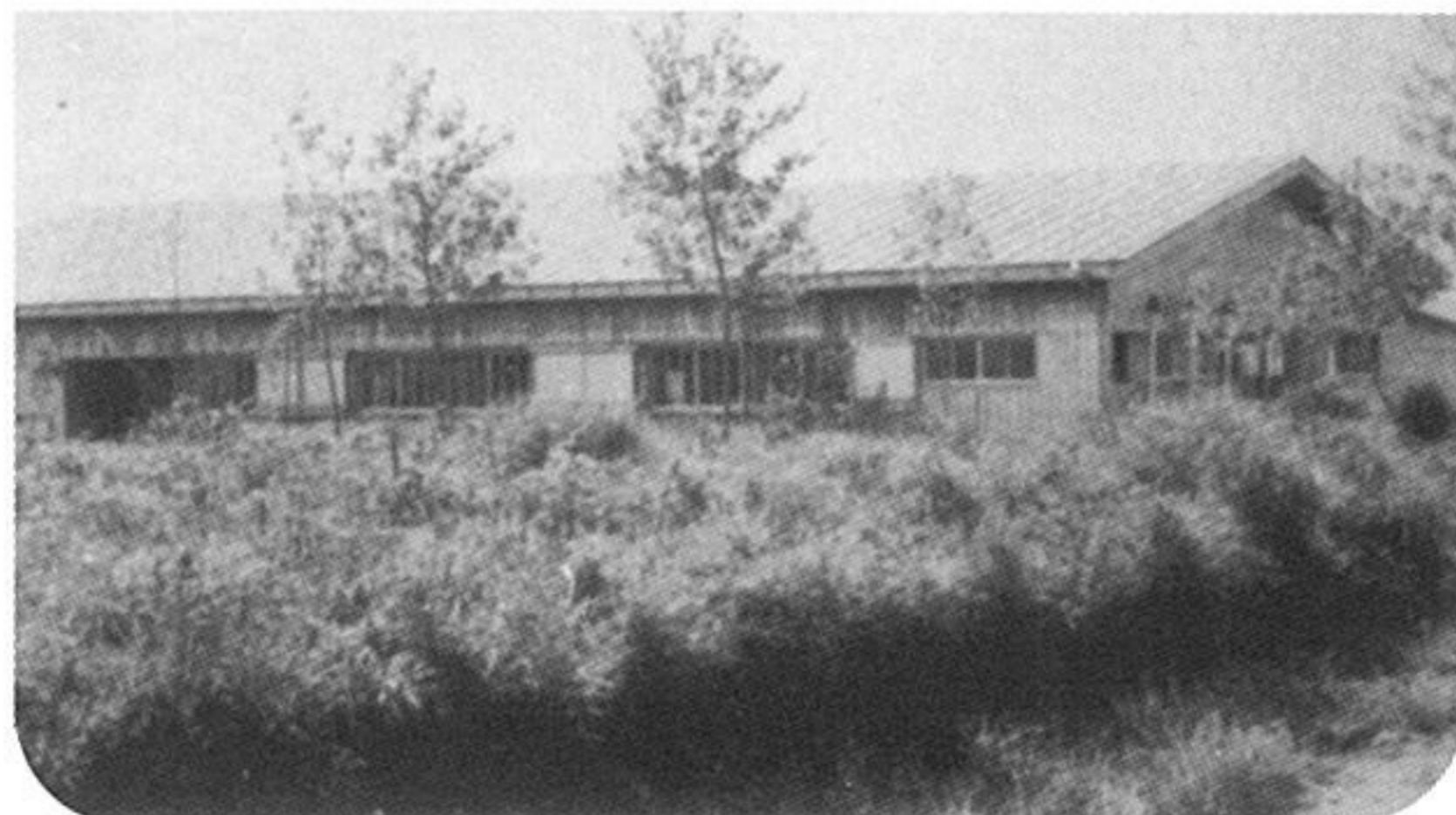
三、仰ぐ先輩酪大の  
成行聞きたび血潮がうずく  
どんときたえた開拓精神  
酪大魂にや不可能あらず



昭和43年10月 第1回ジャージー共進会



蒜山登山（昭和43年）



三木ヶ原寮（昭和44年）



今はない人糞運び 第6期生(昭和45年)



乾草調整実習 (昭和46年)



牛塊碑寄贈 (第7期生一同)



昭和49年10月16日  
ジャージー導入20周年記念大会



集合研修 (昭和50年)



キャンプファイヤー (昭和50年)



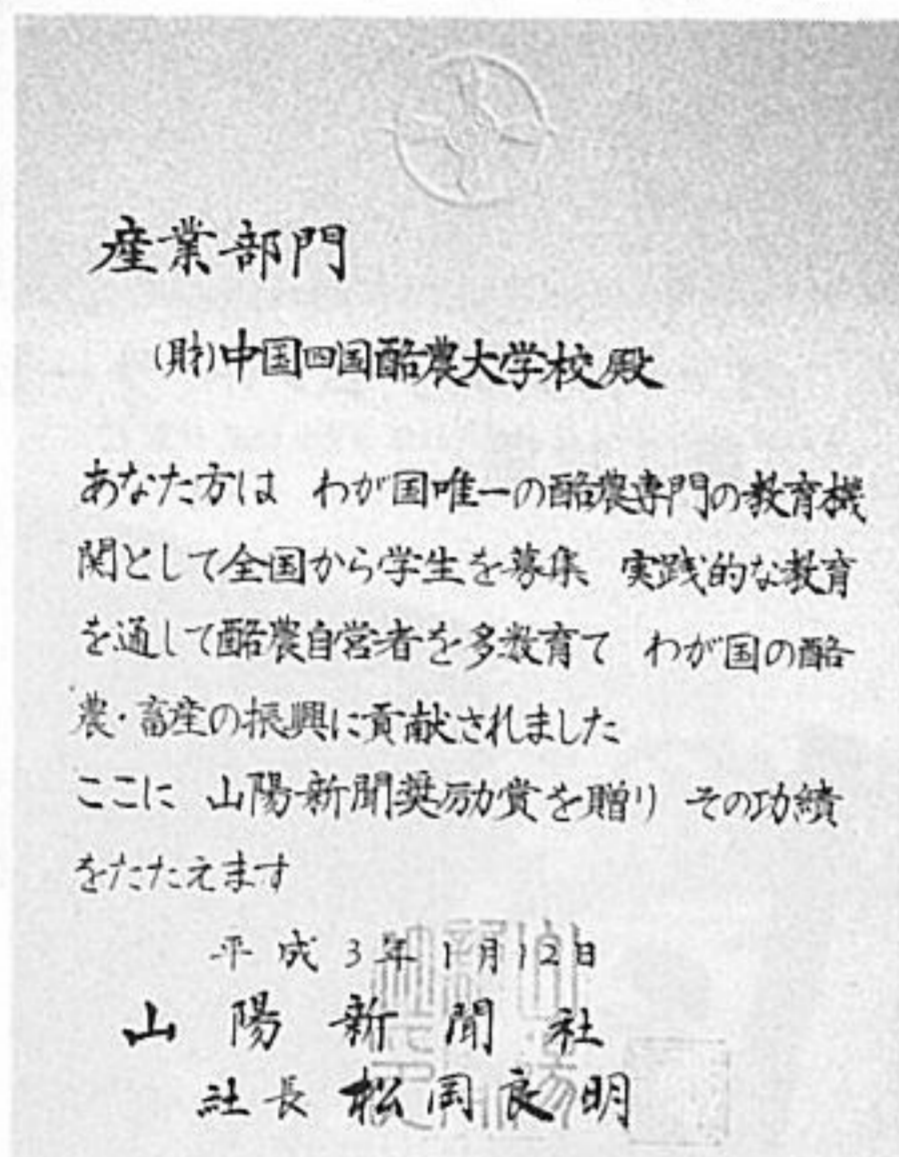
家畜人工授精実習 (昭和50年)







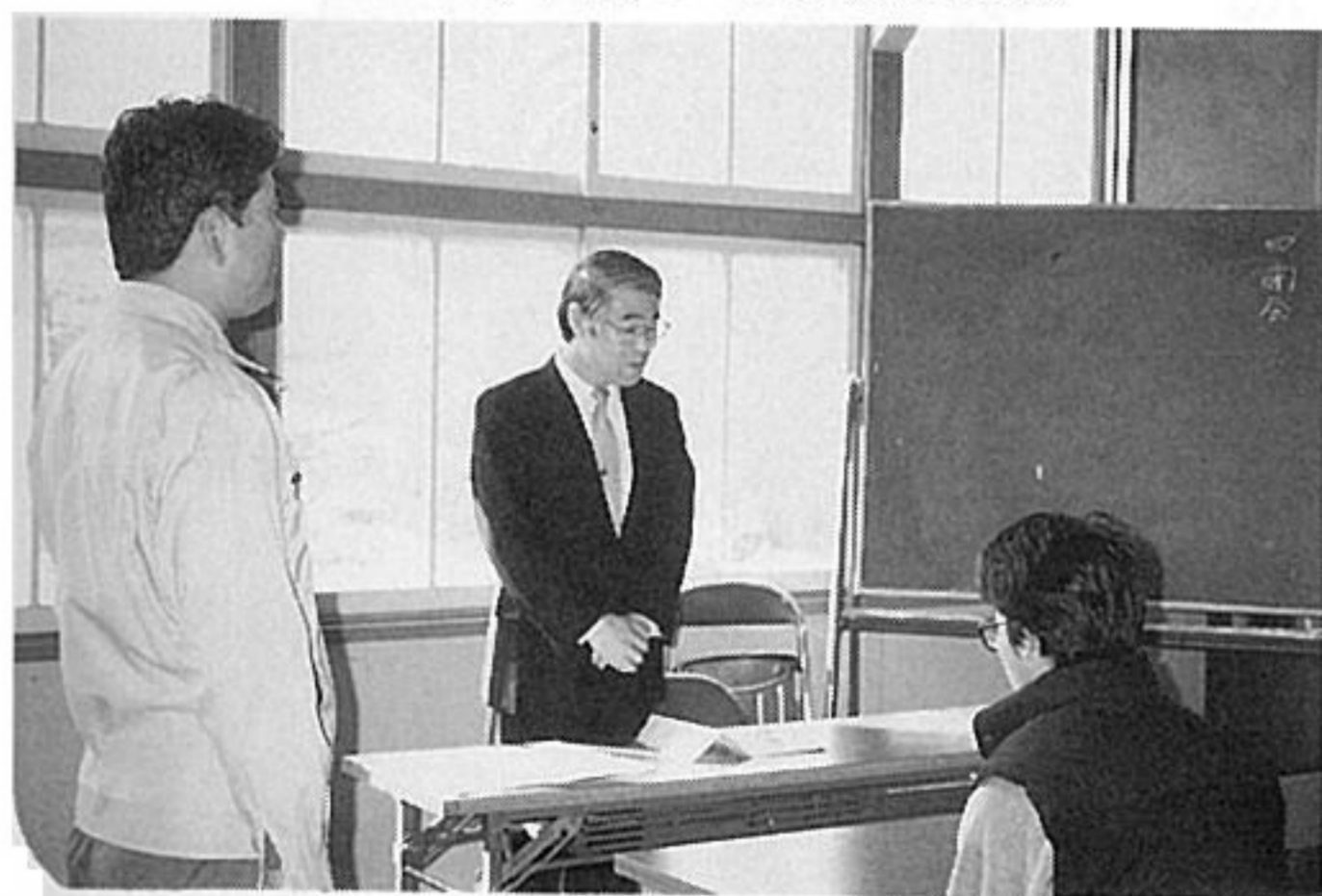
財団法人創立20周年記念式典(昭和60年11月8日)



山陽新聞奨励賞受賞 (平成3年1月12日)



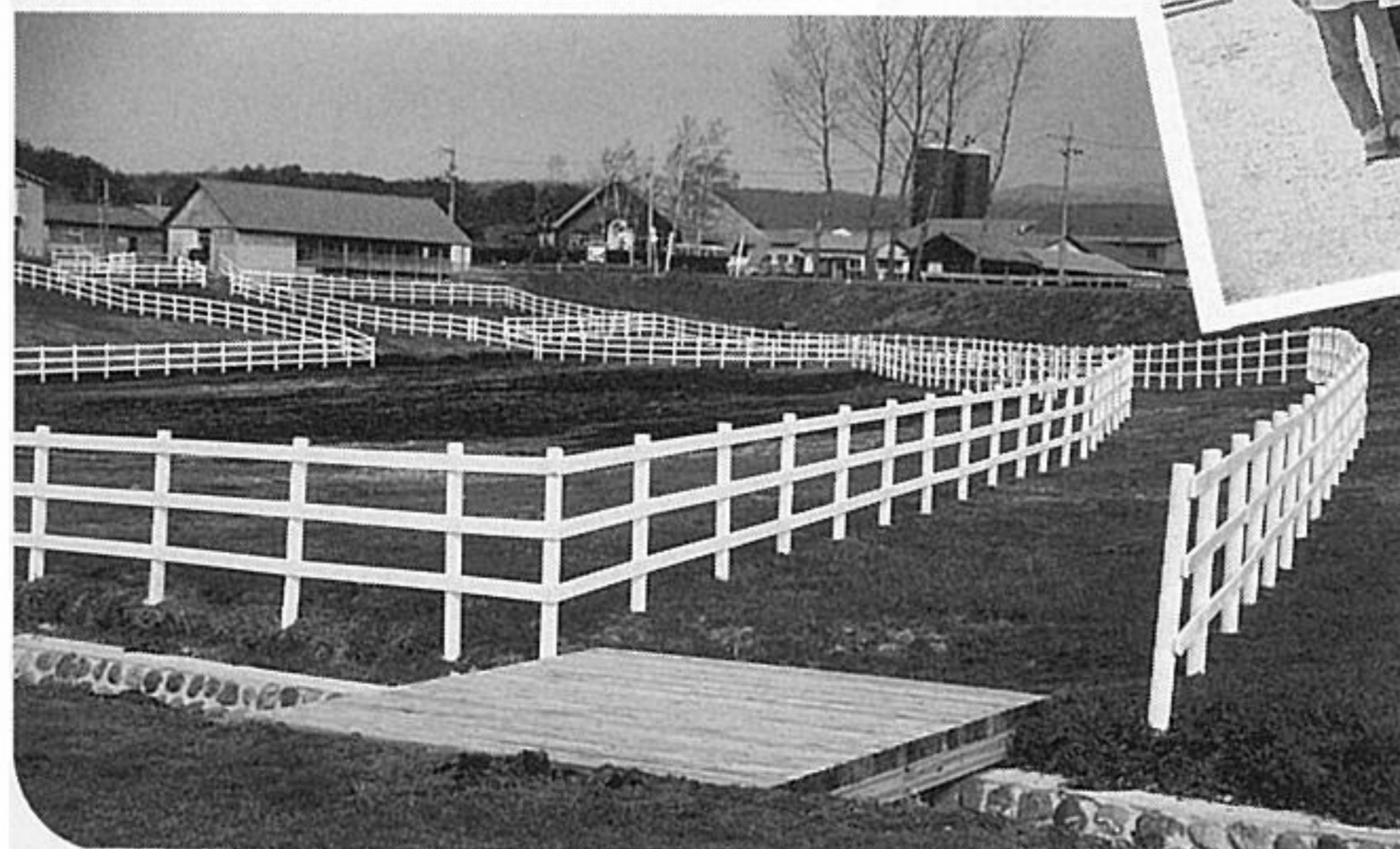
ポプラ苗木補植 (ポプラ並木) (平成2年3月27日)



酪農ヘルパー全国協会委託研修所として酪農ヘルパー要員養成開始 (平成3年)



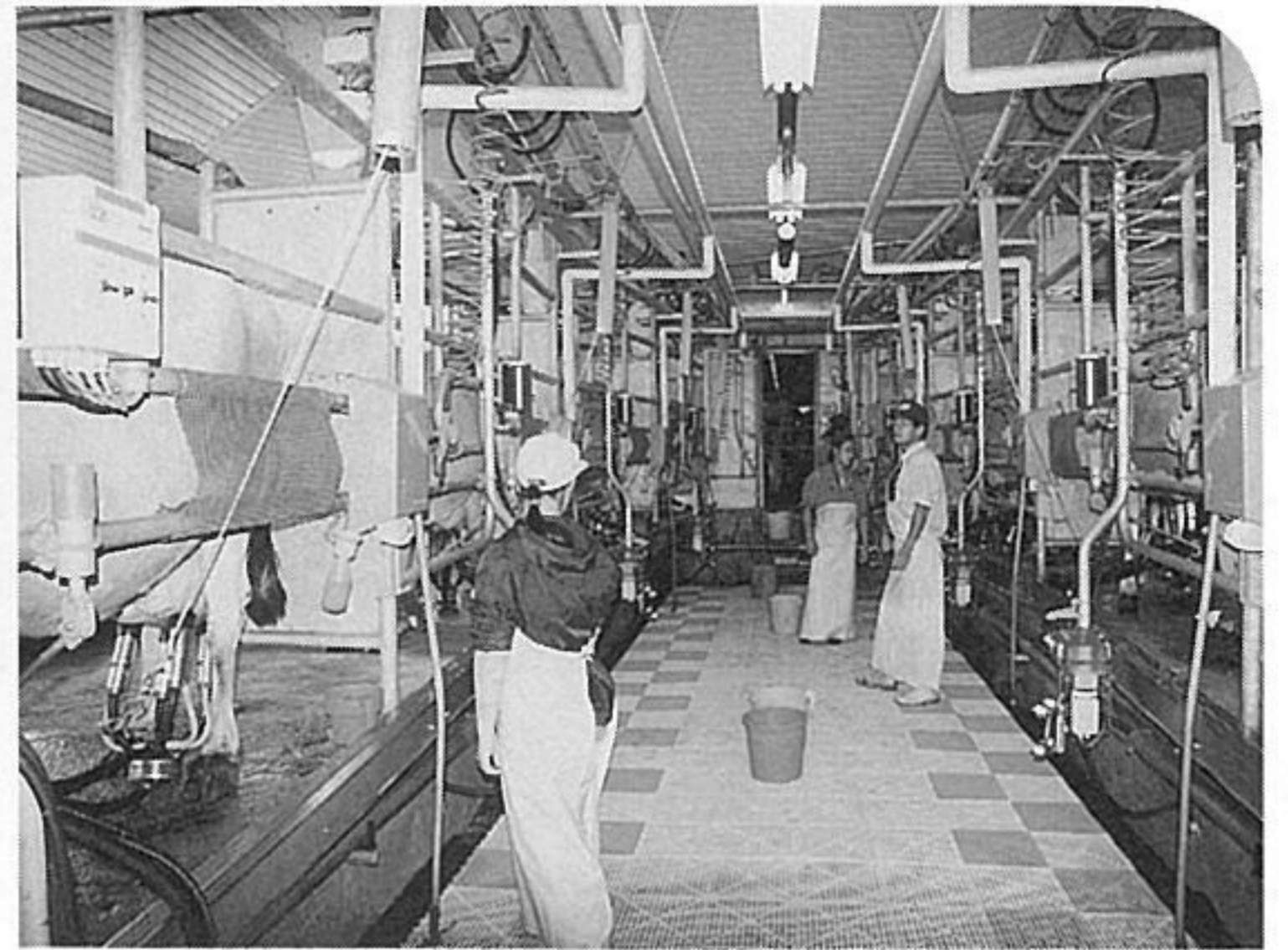
平成4年女子寮増築



馬用パドック新設 (平成4年)



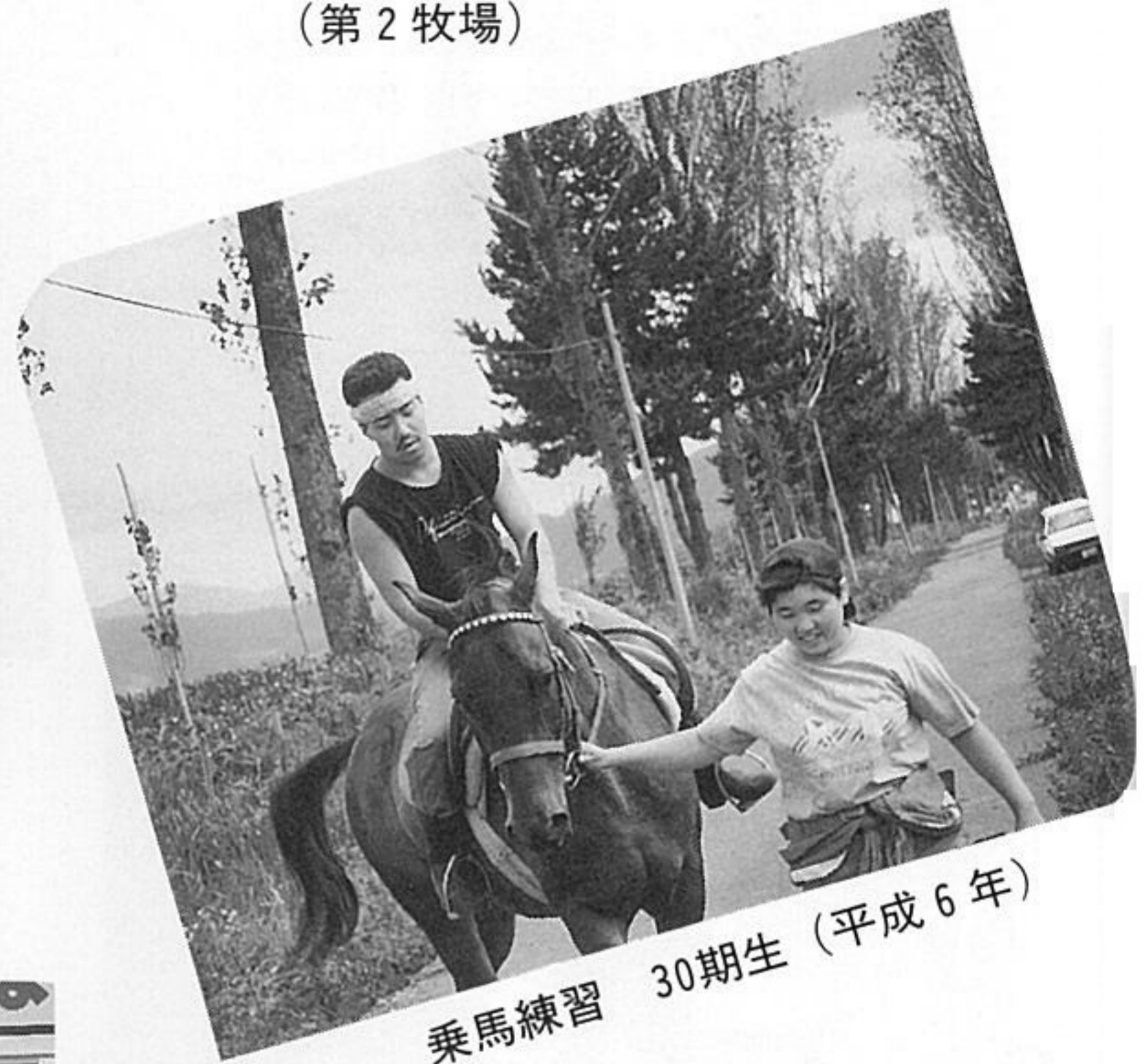
平成 5 年 稲荷神社復元



平成 5 年 オートタンデムパーラー新設  
(第 2 牧場)



平成 5 年 シンボルトワー設置 (第 2 牧場)



乗馬練習 30期生 (平成 6 年)



平成 6 年 10 月 21～22 日  
後継者担手ホール開催 (中央畜産会主催)



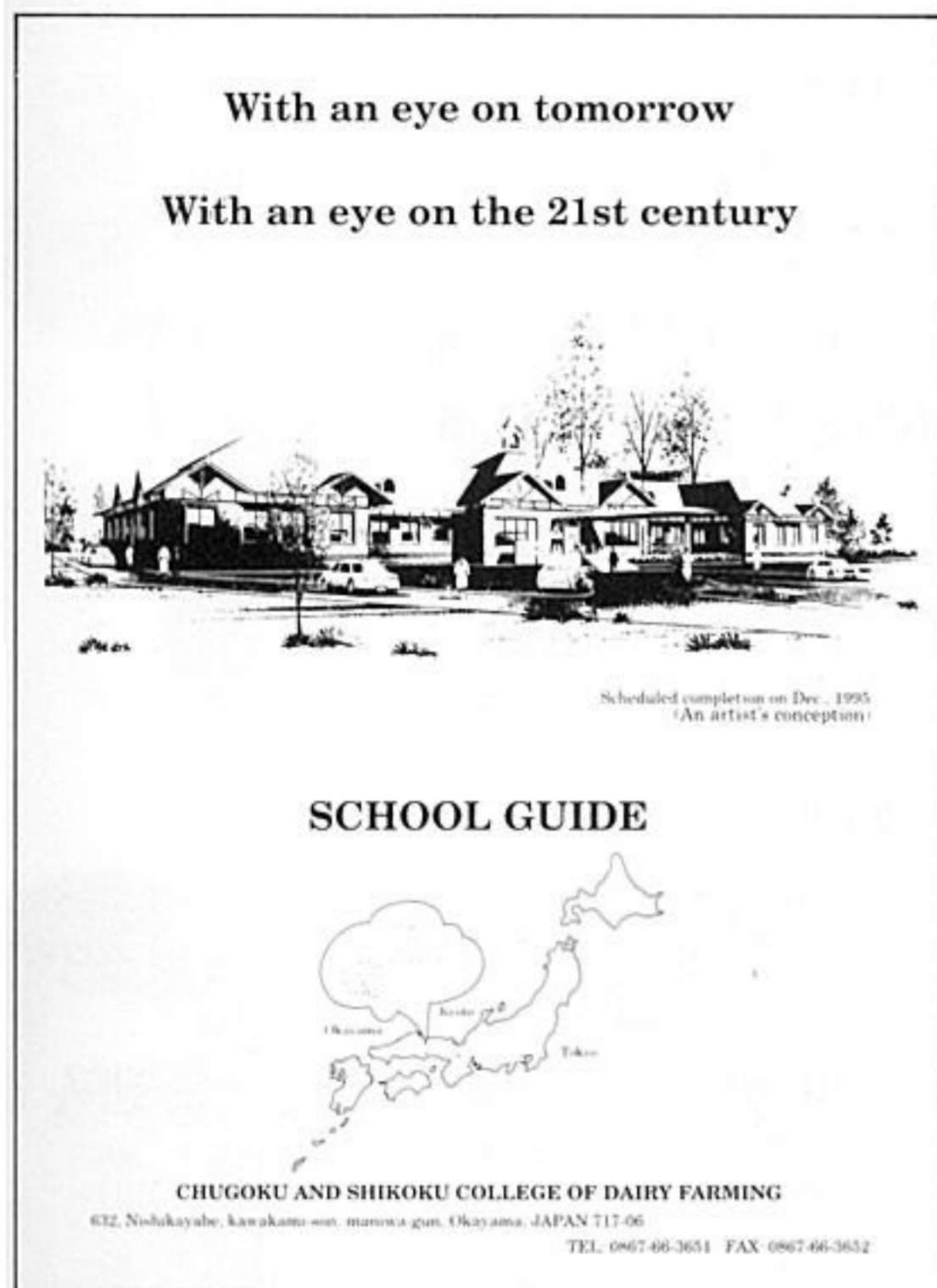
平成 7 年 2 月 6 日  
第 2 牧場成牛舎屋根雪降し



同窓会各県支部発足総会 徳島県支部  
(平成7年2月9日)



平成7年3月17日  
同窓会・第1回総会  
(岡山県真庭郡川上村、川上村老人福祉センター)



学生募集案内(要覧)英字で作成  
(平成7年5月)



旧校舎閉舎式(平成7年6月22日)



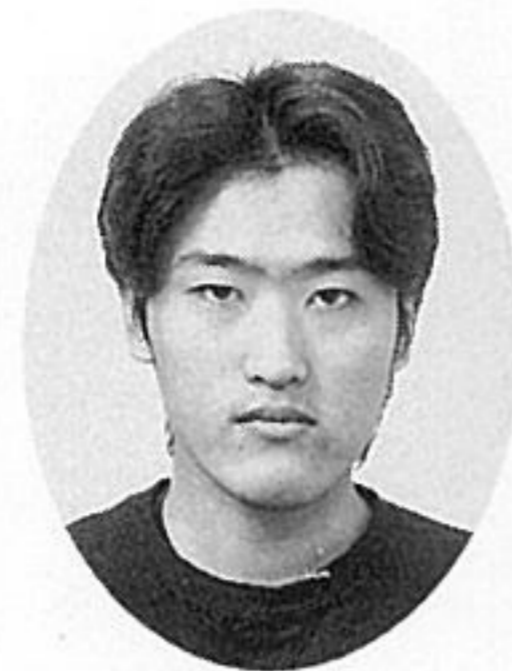
平成7年 テニスコート新設



平成7年9月1日  
国際交流 中国・フィリピンの人達とともに

# ふたぐみ

## 親子



岡山県 酪農  
県2期 定 森 保 好  
財30期 (2年生) 陽 介  
(チョットお邪魔します!)  
(私達も親子です)



岡山県 酪農  
県2期 有 安 力  
第2牧場技師 有 安 則 夫  
(平成5年4月1日より岡山県職員)  
(となり酪農大学校へ出向)



岡山県 酪農  
県3期 治郎丸 勲  
財25期 雄 一  
(私とホルスタインが好きな人いませんか)



岡山県 酪農  
県4期 亀 山 淳  
財25期 勇  
(平成7年9月30日カワイイ子と結婚しました。)



岡山県 酪農  
財2期 服 部 靖 義  
財28期 厚 子  
(かわいいジャージの好きな人いませんか。)



岡山県 酪農  
財2期 入江 善 康  
財26期 満 繁 (イセキ農機)



岡山県 酪農  
財2期 片山和美 (私達同期) (寺尾)晴一  
財25期 (秋山)由美



兵庫県 酪農  
財2期 稲井 賢 司  
財28期 洋 明



高知県 酪農  
財3期 増田 泰 男  
財31期 (1年生) 喜 久



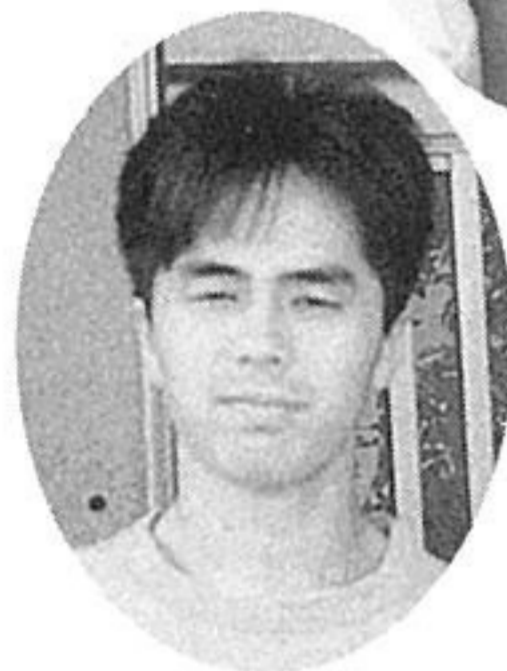
島根県 酪農  
財4期 住田 益 三  
財30期 (2年生) 善 一  
(平成8年に新居を予定しています。)  
(研修生受け入れます。)



岡山県 酪農  
財4期 筒井彦二 (川上村議会議員)  
財31期 (1年生) 大悟



岡山県 酪農  
財5期 松崎 隆  
(1年2産)



財28期 範之 (古川) 亜紀  
平成8年秋には21才のメチャクチャ、カワイイ子とゴールイン予定です。 香川県に嫁いで酪農

### 兄弟姉妹



岡山県  
県3期 石黒伸之 (農業野菜)  
財4期 芦立俊康 (JA真庭、川上支所)  
(やっぱり蒜山が良かった結果である)



岡山県  
(鳥取県へ)  
財9期(平石)磯土美和子 (酪農)  
(鳥取県へ)  
財12期 平石純一 (現代工芸)  
(広島県へ)  
財17期(平石)渡辺悦子 (酪農)



大分県  
財14期 佐藤喜一郎 (酪農)  
財18期 義彦 (木工所勤務)



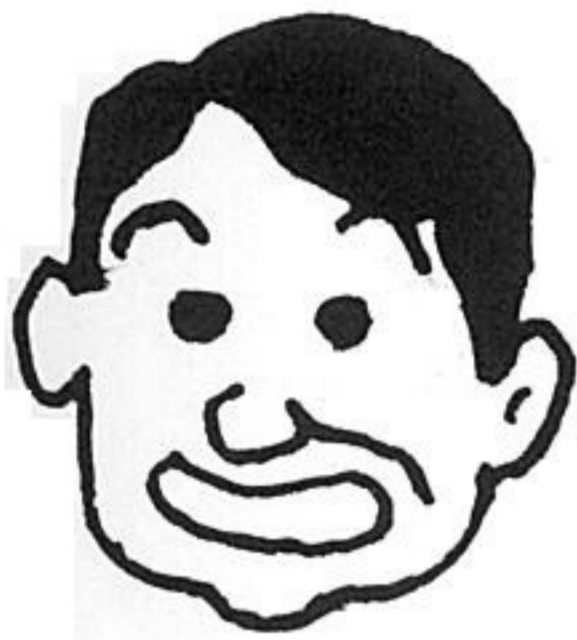
広島県

財16期(小迫)広 沢 英 子

徳島県へ嫁いで酪農

(結婚のページも見て下さい)

財20期 小 迫 三知恵 (酪農)



兵庫県 酪農

財19期 榎 本 安 良 (三原酪農協)

財25期 全 能 (兵庫県酪連)



財17期 (富田) 順 子

(結婚のページも見て下さい)

財27期 片 山 拓 志 (酪農)

(末子が頑張ってるぞ)



岡山県 酪農

財29期 小笠原 昌 幸

財31期 (1年生) 正 芳

(兄貴に負けないように頑張ってます)



山口県 (酪農)

財31期 (1年生) — 岸 田 伸 志  
宏 志

2人で3人前 (どっちがどっち?)

## 結 婚



岡山県 酪農  
財7期 美 甘 泰 治  
財7期 (泉川) 美津代 (香川県から)  
(八東村酪農振興協議会々長)



岡山県 酪農  
財8期 福 本 幸 彦  
財15期 (浅田) 由 美 (兵庫県から)  
(研修生を鍛えてあげます)



岡山県 酪農  
財8期 福 島 章 晴  
財9期 (白川) 清 美 (愛媛県から)  
(仲良くやっています)



岡山県 酪農  
財8期 矢 谷 拓 士  
財15期 (吉田) 美 幸 (落合町から)  
(共進会で会いましょう)



島根県 和牛飼育、人工授精、受精卵移殖  
財9期 岡 田 達 文  
財9期 (井上) 嘉 得 (岡山県から)  
(もっといい写真を送っているのに…)





島根県 酪農  
 財19期 石 飛 聖衣子  
 財19期 (吉田) 啓 二 (兵庫県から)  
 (とうとうおムコさんに来てもらっちゃッタ)



岡山県 酪農  
 財13期 岸 本 一 茂  
 財18期 (鳥越) 美 加 (柵原町から)  
 (特別講義に又、夫婦で呼んで下さい。)



岡山県 酪農  
 財15期 亀 山 昌 穂  
 財17期 (中村) 幸 永 (哲多町から)  
 (ヘルパー要員養成おまかせあれ)



岡山県 今は会社員  
 財16期 富 田 賢 二  
 財17期 (片山) 順 子 (蒜山から)



岡山県 酪農  
 財15期 先 山 俊 晴  
 財15期 (藤本) 美加子 (福岡県から)  
 (子供が若い頃の私にソックリ!)  
 (後が私)



岡山県 今は会社員 (酪農)  
財25期 (万城) 英 明  
財25期 小 川 昌 恵  
(新婚旅行でのスナップ)



広島県 会社員  
財11期 井 上 雅 風  
財11期 (小寺) 彰 子 (岡山県から)



広島県 酪農  
財14期 西 平 孝 治  
財14期 (長尾) 芳 美 (島根県から)  
(二人三脚で頑張っとる)



兵庫県 酪農  
財15期 古家後 孝 雄  
財15期 (藤川) 信 江 (島根県から)



徳島県 酪農  
財16期 広 沢 克 典  
財16期 (小迫) 英 子 (広島県から)  
(新築牛舎で快適搾乳  
研修生を受け入れています。)



愛媛県 酪農  
財25期 池内 陽一  
平成2年入学(富田)洋子(岡山県から)  
(同期生より早く学校を出ちゃった)

## 酪農大学校の研修生を受け入れて



愛媛県東予市吉田145 宇佐美 鈴 枝

( 愛媛県酪農経営者協議会長  
愛媛酪農農業協同組合専務理事 )

夫・忠孝

私の住んでいる愛媛県東予市は、松山市の東部に位置し南に石鎚山系、北は瀬戸内海に面した水田が全耕地の86パーセントを占める道前平野のまん中にあります。

宇佐美牧場は主人が1代目で、高校卒業（昭和38年）と同時に搾乳牛2頭を購入して、戦争で父を亡くしていたので母と始めました。

私と結婚した44年には搾乳12頭、飼育頭数28頭で米と酪農の複合経営をしていました。私は兼業農家の娘でしたが、主人の農業を愛し「酪農には夢がある」と言う言葉にひかれて20才で嫁ぎました。

45年主人は地域の酪農後継者4人で生産集団を組織して、大型トラクター、フォーレージハーベスタなどの飼料用栽培機械を購入して自給飼料の確保に自信を得たので、45年米の生産調整が始まったので米作りをやめ、46年L字型のセミルーズバーン(半開放式牛舎)、4頭Wのミルクングパーラーを設備50頭搾乳の専業酪農に切り替えました。当時は夫婦で50頭搾乳する事などできないと笑われましたが、我が家のモットー土作り・草づくり・牛作りに徹して青刈り主体の経営を行いました。子育て真っ最中でしたが母が家事・育児を手助けしてくれたので、私達夫婦は酪農経営に専念したおかげで、牛の事故も少く乳量も順調にのびました。

次に生乳の計画生産が始まる前の年の52年、重量鉄骨スレートぶきで経産牛110頭の対等式牛舎をスタンション×パイプラインミルク方式で建て、同時に546リューベのスチールサイロを設置して、青刈りと周年サイレージの2本立てで粗飼料生産に励み、低コスト価をはかり経営が安定していきました。

我が家が研修生を受け入れたのは53年、渡辺君からで彼は主人の高校の後輩で、非農家の子でしたが農業に興味を持って貴学校に入学し、高校の恩師の紹介で研修生第1号になりました。現在までに男子24名、女子7名、合計31名の研修生を受け入れました。

我が家に来た研修生の名前を紹介します。

- 12期生、渡辺 靖・真部賢二
- 13期生、山本和彦・田中克己
- 14期生、水江行宏・山中紀明
- 15期生、富田賢二
- 16期生、坂本登志男・山本美鈴・武田伸二
- 17期生、三好浩行・宮野郁子・大原裕司
- 18期生、松尾 忠・足立義隆
- 19期生、小迫三知恵・池添雅満
- 20期生、小野田健・中川武司・渡部 晃・森本栄子
- 21期生、三甘知彦・間島知則・藤見将光
- 26期生、田原和敦
- 27期生、片山拓志
- 28期生、松崎亜紀・稲井洋明
- 29期生、河野裕喜

30期生（学生）山田真知子・永井路子

県別は愛媛7人、高知6人、香川3人、徳島1人、岡山8人、鳥取1人、京都2人、広島1人、島根1人、岐阜1人と10県にまたがっています。

振り返ってみますと1人1人いろいろな思い出があります。非農家の子、農家だけど酪農家でない子、酪農がしたかったのにできなかった子、後継者だけど跡を継いでない子など、現在15名が後継者としてがんばっています。その内女子4名、美鈴・三知恵・郁子ちゃんの養子娘3人は、すばらしいパートナーを得て跡を継ぎ子育てまっ最中、亜紀ちゃんは酪農家に嫁ぎがんばっているのは頼もしいかぎりです。

最初の頃の研修は1年間で入学の年の10月から翌年の9月までで、山本・水江君は5ヶ月、3ヶ月研修した子もたくさんいます。山中君は非農家の子でしたが卒業してから1年間もいたので深く印象に残っています。

当時は私達も34才、30才と若かったので「お兄さん、お姉さん」と呼ばれ、私達は末っ子どうしだったのでかわいい弟や妹と思いました。我が家に来た研修生は17年間1人の脱ご者もケガ人も無く、意欲的・がんばりやで、頭数が多いので搾乳が大変だったみたいですが帰る時はクリアできて自信を得たそうです。同じ釜のごはんを食べ、毎日の作業に汗を流し、夢を語りあったり家族と同じでした。

結婚式に招待してくれた子、ファミリーで遊びに来たり相談に来たりして喜ばせてくれる子、家族ぐるみで付き合っている子、年賀状で近況を知らせあうだけの子などいろいろですが、写真入りのハガキや手紙はアルバムに大切に保管しています。

27期生の片山君は息子と同じ年で、彼も後継者としてがんばっています。息子は今春卒業して我が家に就職、人口3万4千余の小都市でたった1人の後継者です。今、種付に悪戦苦闘、えさの配合を任されて毎日乳量とにらめっこ、目を輝かせてプロの酪農家になろうとしています。

宇佐美牧場は60年有限会社にして、厚生年金、労災、雇用、健康保険などの制度に加入して「ゆとりある生きがいの持てる酪農経営」をめざしています。

来年度、息子の「夢のある近代的な牧場」、12頭Wのヘリボンパーラーでフルオート搾乳システム、フリーストールにして200頭搾乳にする予定です。

現在我が家は搾乳牛120頭、育成牛60頭、飼料作面積自作地6ヘクタール、借地5ヘクタールで、夫婦・息子・雇用1人で行っています。酪農は明るい話題が少ない状況ですが、息子の若いエネルギーで搾乳作業の軽減化、雇用の充実をはかり仕事も生活も楽しむ楽農家になる様子ががんばってほしいです。

かわいい私達の弟・妹達、息子・娘達、我が家も松山自動車道が開通して、小松インターチェンジから車で5分とかからない位近くになりました。たまには里帰り(?)して元気な姿を見せてください。

最後に酪農大学校の益々のご発展をお祈り致します。



## 「酪農大学校の研修生を受け入れて」

野村拓也  
(JA丹後酪農部会長)

私は、日本三景の1つ、天の橋立で全国に知られた京都府の丹後で、酪農を営んでおります。家族は7人です。

私は、北海道の酪農に夢と希望をもって、北海道の大学に進みました。昭和50年当時、北海道と京都の酪農は、牛とやぎほどの違いがあり、頭をガツンと叩かれたような衝撃を受けました。「いつか、自分も北海道のような酪農を……」と思いつつ現在に至っております。私が後継者になった時、15頭の成牛がいました。それから約20年たち、総頭数140頭の牧場にすることができました。こうなれたのも、北海道を始めとする、全国の酪農家の技術や哲学を教わる事が出来たからだと思っています。また、その事は私の財産でもあります。その恩返しが出来ればと思い、毎年、4～5人の研修生を受け入れています。酪農大学校からはH3年から7年まで、9人の研修生にお世話になりました。一言で言えば、酪農大学校の研修生は、良くやってくれます。家族一同、とても喜んでいきます。

春は、牧草の刈取りや種蒔きなど、たいへん忙しい時期になります。そんな時の研修生は、大変、助かります。

こんな事がありました。H4年の春、雨に追われながら牧草のロールパックをやっており、作業は夜中まで続き「雨にあわずに済んだなあ。」と思った時には、明け方になっていました。本当に研修生の方にはお世話になりました。また、この時には、ミルカーの故障で搾乳ができず、バケットミルカー2台で約50頭の搾乳を時間かけてやった事もありました。これも研修生がいてくれたからやれたなあと今では良い思い出になっています。また、休みの日には、一緒に近くの海に釣りに行き、クロダイの48センチメートルの大物を釣りあげた研修生もおります。

学生時代の研修は良きにつけ悪きにつけ、一生のうちの良い経験だと思っています。技術だけでなく、その酪農家の哲学や酪農に対する姿勢を少しでも感じとってほしいと思います。その為には、我々受け入れ農家もそれなりの姿勢がいるべきで、気をぬく事が出来ません。勉強の毎日です。また、研修生から、いろいろ学ぶ事もあり、今年は、どこの県の人かなと楽しみにしております。

現在の酪農経営はとても厳しいものです。技術と発想が必要だと思っています。10年前であればまじめにコツコツとやればよかったのですが、今日それだけでは乗りきれない現状です。そんな中での、受け入れ農家の役割も、10年前に比べ、たいへんだなあと思っています。今後、我々酪農家も心して研修生を受け入れて行かなければならないと思っています。

最後になりましたが、研修生の皆さん、これからの酪農の為に、共に頑張っていこうではありませんか。また、酪農大学校の関係者の皆さんには、このような私に毎年大切な研修生を預けて頂き、感謝しております。

「財団法人設立30周年」の御祝いを申し上げ、これからも、21世紀の酪農後継者が1人でも多く、酪農大学校から巣立つ事を期待しております。有難うございました。

## 酪農大学の研修生を受け入れて



畜産公社事務局長（畜産課長）

内藤 照章

雄峰大山と蒜山三座のふところに抱かれた岡山県真庭郡川上村の地に中国四国酪農大学が創立されて以来、ここに30周年を迎えられ、併せて、煉瓦色の壁が蒜山高原の緑によく調和し、21世紀の酪農の殿堂にふさわしい、新館が落成したこと心からお慶び申し上げます。

さて、酪農大学のカリキュラムでは、2年次に長期の校外実習が設けてあり、生徒は各々自分の希望に従って全国の先進的畜産農家へ実習に行き、実践を積むことになっています。

当畜産公社北海道桜野牧場もその1つに加えていただいております、昭和56年夏の3名の研修生を皮切りに、以来30数名の熱心な生徒達が瞳を輝かせながら、主に夏期を中心に研修にやって来てくれました。

とは言っても、桜野牧場をご存じの方には判っていただけるとは思いますが、北海道と言えば広大な耕地が頭に浮かぶ道東とは異なり、桜野牧場は山間に開けた盆地のような場所にあり、かつ、以前は開拓時代そのままのような道路のため、研修に来た生徒達は、熊笹に覆われくねくね曲がった熊が出そうな途中の景色を眺めながら、何処へ連れていかれるのだろうかという不安と同居しながらの牧場までの往路だったと思います。

しかし、山間に開けた広大な牧場と悠々と草を食む牛の群れを目の当たりにしてそのような不安も一挙に吹き飛んだのではないのでしょうか。

その北海道桜野牧場は肥育素牛の部門、和牛の繁殖の部門、ホルスタインの育成部門そして100ha余りの草地の経営と5つの部門を持っています。

研修の主体は飼料の給与・哺育など、家畜飼育管理ですが、夏には乾草の収穫作業があります。太陽がギラギラ照る、夏真っ盛りに自分の体重ほどある乾草を持ち上げたり、空が雨模様のため11時、12時までと夜を徹して乾草の収納をやってくれたこともありました。

冬に来てくれた生徒は、何日も何日も1メートル以上の行きを除雪したり、パドックに張り詰めた氷を割っての飼育管理等、青い空、白銀の世界の北海道の夢を打ち砕かれるような日々が続いた研修生も合ったろうと思います。中には自分の思うように牛達が動いてくれず、病気になったり、時には一生懸命世話をした愛牛が目の前で死んでしまったりと、どうしようのない憤り(?)に泣いたり、わめいたり色々な苦労もあったと思います。しかし、作業が終わった夜の食事時には、その悩みとどこかにいる彼女が酒の肴になってみたりと、様々な研修生活があったと思います。

わずか2か月の研修ですが畜産の各分野が揃い、豊富な経験と技術を持った職員も研修生と年齢的にも似通っており、また、近年特に自動給餌機、高能率草地管理機械など効率的生産機械を整備し低コスト経営を目指して努力しており、ハード・ソフト両面が充実しているなど色々な点で校外実習の場所としては最適な所ではないかと思っております。

ただし、昨今の貿易自由化後の経営環境は酪農の未来を背負う若者にとってもかなりの覚悟が必要とされるのは間違いないことであり、夢を抱いて私たちの桜野牧場へ研修に来てくれる酪農大学の生徒の方々の将来の経営者としての自立の何かの役に立てばと祈っております。

最後になりましたが、将来の酪農経営者を育てるという仕事は縁の下の力持ち的なものであり、そのご苦労は大変なものと思います。

しかし、30周年を迎えた酪農大学が今後更に発展し、常に大きく翼を広げ、巣立っていく生

徒たちを温かく育み、うれしい時、悲しいとき、いつでも迎え入れてくれる、そんな学舎としての益々の発展をされていくことを心から祈念しております。



## 卒業生の思い出

### 酪大生諸君へ



兵庫県津名郡五色町  
同窓会兵庫県支部長ピンチヒッター  
（財）5期 齊藤仁孝  
（日の出農協）

自分ではまだまだ若い、数年前に酪大を卒業したように思うが月日が経つのも早いもので早や25年人生の中間点がきてしまった。頭はしらががまじり腹も出てきて中年の「おっさん」になってしまった。

今、酪大生活を思うと朝早くから搾乳どろ混りになっての乾草調整、又勉強と、夜には近くへ酒を飲みに休みにはひるぜん三山へ登山、冬にはスキーをしたりと楽しい酪大生活を過した。我が青春酪大に始ったように思う。

卒業してからもひる山へ行く機会が度び度びある三木ヶ原国民休暇村等見るとほんとうになつかしく思う。「我が青年酪大我が第2のふるさとひるぜん」と思う。

「千里の道を一步より」ということわざがある広辞苑によると「遠い旅路も足もとの一步から始まる。すなわち遠大な事業も手近いことから始まる」とある。

よく似た言葉に「塵も積もれば山となる」がある。わずかな物も積み重なれば高大なものになるたとえその積み重が大きな成果を実らせる。しかしこれも「何のために」と言うしっかりとした目的感を持たないと努力は持続できない。目的を持って努力をしよう……我が18才と16才の息子にこの2つの言葉を引用してたまに言う私も人生の中間点を過ぎ小さな山しか築けていない。すぎ去った青春は返ってこないけれどこれからでもすこしでも大きな山になるよう一步、一步努力しなければと思っている。

酪大生諸君若い時こそがエネルギーがある「目的目標」を持ってひるぜん三山より雄大な山、大山より高い山を築くよう頑張ってください。

### 思 い 出



鳥取県西伯郡名和町  
同窓会鳥取県支部長  
（県）3期 小谷 茂  
〔鳥取県果樹生産指導協議会長〕  
〔鳥取県議会議員〕

私は、鳥取県立米子南高等学校を昭和38年春、卒業するに当り、酪農を志しており担任の先生の進めもあり、岡山県立酪農大学校に入学致しました。

朝食前の作業で校舎前の水路掃除の時でした。惣津律士校長は、私の作業服を見て、「胸のマークは何か？」と尋ねられ、私は母校米子南校の校章でありその由来を話しました。

それは蜂であり、女王蜂を助け、働き蜂である蜜蜂である事を話しました。

陰日向なく、働く事、それをモットーとして、学んだ事を話したのを思い出します。

惣津律士校長先生の思い出は、私の様な新入生に話し掛けて下さった事、その一言で勇気付けられ、岡山県立酪農大学校の寮生活をしている私に本当に心強い言葉であったと思い、現在、私の心情としております。

初代校長先生を忍び、財団法人中国四国酪農大学校の発展と卒業生の皆様の御健勝を発展と卒業生の皆様の御健勝をお祈りし、思い出と致します。

## 『卒業して』



島根県安来市  
同窓会島根県支部長  
財1期 石橋 守  
(安来酪農協)

財団法人中四国酪農大学校の設立30周年を迎えられたことまことに、おめでとうございます。幸いにも財団法人と改称されての第1期の卒業生として大変光栄に存じます。

ふり返ってみますと、我々が入学したのは、県立5期生として入学致しました。

酪農に関して、あまり経験の無い私としては先輩や、教務の先生方の指示に従って手探りで作業を行っていたように思います。そのうち同期生ともども慣れて、搾乳作業等スムーズに行えるようになりました。半年後1年の研修として、北海道実習を計画しました。41年の8月に実習に入り、入って暫くして、本校より財団法人として組織改称の文書を受け取り、手続きしたように思います。いよいよ、北海道実習が本格的になるにつれ、朝5時過ぎから夕方搾乳が終了するまで途中の休憩はありり無く、夕方牛舎から、上ってくると、フラフラになった記憶があります。これもしばらくすると慣れて体もついて動くようになったようです。この主人（奥さんも）は良く働く人で、当時搾乳牛30頭位豚2頭に水稻、果樹、飼料畑作を付している複合経営で、年中、朝から夜まで働きどおしの方でした。お陰様で、私ともう1人の同期の実習生は鍛えられたと言うか、自然と働くようになりました。又主人は、公務も多く勤めて居られ人望もあり、機会ある度に、研修会、視察等に参加させて頂きました。

私にとっては、大変ハードな研修を終って8月より後期の本校へ戻り最速朝夕の作業を行ってみて非常に楽な作業に感じました。

翌42年に無事卒業し、これまで何かと学び研修した事を実際の職場で活かそうと、内心意気込んで務め始めましたが、現場での授精業務にしても、様々な状態の牛と出会い戸惑ったものです。たしかに基礎は学んでいますが、応用編となる現場で経験を積むしかありません。当時の本を持ち出して、読み返してみた事もありました。そのうち、発情の基本サイクルを把んでから、一応の技術をマスター出来たように思います。

私の勤務地安来市で、昭和45、6年頃、一頭の初妊牛は、7万~12万位で売られていました。当地に初めて乳牛が導入されたのは、昭和22年に千葉県より入っています導入牛の娘は当地で7万~8万位で売られて1頭の雌牛を売って、家の改築や、娘の嫁入り準備になったそうです。それにしても、45、6年頃の初妊牛の値段は安く感じたものですが、サラリーマンの給料からすると、高くも思えるし、初めての勤務地での牛の売買の話は、何やら不思議な気がしたものです。以後、増産増産に農家の意識を高揚し、牛乳は売れ、一時でしたが初産年の自家産で50万で売れ

た事もあります。そしてオイルショックからの生産調整が厳しくなりました酪農界は、目まぐるしく変動してまいりましたし、今後も先行、不透明と言われ続けていますが、諸外国並の乳価に、対応出来るような足腰の強い、経営者が育たなくてはならない時代となってまいりました。酪農大で大切な基礎を学んで、しっかりとした自分の経営を、築いて欲しいし、そのような人材が多く育たれんことを関係機関並びに財団法人中国四国酪農大に期待致します。

## 「思 い 出」



広島県庄原市  
同窓会広島県支部長

(財)5期 野崎 幸雄

(元全国酪農青年婦人会議委員長)  
(庄原市議会議員 酪農)

財団法人中国四国酪農大設立30周年おめでとうございます。また校舎が改築をされ、かさねてお祝いを申し上げます。

さて、私の学生時代を、改めて思い起こしてみると、いろいろなことが思い出されてきます。朝5時半に早出をして搾乳など牛の世話をし、眠い目をこすりながら、午前中の講義、裸になって乾草の収納をした午後の実習、寮では、明け方まで話し込んだ事など、思い出はつきません。とりわけ、みんなで汗を流した後の充実感、今でも心に残っています。

当時としてはかなり施設、機械とも整備されていたと思いますが、今を思えば大変でした。糞はスコップでし、デントコーンの中の除草は鎌でおこない、刈り取りはモアアで刈り倒し手で集めてコーンハーベスターに投げ込むなど、今では考えられません。現在では学校や関係の皆様のおかげによって、最新の技術を取り入れた施設に生まれ変わってきていることと思います。

昭和46年4月、卒業と同時に就農をし、現在にいたっていますが、2度のオイルショック、高度経済成長に乗って乳価の値上げ、計画生産と、酪農の良き時代苦しい時代を経験してきましたが、楽しくゆとりのある農業を目指して取り組んでまいりました。そうゆうこともあって、色々なサークル活動に参加をし、中でも全国酪農青年婦人会議の役員として、20数年酪大の先輩や後輩のみなさん方など、多くの方々の協力のもとに務めさせて頂き自分自身を鍛えることができました。

私達の時は、先輩や後輩との出会いはなかった訳ですが、今でも少しの間間接することができると聞いております。

これからも数多くの後輩達が巣立っていくことでしょう。わずか2年間の学生生活ですが、どうか人と人との出会いを大切に、物の時代から心の時代ともいわれている今、何か熱中できることを見つけだし取り組んでほしいと思います。振り返ってみて楽しかったと思えるような充実した学生生活を送って下さい。

最後にこのような記念紙の紙面を私が飾れることを嬉しく思いますと同時に、酪農大のますますの発展をお祈り申し上げます。

## 誇れる母校



広島県比婆郡高野町  
同窓会広島県支部事務局長  
(財)4期 前田(神田)万里子  
(JA庄原本所  
日本農業新聞庄原通信員)

### 仲間の活躍に期待

私の現在の職業はJAの広報ウーマン！毎日、カメラとメモ帳そして地図を車に積んで、広報JA管内を走りまわっている。最近取材先で母校の話を良く耳にするようになった。広島県には卒業生が多い、そしていろいろな分野で活躍している人が多い。

話題の中で「私も酪大の卒業生よ！」と言うと「エーッ嘘」とか「わー本当！嬉しいな」とか、いろんな反応が返ってきて、ますます話に花がさく。母校が同じだというだけでなく、酪農大学校には他の学校にはない同胞愛のようなものがあるのではないかと思う。入学希望の時点から、目指すものが同じというのが自然に連帯意識をもたらすのではないだろうか？

なにはともあれ、多くの仲間が活躍する姿を目の当たりにするのはとっても楽しい。そしてみんなが輝いているのが、とても嬉しい。

### 振りかえれば

私が卒業したのは確か昭和45年(かなり昔で思い出せない……)だったと思う。酪農大学校の第4期生、男子学生の中に紅5点のオテンバ女子学生が、かなり幅をきかせていたように思う。5人の女子寮を造っていただき、先生がたの心配をよそに、かなり自由奔放に青春を楽しんだ。

昨年25年ぶりに山口県で同窓会をひらき、当時の隠された秘話(すでに時効ということでも)続々とでて、極めて真面目(?)だった私などは啞然として開いた口がふさがらないような思い出話もあった。

いずれにしても、青春のまっただ中を、あの蒜山三座にいだかれた高原ですごし、大自然と大動物を相手の年月は、年を重ねるにしたがってより鮮明感をもって心によみがえる。今も自然と人間が相手の仕事であるが、若き日の感動は異質のもののようなものである。

### これから

この原稿を依頼され、改めて歳月の流れを感じている。——光陰矢のごとし——と本当によくいったものである。

よく言われる事だけど、人生って本当に長いようで短いものだと思う。折り返し地点を過ぎてみて、これまでの道のりとこれからの生き方の大切さを実感している。私が座右の銘にしている好きな言葉がある。

求めよ！さらば与えられん

たたけよ！さらば開かれん

仕事に行き詰まりを感じた時、思わぬ出来事に動揺した時等々、この言葉を心の中で呪文のようにつぶやく。すると不思議に気持ち楽になり元気がでてくるのである。「前田さんはいつも元気がいいね」「あまたの明るさがうらやましい」と周囲からよく言われるが、そんなことはない、私も落ち込む事はいつもある。ただこんな暗示をかけて立ち直りが早いだけと思っている。

最近、人との出合いを大切に思うようになった(歳のせいかな?)。これまでの人生とこれからの人生に幾人の人たちと出会うのかと思うと、日々出合いがとても貴重に思われる。人は自分の心の中に「あの人」がいるから頑張れるという「人」を多く持つことが大切！そして自分もま

た「あの人」になれるよう努力すること！

そんな出会いが人生のすばらしいさだと——。ある講演で聞いた心に残る言葉。これからの人生、私も誰かの「あの人」になれるような自分磨きをしていきたいと思う日々である。

青春時代を過ごした酪大での学生生活は、私の人生に大いなる影響を与えており、その体験は自他ともに誇れる自信となって、私の中に強く根付いている。

最後になってしまったが、我が母校の限りない発展を心から祈っている。

日本農業新聞

(第三種郵便物認可)

私が描く理想の老後

わが家は、中国山地のど真ん中、島根県との県境にあります。いわゆる中山間地帯。水稲にリンゴ栽培、それに和牛飼育をしています。現在は、両親と私たち夫婦四人の生活ですが、つい四年前までは、祖父母が健在、二人の子供たちも同居



と、八人の大家族の生活が二十年来続きました。夫は米とリンゴを作りながら、地元高校の講師やJAの営農指導など多忙な日々を送っています。そして私も、今年が勤続二十一年表彰を受けるというJAWマン。わが家は典型的な兼業農家なのです。そんな日常の中、冬期間雪の多いこの地方で、夫は根っからのスキー好きです。長男が生まれると、まだ歩けないうちからスキー

スキー家族いつも青春

一生懸命に生きて年を重ねる楽しさ



広島県比婆郡高野町中門田289-1 前田万里子 (44歳)

景がありました。猛然とスキーに挑戦しました。それはたぶん年齢的に六十歳を越えて見ただけのスキー場か、自分か主役のスキー場かと思われ男女のベアでした。そして三十歳半はでこった返すスキー場のなかで、その二人は静かに、そしてとても楽しそうにスキーを楽しんでいました。今、子供たちは大学三年た。ロッジでスキーを一生遣つれにと学生みながら何気なく二人に目を合わせています。長男はインタキーウエアをハイに出場すべく、猛特脱いだ二人は、現在の私の夢は、これからのセーターにあら精進して家族をつくるであらう息子たちと体力の統一ウーン、すけたいとことです。親子四人でシニブルを描くなっていました。夢は実現しましたが、これからは孫たちと一緒に大シニブルを描きたいと思っも立派な白髪です。一年ごとに頼もでしたが、それは現実感を伴い、日々の夢は膨らんでいきます。

場へ連れ歩きました。当然、私も子供役として同伴、赤ん坊の長男を抱きながら休日のたびに、スキー場をうろろろ……。そんなある日、私の目の前に強烈な印象で映った光景がありました。何とやらわらかさがあり、それがきっかけとなった青春真っただ中です。「今、長男、二男がスキー場を一生懸命に生きています。年を重ねるのが楽しみなので、二人とも根っからスキーが好きです。そんなある日、私の目の前に強烈な印象で映った光景がありました。何とやらわらかさがあり、それがきっかけとなった青春真っただ中です。「今、長男、二男がスキー場を一生懸命に生きています。年を重ねるのが楽しみなので、二人とも根っからスキーが好きです。そんなある日、私の目の前に強烈な印象で映った光景がありました。何とやらわらかさがあり、それがきっかけとなった青春真っただ中です。」

日本農業新聞 平成6年2月19日付

山口県吉敷郡阿知須町

(財4期) 松田芳行

本校卒業後、麻布大学獣医学科卒業  
海外協力隊員としてネパールへ2年間  
獣医科医院開業  
ネパールの友人(子供達)を日本へ招待  
和牛1頭飼育

「卒業して」



のどかな牧場経営を夢見て、何もわからないまま酪農大学校へ入学したガキ。それが27年前の私でした。親元を離れての生活から始まり、寮生活、農作業、牛に触れること、洗濯、さらには教務実習における肥かつぎまで…。初めての体験が数多くありました。しかし、なぜか、それらの体験が楽しく思えたのが不思議です。

半年後からの校外実習では、現実の厳しさに目を覚まされた時でもありました。のどかな牧場のはずだったその実態は、早朝から夜までの作業メニュー。そして、主人の猛烈な働きぶりには、若い私の方が圧倒されました。非農家であった私の頭の片隅に、「開拓」がありました。北海道実習の帰路、中標津でその現実を目にした時、あらゆる分野の能力の必要性に、「スーパーマン」でしか、できないことだ…と、挫折感を味わったのも事実でした。

酪大卒業後は、畜産関係への就職を目指すため、進学を試みました。同期生が結婚する頃から

スタートした4年間の学生生活は、酪農家に下宿し、朝・晩の作業を少し手伝うことで、食事、洗濯、手当もつきました。酪大で得た技術が、思わぬところで役に経ったのです。

私には、酪農大学時代にも、もう一つの出合いがありました。すでに十数年前に亡くなられましたが、金田清先生です。私が入学当時、先生はカンボジアから帰国し、蒜山に赴任して来られました。話の中で、青年海外協力隊員として、カンボジアで活躍されたことを聞くことができました。“いつかは自分もそのような活動をしてみたい”と血が騒いだことを記憶しています。その話から10年後、私も青年海外協力隊員として、ネパールへ派遣されました。そこでは日本とは違う、原始的な飼育が営なまれ、細々ながらも、のどかな畜産を体験することができました。2年間の、ヒマラヤ山ろくの小さな村での活動は、本業よりも、特技であったバレーボールの指導の方が、遠くの村まで有名になってしまったようです。

その後、山口県へ戻り、農業共済の家畜担当が主な仕事となりました。幸いにも県内の同期生である、松永博視君や白石隆雄君をはじめ、先輩、後輩の方々に多大の御協力を頂き、仕事を助けてもらいました。卒業生の大半の方々が、牛を飼育されている状況に、サラリーマン生活を送る私は、多少のうしろめたさを感じていましたが、ひょんなことから私も和牛を一頭飼い始めることになりました。この付近も田舎ですので、かつてはどの家にも牛が一頭はいたそうです。現在も牛小屋だけは残っている家もありますが、誰も牛を飼育していない現況です。私の牛が部落で唯一の牛となりました。

宅地で飼育し、草はもっぱらよそ様が刈った草を、リヤカーで集めて回るきわめてズサンな飼い方です。トタン屋根だけの吹きさらしの牛小屋ですが、すでに12才。9産目の出産が間近となりました。今後の目標は、20才、15産を密かに狙っております。たかが1頭の飼育ですが、酪大卒業生の証明書がわりになれば…と思っています。

私にとっての酪農大学の魅力は、人との出合いだったと言えます。私も人生の半ばを過ぎた年代になりましたが、酪大関係の人々とのつき合いは長く続いています。同期生はもちろん、実習先の方々。蒜山では、今も名越先生、三牧先生、津田さんと会うことができますし、退職された常守先生や食堂の戸田さんの家にも立寄れる雰囲気は何とも言えません。

蒜山に母校がある限り、何年かおきに訪ねてみては、ガキの時代を懐しく、楽しく思い出しています。

毎日新聞  
平成5年5月20日付

本を自費出版しネパールの子供達を招<sup>しょうへい</sup>聘

●ネパールの青年19人が県庁訪問  
青年海外協力隊OBの招きで16日から吉敷郡阿知須町に滞在しているネパールの青年が19日、県庁を訪れた。  
ネパール・ジリ村の青年十九人（一九七六（昭和五十一）年に青年海外協力隊員として同村に赴任した阿知須町の獣医師、松田芳行さん）が二年の滞在期間中、村人と交流。帰国後の90年に家族で再訪するなど交流を続け、県OB会の協力で日本に招いた。

「日本で見たことを持ち帰ってネパールの発展に生かしたい」とあいさつ。婦人青少年課の吉村京・課長も「県民の心に触れて日本の良いところを見つけて下さい」と歓迎した。青年たちは「日本のように発展するには何をすれば良いか」など真剣に質問、熱心にメモを取っていた。



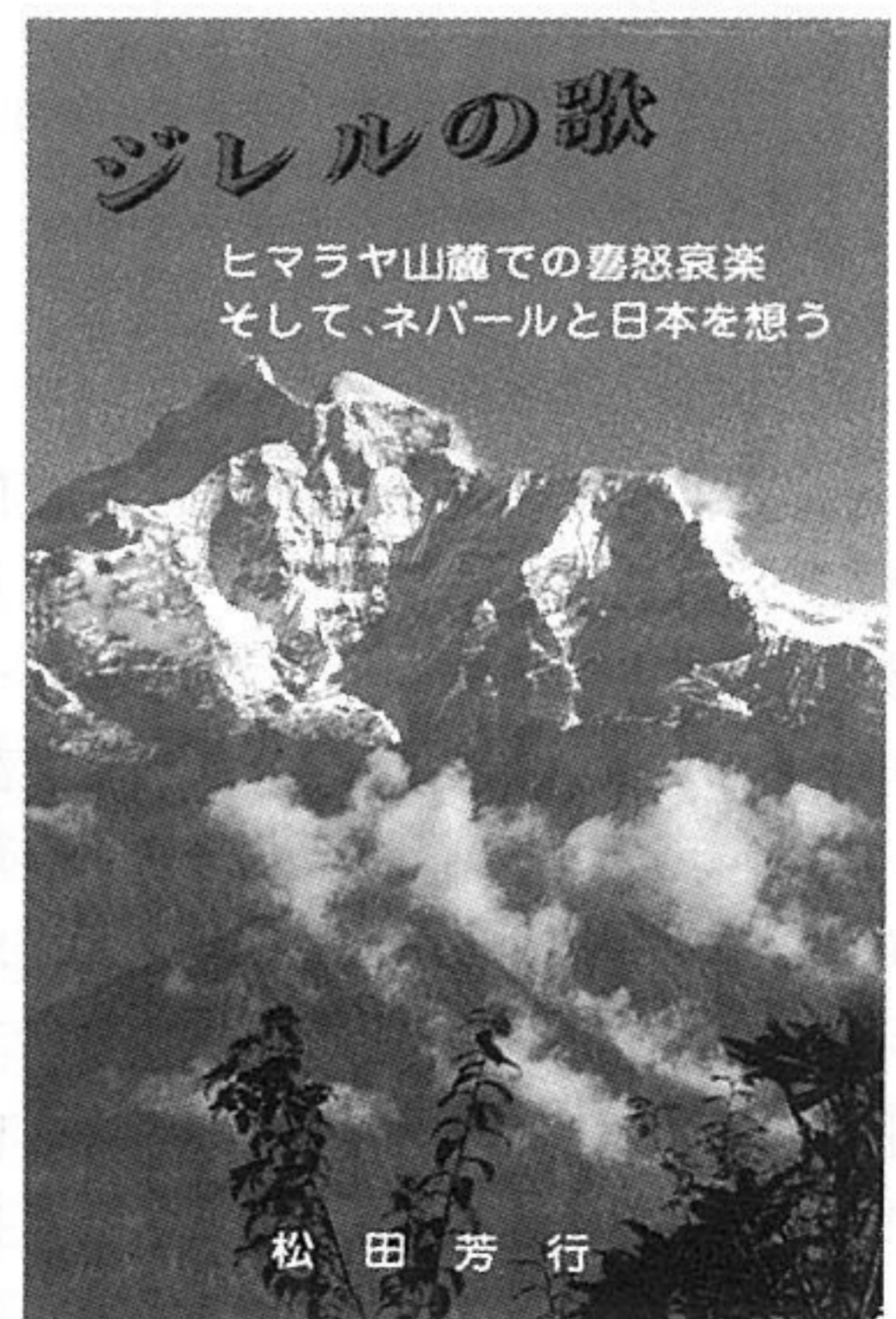
県庁の最上階で山口市街の説明を受けるネパールの青年

続「ジレルの歌」

### ジリ村青年来日報告書



松田芳行



## 「想 い 出」



香川県高松市

同窓会香川県支部紅一点

(財)28期 古川 亜紀

(校外研修期間中、ホルスタイン共進会が)  
縁で香川県に嫁ぐ

私は、酪農大で学んだ2年間をずっと忘れられないでいる。毎日を沢山の牛達と過ごし、友人達と共に汗を流し…、そして大学時代が一番の思い出深いものが詰まった8ヶ月間研修。思い出せばきりが無い程楽しかった。

現在、卒業して2年目の夏を過ぎようとしているけれど、時々酪大時代の思い出が私の心に押し寄せてきます。

入学式の前日であったでしょうか、初めて親元を離れ、2年間生活する寮の部屋に沢山の荷物を運び込んだあの日。女子寮の皆と顔を合わせ、ちょっぴり臆病で人なつこい自分の性格に頼りきっていた。結果皆にすぐ溶け込めホッとしたのもつかの間、次の日からの当番表を見ると、いきなりパーラーでの搾乳当番になっているではないか。実家のパイプラインなら経験はあるが果たしてジャージー牛のパーラー搾乳を上手く出来るだろうかと不安を隠せられないでいた。

次の日、先輩方と一緒にロータリーパーラーへ入ると、朝早かったせいなのか、あるいは寒かったせいか少しも動けないでいるうちにアッという間に搾乳作業が終わってしまった。

けれど、そのうちに朝、夕の仕事で慣れて来て、スムーズに出来始めた時は本当に“やれば出来る”精神だなと思いました。

そうして、春の大雪を乗り越え（これには地元の人でも驚いたとか）蒜山もゆっくりと夏を迎えました。

暑い日射しの中、ジャージー牛を追いながらてくてくとポプラ並木を歩く仕事はとても気持ち良く、一番好きな仕事であった。くるりとした瞳、黒くふちどられた大きな瞳、現在でもずっと忘れたくない光景のひとつ、ジャージー牛の表情…。

秋になると、トラクターの試験に向けての運転練習が始まった。第一牧場も第二牧場も辺り一面白い線で埋めつくされ、それぞれの運転を繰り返す日々が続いた。

そうして冬を迎えたかと思うと、だいたいクリスマスイヴには雪、雪、雪で牛舎も寮も草地まで真白。冬ごもりではないけれど私は寒いのが大の苦手なため、講義に行くにも赤いチャンチャコを着て行っていた。（兄はおそろいの青いチャンチャコ）

2年生になると、私は愛媛の酪農家へ研修に行き、慣れない土地に日々順応しようとする生活が続いた。大きな牧場で圧倒されてしまったが、人間味のある優しい人々に囲まれ多くの失敗もあったけれど少しずつ少しずつ苦手だった仕事もこなせる様になり、気がつけば自分でも驚くぐらい度胸が着いていた。

そして北海道研修の時、思い描いていた研修生活とは全くの逆の、19年間生きて来た中で一番長かった2ヶ月間を迎える。この時ばかりは、情けない話ホームシックにかかったり、やたら独り言が増えたりと、自分らしさのかけらもない暗い気持ちであった。何故なら、まるでロボットの様な扱いではあるし、実習生の気持ちひとつを見てくれるワケでもなく、相手にされない、別に私に期待しているワケじゃない、他の誰でも良かったのだという様な所であったのだ。

気を取り直してやっとフルに自分を出せたのが校内研修。1年生の皆々とコミュニケーションをとったりして本当にアッという間にすぎた2ヶ月だった。

秋、2度目の四国で、徳島県での研修。この時の事がきっかけとなり、現在の私（21才）の生活がいまここにあると思う。研修農家のご主人が、共進会に牛を出すから引っ張ってみるかを持ちかけてくれ、私なりに精一杯頑張った。その時の後ろ楯となってくれたのが今の私の夫なのである。いくら実家が酪農家であろうが、私は牛の扱い方、毛刈りのやり方を全く知らなかった。ひとつひとつ教えてもらっているうちに縁が出来ていったのだと確信しています。そして、待ちに待った共進会当日、その日は朝から落ち着かず、何度もトイレを往復した。そして、本気で牛を引くと、牛もそれに応じてくれると気合いをグッと入れて、この日のために用意した蘇やかな赤いシャツに白いズボン、キュッと口紅をひいて出場した。皆々、誇らしげに牛を引く中で、一生懸命の気持ちが届いたのか、審査員が私の引いている牛、リードマンの尻をポンとたたいた時のドツと湧いたざわめきを私は決して忘れない。あれ程心が和み、また晴れやかな気持ちになった事はそれまで生きて来た中で初めての経験であった。リードマンは育成部門のグランドチャンピオンになったのだ。

いよいよクライマックスであった徳島での研修を終え、人工授精etcの資格とりのため酪大に再び帰って来た私。それぞれの成果を、研修生活のみやげ話にミックスして、またみんなとの寮生活がはじまった。

思えば、あの酪大で過ごした2年間は、私の中で大きな力がついた時期だった様な気がする。沢山色々な出来事があり、また多くの酪農に関する人々に出逢えた。とても充実した2年間であった。

また、これから蒜山に出かける事があるかも知れないけど、その時は“仲間達”と思い出話を咲かせる事でしょう。

最後に、お世話になった先生方に大きく感謝の意を表します。有難うございました。



## 思　い　出

徳島県板野郡板野町

同窓会徳島県支部事務局長

(財)13期 兼 松 裕 子

(酪農)

創立30周年 おめでとうございます。早いもので卒業して16年が過ぎ、ともすれば現実におわれ忘れがちになりつつある学生生活が今、懐かしさと共に先生方や先輩の方、後輩の方々と同期の皆様、研修でお世話になった皆様の顔が、つぎからつぎへと16年前のそのまま思い出されてきます。私にとっては、農家の長女ということもあり酪大と岡山県が私のふるさとのような存在だと想っています。同じ酪農に希望と夢を持ち勉強し成長した青春そのものだったなあと想っています。あの不安定期18才～20才と若かったなあ一何をするのもはじめての事ばかりで皆さんに迷惑ばかりかけていたような、たくさんの友達とたくさんの方々と知り合って得たものは私の財産となり現在の私があるのだと思っています。

蒜山の四季が思い出深く、春遅い桜を見て初夏の一面のほたる、夏はさわやかでしらかばやポプラ並木が美しく、秋の紅葉や牧草や稲ワラの収集風景、冬は雪や長く太いつらら屋根の雪おろしなどなど、蒜山三座と遠く大山をいつも見て酪農にぴったりでそんな風景にジャージー牛がとてもかわいく感じたものでした。

この思い出を書くにあたり、春に徳島県卒業生の会合をして親睦をはかり先生方とも話をして時代の移り変わりを認識してはいたのですが、アルバムを出して友達や先生方の顔を再確認して



増々酪大への思いが深くなり蒜山が恋しくなりました。今年の夏は猛暑のため涼しさが羨ましく、友達からも電話をもらい懐かしさに花が咲き気分はもう蒜山へ飛んでいってるようなものでした。でもいざ文面をと考えると、思い出がいっぱいありすぎてまた、今で言う、おちこぼれの存在であった私が…はずかしくって困ってしまっています。

私達の頃は、朝の作業をして、午前中授業昼より作業や研究など、夕食後は寮での生活当番などでは、買い出しやそうじ、食堂の手伝い、女子は4人で男子23人、だれひとりやめることなく27人が卒業できたことはとてもうれしかったです。今は、女性も増えて寮も増築されたと聞き発展されている事をうれしく感じています。第2牧場での初めてのパーラーでの搾乳には、女子だって負けられないと泊まりはだめだったので、朝早く4時に木々が凍って夜空にきらきら輝やいているように見えたまだ真暗い中を先生が車で送ってくださり、ジャージー牛の熱気の中、おいしい牛乳がたくさん搾り出され回転していく様子、すばらしく近代化されびっくりしたものでした。もうあの好景はなく新しくなっていると聞き、年月の過ぎる早さを感じ、ふと我に返り、歳を感じてしまいました。今秋、ぜひ酪大へ行って16年の年月を感じてこようと思っています。春の山菜とりや友達の家泊まらせてもらったり、いろいろな観光地へもつれいってもらい思い出いっぱいです。卒業前に蒜山にも友達や先生方と登山し美しさを満喫したり、郷土芸能にもふれることができとても良かったと思っています。

研修では岡山県下の酪農家2軒へおじゃましお世話になり、いろいろ足手まといになりながら勉強し、家族同様にさせていただき、地域の方々にも、あたたかく接してもらい、忘れる事のできない事ばかりです。今も時折、連絡させてもらい、娘のように話して下さり助言してもらっています。

現在私は、両親の手伝いで、学生の頃は、酪農専業に!!と息込んでいたのですが、50頭牛舎にしてすぐに、生産調整にあい、思うように牛を増せなかつたりして、現在は50頭成牛で搾乳しているのですが、地域がら水稲と野菜を生産し、野菜は年中いろいろなものが成育できるためと、豊富な堆肥を還元して少しずつですが酪農に滑り込み年中急がしく頑張っています。また、地域の方にも堆肥を利用してもらい、交流もはかっています。

我家には小6の男子、小1の女子がいて、岡山での思い出を少しですが話すことがあります。これが蒜山おこわよ、祭り寿しよ、と自分流に味付けして、また長いもの天ぶらやおぞう煮など岡山の味を思い出し、かにもたくさん食べた事があるのよ!?!?などなど、月曜日はカレーライスの日だったから我家は、土曜の昼がカレーの日なのだ!!とか言っては、子供達につくっています。いつか2人をつれて岡山を蒜山を酪大を見せてあげようと思っはいるのですが、また、研修先でのいろいろなごちそうや家庭の味に出合えて、はじめて口にすることもありよい経験だったと思っています。

数年前より農大の学生さんを研修生として共に作業に加わってもらっています。昼間だけ5週間なのですが、若いパワーを見せてもらっています。まだ2人の方が来てくれたんですけど、私の学生時代とだぶって思い出されます。

とりとめもなく書いてしまいましたが、農業新聞や酪農誌やTVで岡山の方々の事や酪大出身者の方の記事を見つけてはうれしくなりとても身近に感じています。お世話になった先生方や研修先の家族の皆様、本当にありがとうございました。お礼申し上げます。最後になりましたが13期生の皆様、各地で頑張っている様子、ぜひ会いたいですね。いろいろ話がつきないと思います。お身体に充分気を付けて頑張って下さい。また酪農大学校の増々の発展と繁栄されますことをお祈りしております。

## 想 い 出



愛媛県北宇和郡広見町

同窓会愛媛県支部長

(財)4期 松浦幸央

(農業共済連)

昭和45年卒業の第4期生です。

宇和島地方農業共済組合に勤務して、26年になります。主に家畜関係の仕事を長年務めました。酪農大学校で習ったことは、充分活かされています。特に乳牛の削蹄については現在は実施していませんが、5・6年ほど前まで、5・6人で年間約千頭ほど家畜の損害防止事業として実施していました。これから益々厳しい農業情勢の中、農家のためになる農業共済人として生きたいと思えます。

私は、愛媛県宇和島近郊の四国西南部にあたる広見町の山間部から酪農経営を目指し、意気揚々とひろびろした蒜山高原に向った事を、今でも回想する事があります。

牧場での乾草集め、デントコーンのサイロ作り、搾乳等の実習、大学校の授業、校外研修等々……。

学園だよりや、大学校の先生方の話を聞いていますと、私達が住んでいた寮や食堂・官舎等もう形を変えているとか、時代の流れを感じています。

現在、わが家では乳牛を6頭飼養していますが、夏のデントコーンのサイロ詰めをしていると、酪農大学校の時にはデントコーンをカマで刈り束にしてフォーレジハーベスターで詰めていたことを思い、また乾草集めでは大型トラックに乾草を満載し、その上に乗って振り落されそうになった事、国民休暇村の観光客の前で搾乳をし乳牛のオッパイは気持ちいいと話したり、休みの時は蒜山三山に登り雷に合い怖い思いをした事、校舎の裏の牧場でスキーをしてアイスバーンで顔から転倒した事、肥料散布中にタヌキに出会い寮でタヌキの焼肉をして、2・3日部屋中悪臭に悩ませられた事、初めて米子に行きスケートをした事、友人と酒を飲み将来の酪農経営を語り合い、飲み過ぎて翌日授業中に居眠りをした事など、学生時代は大変優雅に生活していたと懐しく思い出され、あの頃に返って見たいと思えます。

入学当時は学校の施設が近代的であり、フリーストールの牛舎、ミルクパーラー、何十haもある牧草地、百mもあるコーンの畑等、急山間地出身の私には、圧倒されいやになる事もありましたが、思い直して条件にあった施設を作り、酪農経営を夢見たものであります。

共済組合に勤務をしていますが、今でも家畜、特に乳牛が好きです。心の片隅では本格的な酪農経営を行っていきたいと思う時もあります。

酪農大学校を卒業して、中国四国各県にそれぞれ友人同級生ができ、細々ではありますが交流を続けています。

酪農大学校と同窓会の益々の発展と、同窓生の皆様のご健勝を祈りながら、筆を置きたいと思えます。

## 卒業して



高知県宿毛市  
同窓会高知県支部理事  
財3期 増田 泰男  
(酪農、長男は第31期です)

財団法人設立30周年を向え、心から慶び申し上げます。私は、3期生として、卒業してから、早くも26年が過ぎました。設立まもない時期でしたが、すでに現在の、学校の設備はそろっていて、学生は十分に勉学に励むことが出来ました。今長い間見る事のなかった卒業アルバムを出して、思い出に、侵っています。校長の蔵知校長、花田先生、上原部長、大きな体の、浅羽部長、また、若い頃の津田さん、りっぱな教職員が、沢山いて、熱心に指導して、いただきました。

岡大の須藤先生が、蒜山は良い所だ、とよく言っていました。そのはずです。当時、学生運動の激しかった大学から、静かな酪大に教えに来ていたのですから、また、在学中には、2つの大きな催し物が、行なわれ、1つは、植樹祭で、天皇、皇后、両陛下を、すぐ近くで見ることが、出来て、とても印象に残っています。後期には、第1回目の、全国ジャージ共進会が、行なわれ、会場作りの、手伝いを行いました。その時、永井仁先生が、来ていました。休憩時間になると、色々な話をしたり、アイスクリームを、学生には、サービスを、して下さいました。以後、永井先生には、現在まで、熱心な指導を、頂いています。

卒業後、酪農経営に従事し、今では75の乳牛になりました。飼育するには面積が少なく、牛舎は、増頭できない状態です。牛の消耗も、予想以上で、少しでも健康で、長く飼養できるように心がけています。平成2年から、地域で受精卵移植に、取り組み、多数の後継牛が生産されましたが、私は、雄、雌1頭で、現在初産搾乳中です。昨年10月には、北海道より導入して、本年4月に採卵して、平成8年2月に、第1号が分娩予定になっています。優良な乳牛を生産するには、一番良い方法だと思って、行っていますが、まだ長い年月を必要とするでしょう。

新しい技術を、取り入れながら、毎日の牛舎管理等に、日々は過ぎて行くばかりですが、本年4月から、長男が本校で研修することが、出来るようになり、喜んでいます。

高校までは、牛に関する事は、何一つしたことがなく、本校で、十分酪農の知識を身につけて、また、学友とも仲間意識を強め、卒業して、酪大に行って良かったといえるような学園生活を、送ってほしいと思います。

私自身も、酪大に行って良かったと新めて、思います。高知県下にも立派な経営者となって、頑張っている卒業生が多数います。OB会の発足を機に、連携を保っていきたいと思います。

教職員の旁々の、日頃の努力に、感謝すると、ともに、今後とも、御指導を、よろしく願います。

## 想 い 出



岡山市邑久郷

同窓会岡山支部長

(県) 2期 千葉靖代

(酪農)

設立30周年を迎えおめでとうございます。私県立2期生の卒業ですが、今思い起こせば私達の時は津山の酪農試験場で受検し、4月に蒜山に入学しました。1期生は津山で1年を過しているのので、我々2期生が最初に蒜山に入ったことになると思います。従って学校は完全に整備されてなく、毎日々惣津校長先頭にナタ、ノコギリ、スコップをもって山に芝刈りに又溝掘りに草地作りに汗を流したものです。こんな毎日だから、先生からとも生徒からともなく理由をつけては、よく酒も飲んだものです。私はあまり飲まなかったのに無理やり飲まされ、寮のベットに洗面器をかかえて寝たことも何回かありました。2期生は高校卒業してすぐ入学した人が半分位であとの人は社会人を経験し入学した人がいて年令差が7才位ありましたが、何んの抵抗もなく楽しい学生生活が送れました。又地元の人も暖たかく迎えてくださり楽しい思い出を残して卒業することが出来ました。卒業後蔵知校長の進めで、北海道の黒沢牧場に実習に行きました当時黒沢牧場は「ホワイトバーチ・バターボーイ」と言う国産初のEXの種牡牛が大活躍の時で実習生が15人もいました。皆んな牛飼いを夢見る若者ばかりで全国各地から来ていました。ちょうどこの年に第1回北海道B&Wショーが恵庭の家畜市場で開かれ、日本で最初の酪農家が企画から運営すべてを行うショーでした。実習に入って8日目にもかかわらず、酪農専門学校卒と言うことがあったのか、親方に大変可愛がられ、出品牛三頭と実習生3人と共に前日会場につれて行っていただき、夜を徹しての牛の世話そして飲みながらの牛談義を聞き、ショーとはこんなに楽しいものか思いました。当時は、町村、宇都宮、山田牧場が強く上位は3牧場で独占していました。大きな体験をさせてもらった黒沢勉氏に今でも感謝しています。そして大志をもって岡山に帰り、父が経産牛6頭、育成牛2頭の経営の後継者として酪農に従事しました。

当時公務員の初任給が1万3,000円位で、経産牛1頭で年に7万円は純益がある時代で、経産牛15頭取得すれば年収100万になると計算し、後継者資金50万円を借り出発しました。そして5年後には25頭牛舎を新築したと言った具合に資金を借りても、いつのまにか返済出来、近所を見回すと、毎年誰かが牛舎を新築し仲間は増すし、メーカーはどんどん搾って下さい、この先20年はいくら搾って下さっても買いますと言うし、大へんいい時代を歩んで来た様に思います。そして昭和50年頃から経営も安定したし、昔の北海道のB&Wショーを思い出し、仲間がつどい楽しく競い合う共進会に、参加するようになりました。乳牛改良は牛飼いの根本です。良い牛を買って来て出品するのではなく、あくまでも自分で作った牛を出品して「ショーは心を豊かにし、牛乳は生活を豊かにする」名言通うりに、勝っても負けても、自分自身なっとくして、楽しいショーを味って来ました。ところが最近の酪農を取り巻く内外の状況は、一昨年ガットウルグアイランドの合意以降さらに一層厳しさを増し、将来に対する不透明感を払拭することができないでいる。このような時こそお互に落ち着いて事態を分析し解決策を考え出すゆとりが必要だと思ふ。世界的な食料不作の時代が必ずや将来、来ると言われています。食料の中で牛乳が一番安全食品です。高齢化して酪農界がすいたいする中できっと、昭和40年代のような、はなやかな時代が将来きっと来ると思ふ。これから酪大を巣立つ若者たちよ、大きな夢を持って、頑張ってもらいたい。



## 30周年に寄せて

岡山県真庭郡川上村  
同窓会岡山県蒜山支部長

(財)2期 筒井 一

(酪農)

財団法人中国四国酪農大学校創立30周年、おめでとうございます。

私達、2期生が入学したのは、創立から半年足らずの、41年4月でした。

創立当初という事で、寮や牛舎の新しい施設はまだ建築途中で、あたりは雑然としており実習時間は、毎日のようにスコップ片手に溝掘りや土ならしの土方作業ばかりやっていました。

三木ヶ原の草地の中に、第2牧場の牛舎の鉄骨の骨組みがまるで廃墟の様に建っていたのは大変印象的で、今でも良く覚えています。入学して間もない頃、北海道よりホルスタインの初妊牛が初めて入ってきましたが、牛舎が完成していないので、第1牧場の草地にパドックを作り、乾草を与えながら管理しておりました。

第1牧場には、それまでジャージーが飼われていたために、ホルスタインが分娩を始めると、両方搾乳しなければならないのですが、一緒に搾っては都合の悪い事があった様で、運動場に移動ミルクカーを置いて、ジャージーを別に搾っておりました。

雨の多い所ですから、あたりはドロドロにぬかって、牛もミルクカーも泥だらけで、たいへんな事でした。

7月頃かと思いますが、第2、第3牧場の牛舎が完成し、ジャージーは、5、6頭を古いストールバーンに残して、第3牧場に送られホルスタインも約半数が第2牧場に送られ、やっと本来の姿になったようです。

これで我々も単純労働者から解放され、学生らしい生活になり、落ち着いて勉強に身が入る様になりました！（というのは本当がどうか？）以後は、他の卒業生の皆様と同様に、講義と実習の規則正しい生活を送り、将来の夢を語り合いながら勉強に励んだものでした。

酪大も卒業生が800名を越す様になり、それぞれの地で、多くの分野に、先導的な立場で活躍されている方が数多くおられます。

学園の同窓生として心強く感ずると共に、酪大の果たしてきた役割の大きさを感じます。

酪農を取り巻く条件は、日に日に厳しくなりつつあります。

この様な厳しい条件にも負ける事なく立ち向う、勇気と知恵と体力を備えた、若き担い手を、数多く育てるために、今後の酪農大学の益々の発展を祈念申し上げます。

## 想 い 出



長崎県南高来郡北有馬町

(財)25期 中岡 信治

(酪農)

財団法人設立30周年並びに、本館竣工誠におめでとうございます。早いもので私が酪大を卒業して5年目を向え、酪大の様子もずいぶん変わったことと思います。私も卒業後は酪農に従事し、がむしゃらに毎日を通して来ました。そんな折、8月上旬、名越先生から記念誌の原稿の依頼を

受け、仕事の合間に酪大での思い出を振り返ってみますと、いろんな事が次から次へと浮んできます。酪大に入学した時は、長崎では想像もつかない4月の雪に、とんでもない所にきてしまったのではないかと思ったほどでした。又、一番の苦勞が言葉の違いで、なにぶん生徒の半数近くと先生方は岡山弁での会話ですので、話されている事が「なんのことやら」といったことが度々ありました。その逆もあったと思います。しかしそこには酪農を志、集まった仲間ですのですぐ溶け合うことができました。私は班長を任せられていたので月に一度の作業の分担の時は個々の意見を聞き、まとめるのには頭の痛い思いをしました。そんな中でも搾乳当番を決めるのはひと苦勞です。土曜日の午後と日曜日にも作業をしなければならないし、相手によって作業時間が長くもなり、短くもなるからですけど、今思うとなんとばかりかかと思えるほどで、1年中休みなく働いている今では夢のようなことです。酪大での2年間の一番の思い出は、正月に第2牧場でアルバイトをしたことではないでしょうか。朝5時から二牧に上がり作業をして下りてくる。そんな1週間でしたがその中で忘れられないのが、朝起きて玄関に出ようと戸を開けるが戸は開かない。ふと外を見ると外は一面雪景色で、ひざまでは埋ろうかというぐらいの積雪でした。長崎では年に何回か雪が降るくらいなので、ただただ驚くばかりで、作業の疲れなど忘れるくらいの感動でした。時には、酪友と朝まで騒いだり、大山にスキーに出掛けたり、けんかしたり、喜びあったり、私にとって酪大での2年間の生活は長崎では体験できないことや、素晴らしい酪友を提供してくれました。この事が低迷を続けている酪農界を乗り切っていく上で私の糧となり、酪友が仲間であり、時としてライバルであると思います。卒業の時、次回の千葉全共は無理だが十年後の全共で会おうと約束したが、幸い次回は岡山全共とのこと、一層経営に磨きをかけ出品できるよう努力しようと思います。最後になりましたが、酪農大学校の益々の発展と共に、卒業生並びに在校生の健康とご多幸を祈ります。



## 酪農大学校を卒業して

北海道千歳市

(財)9期 田村正司

(広島県から酪農の夢を北海道で実現)

まずは、設立30周年おめでとうと、言わせてもらいます。

早いものですね時間が過ぎて行くのは。思えば私が、9期生として入学、卒業して早20年という年月が過ぎ去った訳です。

そもそも私が、酪農を目指したのは、高校2年生の夏休みに、北海道一人旅をした時からです。何気なく毎日を過ごしていたそれまで。ただ汽車に乗って旅をすることが好きな自分に、北海道を、一人旅するという機会が訪れました。現在と違って、汽車と船を乗り継いだのです。暇はあり余るほどあるけどお金がない貧乏旅行。もちろん旅館など泊れる訳なく、すべて車中泊です。北海道へ入っても、札幌を起点として、夜札幌を出発、翌朝目的地へ着くという、夜行列車、車中泊の旅でした。とある日、眠い目に飛び込んで来た景色、それが白い牧柵に囲まれた、だだっ広い、緑のジュータンの中に、ポツリポツリといる馬の姿だったのです。何という雄大な眺めだ。こういう所で、生活が出来、仕事が出来たら、どんなに素晴らしいことかと、思ったものです。

高校生活が終わりに近づき、進路を決定しなければなりません。私は北海道旅行以来“牧場”という2文字が、頭にこびりついて離れません。何かそれらしい関係の所がないものかと、リクルートブック等を、パラパラと、めくっていると、北海道に酪農大学なるものが、有ることを知

り、そこへ行きたいと思っていましたが、岡山の蒜山高原にも、酪農の大学があると聞かされ、ここしかない、と即決したものでした。運よく入学を果たし、いよいよ現在の自分につながるスタートをしたのです。

農業、ましてや酪農など、まったく未知の世界。だいたいサラリーマンの家庭に育ち、牛の乳頭が何本ついているのかも知らないような人が、酪農に、たずさわろうというのですから、恐れを知らない何とやらです。入学して、何日もしないうちに、ペット牛担当ということで、一人が2、3頭を、分娩前後の世話、生まれた仔牛への哺乳等、責任を持たされました。牛に触ったことさえ無かった私が哺乳用のミルクを、手搾りでバケツに搾るわけですが、なかなかうまくいかなくてねえ。乳頭を、ギュッと握っても、出ないのです、ミルクが。家が酪農家だという友人に、教わりながら搾るのですが、なかなかうまくいきませんでしたわ。結局哺乳用のミルクを、3、4リットル搾るのに、一時間以上もかかっていたのではと記憶しています。その他にも牛舎の糞出しとか、デントコーンの種まきとか、今でも考えられないような人海戦術がとられていたですわねえ。とてもなつかしい思い出として残っています。何と云っても、現在自分が営んでいる酪農業のスタートが、中四国酪農大学ですから、格別の思いがあるのです。

酪大を卒業後、北海道、カナダアルバータ州での酪農実習を行い、昭和56年縁あって結婚（ムコドノですが）北海道千歳市で、酪農経営をスタート、現在に至っています。

実際に経営をしてみて、私なりにたどり着いた、私の酪農哲学、それは、ほんとうに、農業、酪農業を好きな人が、農業、酪農業をやるということです。嫌いな人は、決して農業、酪農業を行ってはいけないということです。跡取りだからとか、他にやることが、ないので仕方なくとか、そういう考えの持ち主は、絶対に成功しないから、営農を行ってはいけないのです。ほんとうに好きな人だけが営農を行うべきです。そして酪農家は自分にもっと自信を持ってほしいと思います。世の中情報社会のまっただ中多くの情報が、氾濫しています。酪農に関しても、大学の先生とか、獣医師とか、農業普及所とか、ありとあらゆる所から、講演会、勉強会等を開いてくれたりとか、雑誌、新聞からも、目に耳に情報が飛び込んで来ます。1万キロの牛には、高タンパク高エネルギーの配合飼料をこれだけビタミンとミネラルがこれだけとかいろいろ言ってくれます。でもその人達は、酪農家じゃないのです。酪農家というのは、毎日、生きている牛に、エサを与え、乳を搾り、ふれあうのです。これが酪農家なのです。ですから情報を見、聞くことは多いにやるべきですが、言うことを聞いてはいけないと思うのです。情報を酪農家がかみ砕いて自信を持って自分のものにしないでほしいと思います。自分で作った牛がよく食べてくれる最高のエサを腹いっぱい食べさせてやる、このことにつきると思います。

酪農大学校は、私に酪農家を目指す大きなものを与えてくれた所だと思います。酪農を目指し前に進み、酪農家としてスタートできた訳ですから。酪農大学へ入学する人すべてが、酪農家を目指せるよう、酪農の素晴らしさを、いっぱいいっぱい学べる所として、更に発展していただきたいと思っています。また40、50周年と躍進していただきたく切望しております。

デーリーマン  
平成6年9月号



## 酪農大と共に



## 旧本館と共に

津田清子

7月6日(木)(つちのえいぬ)(さだん)(建築、移転、新規事開始など吉)とあるこの日、長年慣れ親しんだ赤い“いらか”が美しい旧校舎は、大きなユンボで恐竜さながらに、アレヨアレヨという間に飲み込まれていきました。

歴史を終えた本館とは、右も左も、南も北も分らない昭和38年来より一緒だった者として、特に感慨深いものがありました。ポプラが屋根より低い頃のことです。

省りみれば、勤め初めの頃、専門用語は勿論のこと、分らないことだらけで、電話の対応は苦手な上に聞きとれないことも多く、そして、自分の性格もあって重厚な上司の方々との接し方とか、数々の失敗とともに大変だったことが思い出されます。

又、コピー機のない時代がしばらく続き、学生の資料から庶務的なものまで、全てがガリ版印刷に頼っていましたので、毎日毎日の“ガリ切り”は、力を込めて鉄筆で書くので、頭痛と肩コリとなって私を苦しめたものです。唯々、現在の事務器機の発達が夢のような話です。

今も脳裏にやきついている、つらくて足のふるえる事件も経験いたしました。

それは、夏の或る日、5期生のみなさんと、鳥取県羽合町へ海水浴に出かけた時のことです。楽しい楽しい思い出の1ページとなるところが、友人の一人を海で失うというショッキングな1日となってしまいました。いつまでも忘れられないそして私が人の命の重大さを身にしみて感じた最初の出来事でした。

命といえば、私事で恐縮ですが、長いお勤めの中で、鬼界へと両親を旅立せましたが、特に、母の闘病中から死に到るまでについては、当時、永井校長を始め職員の皆様に多大なご迷惑をおかけしたにも拘らず、数々の思いやりを頂戴して、大変心強く、そして試練を無事乗り越えたことは、ひたすらありがたく感謝の一念の他ありませんでした。この時に受けた恩愛は、深く心にきざまれ、永井校長の“地元あつての酪大”という言葉と共に今も仕事の支えとなって生きております。

学生さんとの関係については友達感覚の頃から、最近はおばさんが定着して参り、歳月の過ったことを思い知らされる昨今です。昨年から今年にかけて、同窓会の件で卒業生に会う機会が再三あって、懐しくそして楽しいひとときを持ちました。その際に“蒜山の自然、特に第2牧場のポプラ並木の印象は忘れられない”とか“つらくてたまらん”と思った時でも学生時代を思い返して、“あの大変さを乗り越えた自分なんだから”という自信が自分を支えてくれたという人。又、酪農大で習ったことから、はずれはしたものの“今でも酪大での精神を忘れずに頑張っている”という声を聞くにつけ、目頭がジーンとあつくなるものを覚えました。ペーパーだけの教育の他にも重要な使命があるのだなと感じた次第です。それとともに、“先生名利”とはこのことかなとも思い、私も教育のハシッコに席を置かせてもらった者として大変嬉しく思いました。

学生数が、昭和58年度から平成5年度まで減少したまま続き、これが原因かどうかは分かりませんが、廃校という暗いニュースが流れた事実があります。

しかし、昨年度は久し振りに30名以上という入学生を迎え、校内に活気が溢れました。多数の



女子学生の嬌声が学園内を響かせ、華やかさとパワーを感じさせています。

この度洋風の新校舎が完成し、いよいよ明るく開放的で斬新な教育が行われるであろうという予感と期待と、そして今日まで無事勤めさせていただけた感謝を捧げ、30年の節目にあたっての回想を終わります。

平成7年9月



## 「酪農大学校とともに」

池田 富幸

私は、昭和53年の秋、運転技術員で、財団法人の職員として採用された。蒜山で生れ、蒜山で育った私には、酪農大学校とは身近にありながらも全く無縁で、近寄りがたいお役所だと思っていた。初出勤、今日ばかりはと作業着の下にネクタイとしゃれこんで、ところが「これが裏目に出たんです」事務所に入るなり「パンチ」を一発。「ネクタイをしとったんでは仕事にならん」と、大きな声が飛んで来た。おっかなびっくり、腰が抜けそうだった。其の後も度々「ジャブ」は受けたがさて「判定の方は」。冗談はさて置き、其の日から毎日の初雪の降る頃まで稲ワラノ取り入れ作業が続いた。上手に積み込みが出来ず帰る途中何回か荷崩れを起こし、悪戦苦闘の日々となった。あの頃第二牧場への定例作業、バスの出発時間は朝6時50分だったと思う、仕事に慣れる間がなく冬を迎えた。今程道路の除雪が出来ておらず、朝はほとんどチェーンを取り付け、積雪の多い日にはダブルのチェーンを掛けた。そして、重量が後輪にかかるように学生を全員後に集めた。でも目的の終着駅（第二牧場）に到着しない事も何回かあった。当時私は、車の運転以外にこれと言って決った仕事はなく、サイロ詰め、乾草調整実習、其の他モロモロの時だけ助けっとう員として牧場へ出た。そうそう、あの当時実習の中に鎌の研ぎ方、と、言う時間があり、今でも倉庫の片隅に砥石が沢山積んである。ヘイホークも仲間の一つだ。柄が折れてホークが一本になったり、使い込んで汗が染み付いている物もある。乾草にホークを刺し、柄尻を足で固定し「青空高し」と、持ち上げる姿は本当に絵になっていた。牧場ならではの風景である。機械化の進んだ昨今ではあるが、ビデオの一コマに是非とも残して置きたいものである。まだ外にも、丸太を動かす鳶口、原野を耕す開墾鋤、等々、このような古い道具を目にするだけで、当時の学生、先生方の大変なご苦労があったものと察しがつく。以前食堂として使っていた所を、肥育牛舎にと改造されたのが15年程前ではなかったのだろうか。牛の事など全く無知な私「牛と、馬の区別がつく位い」そんな私が先ず驚いたのは、肥育されている牛が建物の栓や、ベニヤ板を食うのである。ひどい栓に至っては今にも折れそうになり、別の栓を持って行き針金で括ってある。壁のベニヤ板も姿を変えている。運動場と言うのであろう、外の遊び場は牛の臍の辺りまで泥沼、窓ガラスに至っては割れ放題、所々にドンゴロスを打ち付けてある。今、原稿を書きながら思い浮ぶのにひどいものであった。当時の経営状態など知るすべもないが、あの頃はあの頃で、どうにもならない時期ではなかったのだろうか。そうしたいろんな方々の努力、ご苦労があったからこそ今こうして一歩、一歩着実に整備が進んで来ているのではないのでしょうか。私の心に強く残っている一つに、木造作りの公舎が点々とあり、夕方になれば風呂場の煙突から煙が上っていた。作業の区切りには「一杯やるか」と公舎の空部屋で酒を飲み、手拍子でもげ歌を披露したのも懐かしい思い出です。今は其の公舎もほとんど姿を消し、特にここ1、2年の第二牧場に至っては整備もスピードアップされ、昔しの姿を変えております。皆さんにはあまり知られてないと思いま

すが、第二牧場から国民休暇村に通じる道路の下には牛道がつけられ、牛君達にとっては車との危険は全くなく、正に「歩行牛天国」ではないだろうか。創立30周年を迎えた今、酪農大学校も未来へ向って益々発展して行く事でありましょう。しかし、変ってほしくないのが自然環境です。30年前に植えられたポプラ並木、酪農大学校のシンボルとして育ち、多くの人々に親しまれ、大きな物では胴廻りが2メートルにも達しております。ところが残念な事に幹の根元に虫が入り枯れ、大風で根こそぎ倒れ本数もかなり減って元の並木にと苗木を植えてありますが何年立っても蒜山の自然が変わらず、以前のポプラ並木のように逞しく育ってほしいと願うものです。私は「自然」が大好きです。そしてこの4文字も「環境、整備」。



## 酪農大学校とともに

樋口 照夫

私にとって酪農大学校とのつながりは、今から20数年前であります。それは学生として、酪農大学校に入学してからの始まりです。その当時の同級生は現在とちがい、多人数の44名でした。今では想像がつかないだろうと思います。そのころは30名から40名が普通だったと思われます。学生時代の2年間は、いろんなことを学びよく遊びもしたように思い出されます。

その後10年縁あって、こんどは酪農大学校の職員として、勤務する様になりました。第15期生の皆様から現在の、第31期生の学生諸君であります。その間の思い出といえれば数えきれない程有ると思われます。

今この原稿を書くにあたり、何をどのように書けばよいか悩んでいます。その中で特に自分の頭の中に残っている時代のことを、少し書かせていただきます。

それは55年の冷害の年、牧草ができなくて道路沿いの草刈りに始まり、旭川の河川敷まで毎日刈払い機で草刈りをしたこととか、57年の夏の終りに台風によるポプラの木が倒れたこと、また第20期及び第26期生の人数が酪農大学校が始まっていらいももっとも少なかった時、あの人数で、毎日の作業がよくも出来たと今でも感心する次第です。このように各学年の思い出は書けばきりがないので省略させていただきます。そして私にとって最も大変な時が、ちょうど酪農大学校に務め始めて10年目の年、1990年の時です。それは妻がまだ若き40才で、この世を去ったことです。病気の名前は胃ガンでした。1月に入院し手術をおこない、3月終りに退院までこぎつけましたが4月の終りに再入院という結果、それから8月の終りまで土曜日及び日曜日に家に帰るといふ毎日の生活でした。

そのころは毎日の仕事が終わればその足で病院に通ったものでした。そして9月25日に死亡とあいなり、その時ほど自分自身、体の具合について健康であることを痛感させられた時でした。ですから卒業生の皆様は、ほとんどの人が酪農という職業がら、毎日、毎日ほとんど休みなく働いていることですので、健康管理には特に気を付けてほしいものです。この時が私の一番つらい出来ごとだったと思います。それから今日まで大きなことはなかった様に思われます。

学校の方といえば、毎年何かが新しくなっています。特に今回は本館が一新され近代的な設備をもったものになります。

卒業生の皆様ぜひとも元気な姿を見せて学校の方へ足を運びください。

最後になりますが健康と、活躍を！

## 校外講師一覧表

氏 名	講 義 科 目	講 義 期 間	所 属	適 要
永友繁雄	農業経営学	昭和41年	岡山大学	
福田稔	農業経営学	昭和41年～45年	岡山大学	
米田茂男	土 壤 学	昭和41年～43年 昭和46年～47年	岡山大学	
小松伊三郎	育 種 学	昭和41年～45年	岡山大学	
今村経明	乳学・畜産製造学	昭和41年～42年	岡山大学	
須藤浩	飼 料 学	昭和41年～48年	岡山大学	
下瀬昇	肥 料 学	昭和41年～47年 平成元年	岡山大学	
三秋尚	飼 料 学	昭和41年～47年	岡山大学	
目瀬守男	農業経営学	昭和42年～現在	岡山大学	
中江利孝	乳学・乳製品製造学	昭和43年～63年	岡山大学	
河崎利夫	肥 料 学	昭和44年～60年	岡山大学	
羽淵統次郎	農業経営学	昭和44年	岡山大学	
河内知道	土 壤 学	昭和44年～61年	岡山大学	
内田仙二	飼 料 学	昭和49年～62年	岡山大学	
森次益三	肥 料 学	昭和50年	岡山大学	
稲本志良	農業経営学	昭和53年～56年	岡山大学	
片岡啓	畜産製造学	昭和53年～63年	岡山大学	
佐藤豊信	農業経済学	昭和57年～現在	岡山大学	
三宅靖人	肥料学・土壌学	昭和61年～63年 平成3年～4年	岡山大学	
宮本拓	乳 学	平成元年～現在	岡山大学	
関谷次郎	肥 料 学	平成2年	岡山大学	
福井清一	農業経済学	昭和61年～62年	岡山大学	
森次益三	肥料学・土壌学	平成5年～現在	香川大学	
田口鎮雄	農業経営学	昭和41年～44年	鳥取大学	
尾崎繁	酪農施設学	昭和43年～現在	鳥取大学	
石原昂	酪農機械学	昭和54年～63年	鳥取大学	
岩崎正美	酪農機械学	平成元年～現在	鳥取大学	
南三郎	肢蹄の解剖・生理・病理	平成2年～現在	鳥取大学	
吉原輝夫	牛 削 蹄 学	平成2年～現在	認定削蹄師	
木本英照	土 壤 学	昭和63年～平成3年	農業試験場	
尾崎毅	農業土木	昭和51年～58年	職業訓練校	
谷本英雄	農業土木	昭和59年	職業訓練校	

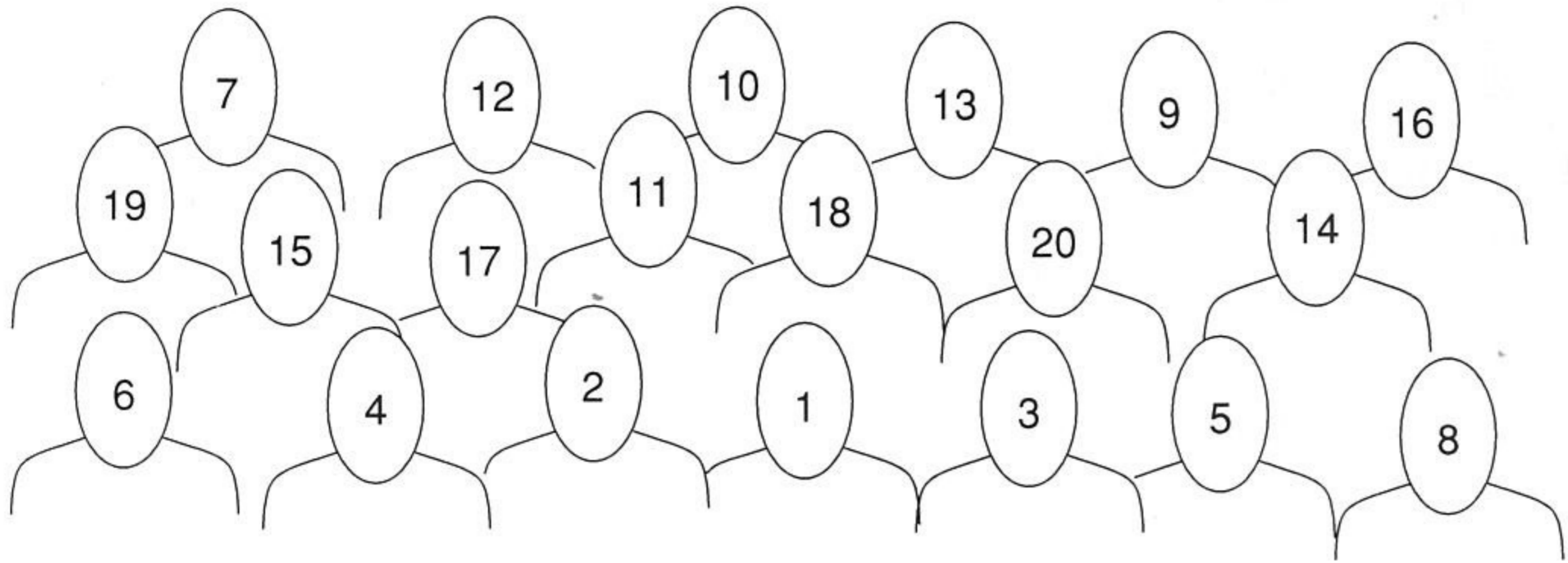
学科目担当講師名簿 (平成7年度)

講座科目名	講師名	職名
酪農経営	農業経営学	目瀬守男 岡山大学教授
	農業経済学	佐藤豊信 岡山大学教授
	畜産概論	古好秀男 (財)中国四国酪農大学校校長
	酪農経営	伊藤述史 (財)中国四国酪農大学校第一牧場長
	農業簿記	大手国栄 (財)中国四国酪農大学校総務部長
	酪農経営診断演習	伊藤述史 (財)中国四国酪農大学校第一牧場長
飼料学	飼料学	山田徹夫 (財)中国四国酪農大学校第二牧場長
	牧草草地	有安則夫 (財)中国四国酪農大学校第二牧場技師
	飼料作物	草苻耕造 (財)中国四国酪農大学校教務課長
	飼料計算演習	山田徹夫 (財)中国四国酪農大学校第二牧場長 小阪和正 (財)中国四国酪農大学校第一牧場主任
	牧草飼料作物演習	出石俊治 (財)中国四国酪農大学校教務課技師
家畜繁殖	家畜改良	錦織拓美 (財)中国四国酪農大学校第二牧場技師
	家畜繁殖	名越志郎 (財)中国四国酪農大学校教務部長
	助産技術演習	草苻耕造 (財)中国四国酪農大学校教務課長
	家畜人工受精受 精卵移植演習	伊藤述史 (財)中国四国酪農大学校第一牧場長 山田徹夫 (財)中国四国酪農大学校第二牧場長
家畜飼養 管理学	飼養管理 I	出石俊治 (財)中国四国酪農大学校教務課技師
	飼養管理 II	有富敬典 (財)中国四国酪農大学校次長 伊藤述史 (財)中国四国酪農大学校第一牧場長
	飼養管理演習	磯田博夫 (財)中国四国酪農大学校第二牧場助手 樋口照夫 (財)中国四国酪農大学校第一牧場助手
	搾乳演習	出石俊治 (財)中国四国酪農大学校教務課技師
家畜生理 衛生学	家畜衛生学 解剖・生理	有富敬典 (財)中国四国酪農大学校次長 有安則夫 (財)中国四国酪農大学校第二牧場技師
土壤肥料学	土壤学・肥料学	森次益三 香川大学教授
畜産物利用	乳学	宮本拓 岡山大学教授
	乳製品製造演習	栗木隆吉 岡山県総合畜産センター研究員
削蹄学	牛の肢蹄に関する 解剖・生理・病理	南三郎 鳥取大学教授

講座科目名	講師名	職名	
牛 削 蹄 学	吉 原 輝 夫	岡山県削蹄師会会長	
牛 の 飼 養 管 理 と 護 蹄 衛 生	古 好 秀 男	(財)中国四国酪農大学校長	
牛 の 品 種 及 び 外 貌	古 好 秀 男	(財)中国四国酪農大学校	
牛 の 改 良 及 び 審 査	小 阪 和 正	(財)中国四国酪農大学校第一牧場技師	
関 係 法 規	伊 藤 述 史	(財)中国四国酪農大学校第一牧場長	
酪農機械 施設学	酪 農 施 設 学	尾 崎 繁	鳥取大学教授
	酪 農 機 械 学	岩 崎 正 美	鳥取大学教授
	酪 農 機 械 演 習	池 田 富 幸 樋 口 照 夫 有 富 勝 仁 磯 田 博	(財)中国四国酪農大学校教務課助手 (財)中国四国酪農大学校第一牧場助手 (財)中国四国酪農大学校第一牧場助手 (財)中国四国酪農大学校第二牧場助手
卒 業 論 文	講 師 全 員		
特 別 講 義 防火・地震対策について 異文化社会と国際理解 畜産における微生物資材の利用方法 馬の取扱い方法と乗馬技術について 交通安全について 中国人から見た日本 多島の国フィリピンと子供達 米国と日本の農家 21世紀の酪農家 酪農経営の実際 山口県の畜産 広島県の畜産 兵庫県内の畜産 ここまできた先端技術 これからの先端技術(岡山県)  各県の特色ある畜産について	友 金 強 松 田 芳 行 横 田 豊 実 永 井 仁 小 槇 豊 イイ・ホーンシャ 清 久 マベル 佐藤 メアリー 奥 一 郎 渡 辺 壮 山 中 寿恵雄 西 村 正 美 上 野 悟 野 上 與志郎	真庭消防署蒜山分署長 開業獣医師(山口県)、第四期卒業生 酪農家(香川県)、第五期卒業生 (社)家畜改良事業団岡山種雄牛センター 岡山県勝山警察署交通課長 哲西町在住 哲多町在住 大佐町在住 (株)津山総合木材市場 酪農家(新庄村) 山口県農林部畜産課主幹 広島県農政部畜産課酪農係長 兵庫県農林水産部畜産課課長補佐 岡山県総合畜産センター専門研究員  鳥取県 島根県 徳島県 香川県 愛媛県 高知県	

# 現 職 員

氏 名	勤務期間	職 名	現 住 所	写真
古 好 秀 男	7. 4～現在	校 長		1
有 富 敬 典	53. 4～54. 3	第二牧場主任		2
	54. 4～57. 3	教 務 課 長		
	6. 4～現在	次 長		
大 手 国 栄	7. 4～現在	総 務 部 長		3
名 越 志 郎	44. 4～47. 3	第二牧場技師		4
	47. 4～49. 3	第一牧場技師		
	元. 4～5. 3	第二牧場長		
	5. 4～7. 3	経 営 部 長		
	7. 4～現在	教 務 部 長		
伊 藤 述 史	57. 4～60. 3	第二牧場長		5
	5. 4～7. 3	教 育 部 長		
	7. 4～現在	第一牧場長		
草 刈 耕 造	59. 4～60. 3	第一牧場長		6
	60. 4～62. 3	第二牧場長		
	5. 4～7. 3	第一牧場長		
	7. 4～現在	教 務 課 長		
小 阪 和 正	6. 4～現在	第一牧場主任		7
山 田 徹 夫	4. 4～5. 3	第二牧場技師		8
	5. 4～現在	第二牧場長		
出 石 俊 治	5. 4～6. 3	第一牧場技師		9
	6. 4～7. 3	第二牧場技師		
	7. 4～現在	教 務 課 技 師		
有 安 則 夫	5. 4～現在	第二牧場技師		10
綿 織 拓 美	7. 4～現在	第二牧場技師		11
小 谷 健一郎	7. 4～現在	総 務 課 主 事		12
磯 田 博	51. 4～現在	第二牧場助手		13
樋 口 照 夫	52. 4～現在	第一牧場助手		14
池 田 富 幸	54. 1～現在	教 務 課 助 手		15
有 富 勝 仁	60. 5～7. 3	第二牧場助手		16
	7. 4～現在	第一牧場助手		
津 田 清 子	38. 5～現在	総 務 課 主 事		17
道 祖 夕 力	59. 4～現在	調 理 員		18
三 牧 孝 徳	43. 4～H2. 3	第二牧場助手		19
	2. 4～現在	第二牧場臨時		
西 田 良 子	元年. 4～現在	調 理 臨 時		20



## 出身県別卒業生及

設立区分	岡山県立酪農大学校	財団法人中国四						
	卒業年次	39～42	42～51	52～61	62	63	元	2
県別	期別	1～4	1～10	11～20	21	22	23	24
兵 庫			19	31 (2)	1	3	4	2
鳥 取	3		9 (3)	10 (2)		1		
島 根	1		26 (3)	23 (6)	1		1	1
岡 山	74		170 (17)	116 (14)	8 (1)	7 (1)	9 (1)	7 (2)
広 島	1		26 (2)	16 (4)	1	1 (1)		2
山 口			15	7 (1)	1		1	1
徳 島			6	5 (1)			1	
香 川			21 (1)	9 (1)		3	1	1
愛 媛			17 (2)	14	1			1
高 知			12	12 (1)				
構成県外	5		1	8 (1)	5 (2)	2	1	5
合 計	84		322 (28)	251 (33)	18 (3)	17 (2)	18 (1)	20 (2)

注：（ ）内は女子で内数



# び 在 校 生 の 状 況

平成7年4月1日現在

国 酪 農 大 学 校						卒業生 合 計	在 校 生		
3	4	5	6	7	小 計		6 入学	7 入学	小 計
25	26	27	28	29	計		30	31	
3	2 (1)	4	5	1	75 (3)	75 (3)	1	1	2
	1	1	2 (1)	2	26 (6)	29 (6)		1	1
1	1		2 (1)	2	58 (10)	59 (10)	6 (2)	1 (1)	7 (3)
7 (2)	2	6 (1)	7 (3)	7 (3)	346 (45)	420 (45)	5 (2)	7 (1)	12 (3)
	2	2	2	8 (2)	60 (9)	61 (9)	1 (1)		1 (1)
			2 (1)	1 (1)	28 (3)	28 (3)	3 (2)	3 (1)	6 (3)
1					13 (1)	13 (1)	1		1
1					36 (2)	36 (2)		1	1
2	1			3	39 (2)	39 (2)	3 (1)	1	4 (1)
	1		1	1	27 (1)	27 (1)	1	3	4
3	2	5 (1)	5 (1)	6	43 (5)	48 (5)	12 (5)	4 (3)	16 (8)
18 (2)	12 (1)	18 (2)	26 (7)	31 (6)	751 (87)	835 (87)	33 (13)	22 (6)	55 (19)

## 卒業生の就業状況 (平成7年6月1日現在)

県立1期から財団29期を対象 (813人)

卒業生数 835人 (内女性87人)

物故者 22人

項目	人数	割合
酪農専業	334人	41.1%
酪農兼業	12	1.5
酪農ヘルパー専業	17	2.0
小計	363	44.6
肥育経営	20	2.5
県酪連、経済連、 農協、県、役場等	109	13.4
乳業、飼料、機械 等畜産関係職場	63	7.8
農林業に従事 (果樹野菜等)	54	6.7
その他	204	25.0
計	813	100

## 編集後記

財団法人創立30周年という節目にあたり「30年のあゆみ」を発刊いたしました。

本冊子を発刊するにあたりご祝辞をいただいた関係者の方々を始め原稿及び写真を依頼した皆様方には大変ご無理をお願いし、ここに、深甚なる謝意を表すしだいです。

本誌が、各位の情報源として活用されるならば、編集にたずさわった者として望外の喜びであります。

この記念誌を絆として各位の親交が一層深まり新世紀に向って歩調を合わせ、更に大きく飛躍されることを願い、(財)中国四国酪農大学校の発展のため皆様方の末永いご援助を賜りますようお願いするとともに、ますますのご健勝をお祈りいたします。

最後に発刊にあたりご協力をいただいた勝美印刷様に、心より厚く感謝申し上げます。

財団法人中国四国酪農大学校創立30周年記念

### 30年のあゆみ

---

印刷発行 平成7年11月  
編集発行 岡山県真庭郡川上村西茅部632  
(財)中国四国酪農大学校  
電話 0867-66-3651  
FAX 0867-66-3652  
印刷 鳥取県東伯郡羽合町長瀬818-1  
勝美印刷株式会社鳥取支店  
電話 (0858) 35-4411 〒682-07